

祝福を継ぐもの【完結】

李座空

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一九九五年六月四日、第三十六回宝塚記念で競走馬・ライスシャワー号は非業の最期を遂げた。淀の坂で自分は死ぬ——その記憶は予知夢のごとく幻出し、ウマ娘・ライスシャワーを苦しめる。歓喜も祝福も得ることなく彼女は最期を迎えるのか、滅びの運命は決まっているのか。やがて不吉な予感は現実となり、ライスシャワーは悲劇の宝塚記念へと導かれる。昏迷の果てに辿り着いた淀の坂の先で待つ、驚愕の結末とは!?!ウマ娘アニメ二期、その後のライスシャワーを描いた二次創作小説。

※今作はTVアニメ「ウマ娘プリティーダービー Season 2」の二次創作作品です。原作のイメージと異なる世界観、キャラクター表現等気になる方は閲覧をご遠

慮願います。

目次

序章	1
第一章 病床	5
第二章 呪縛	24
第三章 彷徨	43
第四章 餓鬼	78
第五章 運命	99
第六章 祝福	136
終章	172
あとがき	187

序章

何かが碎ける音がした。世界が流転しひっくり返った。

弾けて舞う土と芝。うねり狂うコーナー柵。真つ白な空。眩しすぎる太陽。観客一杯のスタンド。聳え立つ黒いターフビジョン。目まぐるしく移り変わる景色が、スローモーションのように視界を流れていく。

身体じゅうが痛い。時速六〇キロ以上から転倒した衝撃で、全身に無数の傷が入る。それはこの世界に身を置く以上、はなから覚悟していた痛みだった。決して初めて味わう痛苦ではない。

しかしここまで共に走ってきた『おまえ』にとってこれは――。

全身を打った衝撃で曖昧となった意識の中、会場の騒然とした雰囲気伝わってくる。悲鳴や絶叫の音が幾つも聞こえてくる。

何が起こったのかは認識していた。落馬だ。第三コーナーで騎乗馬が転倒し、ターフ上に身を投げ出されたのだ。

係員や関係者たちが集まってきた。仰向けになったままの顔を覗き込んで口々に大丈夫か、どこが痛むか、などと訊いてくる。返事は出来そうにない。喉は引き攣ったよ

うに動かず、空いたままの口は過呼吸でも起こしたように息を継ぐだけしか出来ない。それよりあいつは大丈夫なのか。気掛かりなのは自分の身体以上に、ここまで共に走り抜いてきた同胞の安否だった。

激痛を堪えながらやつとの思いで首をもたげ、すぐ横をかぶり見る。周囲に集まった係員達の足の合間から見えた。数メートル離れた場所でも同じように係員達が参集して、その輪の中には土煙にまみれた漆黒の馬体が横たえている。

どうか無事であれと心中で祈ったのも一瞬だった。輪になって立つ者達の諦観の表情からすぐに察した。助からないのだと。

駄目だ、まだ逝くな。

不意にこれまでのことが脳裏に蘇ってきて、狂おしい程に胸を詰まらせる。

今までずっと数々の誹りを受け、辛酸を舐めてきた。身悶えする程の雌伏の時を共に過ごしてきた。それが今日ようやく報われる筈だった。どれだけ望んでも得られなかったものを、手に入れられる絶好の機会が巡ってきたというのに、何故こんなことになつたのだろう。

この日のレースに向けた関係者達からの鼓吹の言葉が心中を掠める。もう悪役などと言わせない、今度こそあいつをヒーローにしてやってくれ——。それがあいつを支えてきた多くの者達の総意だった。

彼らも、そして自分も、『おまえ』に夢を見ていた。その夢を乗せて、この淀の舞台を駆け抜ける筈だった。しかし悲願が果たされることはもう、ない。

『おまえ』はその小さな馬体で、ただひたむきに走り続けてきた。見る者に歓喜を与えようと頑張ってきたのだ。その報いが、これなのか。あんまりだ、あまりにも救いが無い。運命とは斯くも残酷なものなのか……。

漆黒の馬体を診ていた白衣の獣医が二、三度首を振り、観念した面持ちで医療器具を取り出した。筋弛緩剤の充填された注射器。それが意味するところは明白だった。

予後不良。

待つてくれ。まだそいつにはやり残したことがある。命を奪わないでくれ——。

その叫びが届くことはなかった。負傷した身体には最早その余力さえ残されておらず、掠れ声にもならなかった。深い失意と絶望に吞まれるように、視界は急速に闇に塗り潰され薄れていく。次に目が覚めるのは、全てが終わった後だった。

絶えることのない喧騒が続く中、抑揚のないアナウンスが場内に虚しく響く。

『お知らせします。只今のレースで、十六番・ライスシャワー号は、他の馬に関係なく故障を発症し、競走を中止したものであります』

その日、京都競馬場にて一つの事件が起きた。ある競走馬のレース中の転倒、故障による安楽死措置。それは『淀の悲劇』と呼ばれ、競馬界とそれに関わる人々に深い傷を

残っていた。

時に、一九九五年六月四日。第三十六回宝塚記念での出来事である。

第一章 病床

「精密検査の結果も前回同様良好、経過は順調です。こう言つては何だが、医者としても信じられませんが。不治と言われた繋靱帯炎をここまで克服するとは」

「そうですね。私自身も不思議に思っているほどで」

主治医ともう何度も繰り返したやりとりをしながら、メジロマックイーンはいそいそと帰り支度を整える。診察室の机上に置かれた患者用資料や処方箋を鞆に仕舞い込むと、左手首に目線を落とす。アンティークの腕時計が指す時刻は午後二時二九分。彼女の予想時間通りに定例診察は終わった。次の予定まで約三〇分。もう少し主治医と雑談をしても時間は余ると思つた彼女は、収納を終えた鞆を膝上に置き、にこやかに口を開く。

「一番の薬はやはり去年のあのレースでしょうね」

「ああ、あの有馬記念。あれは胸が熱くなりましたな、この歳にもなつてテレビの前で大泣きしてしまいましたよ。本当に凄い光景だった」

「あの『奇跡』を間近に見られたから、いい刺激を貰えたのかもしれない。だからこの故障を克服する『奇跡』を私も、なんて言うて笑われるでしょうけれど」

自嘲気味にマックイーンが言う。主治医は笑うことなく、静かに首を振る。現にもう一つの奇跡が徐々に実りつつあるのを彼はつぶさに見てきている。

左脚部繫靱帯炎。昨年 of 天皇賞（秋）を目前に彼女は故障を発症した。それはウマ娘にとつて不治といわれるものだった。走ることはおろか、悪化すれば日常生活さえまならなくなる故障。トウカイテイオーとまた一緒に走り、真の決着を着けたいと願っていた彼女を、どん底に叩き落とすものだった。もう走れない。完治出来る見込みもほとんどない。テイオーとの約束はもう守れない、奇跡でも起きない限り。絶望したマックイーンは全てを投げ出そうとした。ウマ娘としての使命も友との約束も、何もかも投げ出そうとした。

だがテイオーは昨年の有馬記念を目前にしてこう云った。「奇跡が起きなきや無理だ。だから起こすよ、奇跡。ボクが証明して見せる。ボクとマックイーンはもう一度絶対走れるようになる」

そしてテイオーは克つた。あらゆる不利を跳ね返し、絶対不可とされた状況を覆し、有馬記念で奇跡の復活を遂げた。最もテイオーに近い場所において、最も親しかったマックイーンがそれを目の当たりにして如何な影響を受けたのか、とても論理的説明がつかものではないが、その日を境に彼女の脚が変わった。少しずつ、本当にゆっくりではあったが快方へと向かい始めたのだ。

まだ完治したわけではなく予断は許されない。元のように走れるのも遙か先の話だろう。それでも次は私の番だ、私が奇跡を起こすのだといわんばかりにマックイーンの脚は確かに一歩ずつ進み続けている。

「とにかく、無理は絶対なさらないで下さい。ここまでくれば完治も夢ではありません。期待しておりますよ、お嬢様」

暫し談笑したのち、次に待つ患者の気配を察したのか、主治医は膝を叩いて立ち上がると会話を締め括った。

マックイーンも長居をしてみましたと思い、慌ただしく鞆を手に取ると一礼して診察室を立ち去る。期待している、という言葉に内なる手応えを噛み締めながら。

診察室を出た後は受付で診察代の支払手続きを済ませ、エレベーターに乗り病院の五階まで移動した。いつもならば彼女の実家であるメジロ家お抱えの執事が送迎に現れるのだが、その姿は見えない。マックイーンにはまだ用事が残っていた。

五階のサービスカウンターの前を交わし、フロア端にある別館への連絡通路を往く。午後の西日が照りつける廊下を真っすぐ抜けながら、鞆から一枚のメモ用紙を取り出した。白地の紙切れには『二号棟515』の文字。それを見ながら、マックイーンは連絡通路を抜けて入院患者用の病室の並ぶ病棟フロアに進入する。

もう一つの用事とは入院見舞いだった。彼女が治療のため通院するトレセン学園最

寄りの府中総合病院には、入院を要する故障を負ったウマ娘専用の入院病床がある。この日、自身の通院のため病院に訪れたその足で、ある人物のお見舞いをするつもりだった。

「ええと、ここにすわね」

程なく件の病室の前まで辿り着き、メモと病室番号を見比べ患者名プレートも確認すると、彼女は小さく咳払いしたのち戸をノックする。

「どうぞ」室内からあどけない少女のような声が聞こえたのを確認して引き戸をするすると開いた。

病室は一人用個室となっていた。かつてマックイーンと同じ「スピカ」のメンバー、サイレンススズカが故障で入院していた時と同様のレイアウトの病室だ。

「こんにちは。マックイーンさん、来てくれたんだ」ベッドの上で顔馴染みであるウマ娘、ライスシャワーが上体を起こして出迎えた。

室内にはもう一人。どうやら先客らしい。同じく顔馴染みのミホノブルボンがサイドチェアに腰掛けていた。

「お久しぶりですライスさん、それにブルボンさんも。偶然ですね、お見舞いの時間が被っていたとは」

「はい、少し前から来ていました」

互いに挨拶を交わす三者。ブルボンは立ち上がると折り畳まれていたサイドチェアをもう一つ開いて、「どうぞこちらに」座るよう促す。ありがとう、と一礼しマックイーンも着席した。

ベッドの傍らに視線を向けると、サイドテーブルの上にはフラワーギフトや菓子折り、単行本等が所狭しと並べられている。先んじて訪れたライスと縁のある者達からの見舞い品だろう。ブルボンや『スピカ』の面々が持参したと思しき品もその中にちらほら見られた。

「これ、つまらないものですが。お身体に良いと思います。どうぞ受け取って下さいな」座るなり、マックイーンも持参した紙袋を開き中身を手渡す。両手で丁度抱えられる大きさの直方体の箱。中身はフルーツギフトだった。見舞い品として予め準備していたもので、整った色味や形、装丁から決して安価な代物ではないことが覗える。

「わあ、ありがとう。リングに、メロン、パイナップルに……色とりどりできれい」目を輝かせたライスの口端が思わず垂れそうになる。果物類の色鮮やかな見た目への感激もさることながら、昼下がりの時間帯とあって少なからず空腹であったらしい。すぐそれを察したのか、ブルボンは笑みを浮かべながら「よろしければ切り分けます」と提案した。

「いいの、ブルボンさん？ じゃあいま皆で食べようよ。いいかな、マックイーンさん」

「ふふ。勿論ですわ」

三人はしばらく、マックイーンが持ち寄った高級フルーツを肴に、話の花を咲かせた。病室内にささやかな笑い声と甘酸っぱい果物の香りが満ちる。

ライスシャワー、ミホノブルボン、メジロマックイーン。三人には奇妙な縁がある。ライスはかつて二人の大記録がかかったレースで勝利しその達成を阻んだ。ブルボンは無敗の三冠を賭けての菊花賞で、マックイーンは三連覇のかかった天皇賞（春）で、ライスの驚異的な差し脚により破られている。

しかし二人はそれを憎んでなどいない。生粋のウマ娘がレースという戦場で魂の応酬をした上での結果だ。そこに恨みも辛みもなく、寧ろ上には上がいる、レースの真の醍醐味を教えてくれた『ヒーロー』であり『ライバル』として、以後二人はライスと親交を持ち、絆を深めた。ライスもまた両者を強く信頼し尊敬すべき大切な仲間として慕うようになった。

「それにしても、お元気そうでした。春の天皇賞直前に右管骨の故障で入院と聞いて。治療の方も山場は越えたと聞きましたが、退院はいつ頃に？」

暫し会話が続くうち、話題はライスの退院後のことに移っていた。マックイーンが問うとライスは少し視線を落としながら返事をする。

「う、うん。退院はもうすぐ、お医者さんが十月中には復帰も出来るだろうって」
「そうですか。復帰は早く叶いそう、ということですね」

ライスシャワーが故障したのはこの年の春のことだった。連覇が懸かった天皇賞（春）を目前に控えた追い込みのトレーニング中、右管骨を骨折。競走ウマ娘としての選手生命を危ぶまれる程の怪我で、一時は界限を騒然とさせた。天皇賞の出走は当然取り消し、即入院が決まり、以後治療とリハビリに専念せざるを得なくなった。

本当はもつと早く見舞いへ来るべきだと思っていたマックイーンだが、彼女自身も実家での長期療養や学園復学後の勉学の巻き返しに多忙を極めタイミングが合わず、ようやくこの日に実現したのだ。

「復帰と言えば、そうそう。先日の中京でのレース、見ましたわブルボンさん。最後方から直線での末脚、復帰戦で一着。素晴らしい走りでしたわ」

「いえ。デビュー戦の時のように、初心に返りがむしやりに走っただけ。課題も多く見つかりました。元の走りにはまだまだです」

復帰繋がりです度度はブルボンに話が振られる。彼女もライスと対決した菊花賞後、怪我に苦しみ長らく戦線を離れていたが、ごく最近開催されたオープン特別で満を持して復帰、見事に白星を挙げていた。

トップクラスをひた走るウマ娘ほど、怪我と隣り合わせの宿命とよく言われる。この

三人もまさにそうだろう。だがそれを乗り越えて再び走り、勝利と栄光を掴もうとするのも彼女らの本能。

ブルボンは一足早く再起の道を歩み出した。マックイーンもそれを心から嬉しく思い、自分もそれに続かねばと心中で誓った。

「ライスさんも十月中に復帰出来るなら、その後はどうお考えです？ 復帰戦は年末あたりになるのですか」

もう一度、ライスに話が振られる。マックイーンとしては、自身より先に復帰予定のライスの動向は気になるのだ。

「……。まだはつきりと決めてないけど、一応はそのつもりかな」

どこか歯切れ悪くライスは答える。ここでおや、とマックイーンは感じた。先程退院の時期を訊ねた時も同様に感じた妙な違和感。その正体を認識するよりも早く「マックイーンさんはいつ頃になりそう？」少し慌てた様子でライスが問い返してくる。

「私は、復帰にはまだまだかかりますわ。レースはおろかトレーニングも主治医から止められていて。当面はリハビリ続きですわね」

「そう……。なんだ」

気まずいことを聞いてしまったと、ライスは俯いてマックイーンから目線を逸らした。八の字眉と伏せた瞼が彼女の憐憫さを一層際立たせる。

(気にすることありませんのに) マックイーンは一つ息をつき、ベッド上のライスの手に、自身の手も添えながら口を開く。

「私も必ず復帰してみせます。もともとはテイオーと決着をつける為に開始した治療ですが復帰した暁には、お二人とも一緒に走りたい。私とブルボンさんにとっては、ライスさんへのリターンマツチという形になりますわね。だからもう少しの辛抱、頑張つて下さい。今でもあなたは私達にとつて、ライバルでありヒーローなのですから」

気落ちしたライスを気遣い、鼓舞する意図を込めてマックイーンは落ち着いた口調で論じた。言葉に一切澱みはない、名門メジロの第一人者として、一人のウマ娘としての、友を気遣う薫陶に他ならなかった。

「……そうだね。ライスも、頑張るから」

しかし、それにもライスシャワーは躊躇いがちの横顔で、オウム返しに答えるのみであった。

「マックイーンさんも感じましたか」

見舞いを終え、病室を後にしたエレベーターの中でブルボンは唐突に言った。いきなりだったのでマックイーンも「えっ」と間の抜けた返事をしてしまう。ブルボンは向き直り、マックイーンの顔をじつと見ながらも一度口を開く。ライスといた時とは打つ

て変わって神妙な面持ちだった。

「違和感です。ライスから感じる違和感を」

主語が付け加えられ、それでマックイーンも理解した。十分に分かる気がした。病室での会話の途中、何度かライスから感じた態度の異変のことだ。

「ええ、何だか話の最中で急に元気がなくなるといいますか。まるで」

まるで何かを怖れているような、触れてほしくない事があるような振舞いだったとマックイーンは思い返す。

最初に病室に入った時、ライスは明るく振舞い迎えてくれた。フルーツを食べながら、談笑をしている時も笑顔を見せていた。それがある特定の話題を振った際、表情を曇らせ笑顔を引っ込めた。触れないで欲しい、といわんばかりに。

「そうですね。退院や復帰後の話をする決めてライスさん、一歩引いたような反応になっていました」

流石のマックイーン、違和感の分析は早かった。故障が完治してからの話になるとライスは決まればつが悪そうに目線を逸らした。本来ならば明るい話題の筈が、何故かライス自身がそう感じていないようだった。

推察を聞いたブルボンは得心して大きく頷く、更に話を進める為の前提を確認していたようだ。少し間を置いたのち、再度おもむろに口を開く。

「実は今日、ここでマックイーンさんと会ったのは偶然ではないのです。本日午後三時、あなたが見舞いに来ることは予めライスから聞いて把握していました。あなたにはこの事を話しておきたくて」

「どういう、ことですか？」

エレベーターが地上階に着く。重くなっていく空気を吐くように乗降口が開き、夕日が差すロビーを歩きながら二人は話を続ける。

「ライスは今、スランプに陥っているようなのです。昨年、天皇賞であなたを破った後も、あの子は走り続けると決めた。ヒールと言われようと、皆から受け入れられずとも、歓喜と祝福をいつか得られると信じて走り続けると。しかし」

「結果は未だ実らず、ということですか」

スランプ。ブルボンはそう言う。実際それを裏付けるように、ライスの直近レースの成績は芳しくなかった。昨年のオールカマーで「逃亡者」ツインターボの大逃げに屈したのを皮切りに、天皇賞（秋）、ジャパンカップ、有馬記念と惨敗。年が明けてからも京都記念五着、日経賞二着とGⅡレースでも勝ち切れず、一着での勝利はマックイーンを破った天皇賞以来一度もないという有様だった。

この一連の成績不振に対し、「こんなことならブルボンとマックイーンに勝たせてやればよかった」、「大記録を壊しておきながら不甲斐無い」、「空気を読まない、期待外れ」

等、世間では冷ややかな声が多く挙がった。そこへさらに故障入院というダメ押しが入り、直近のライスシャワーは終わったウマ娘とさえ揶揄されているのが実情だった。

「私達を破った時期がピークであったとか、過酷なトレーニングの反動が来たとか、世間では憶測が飛び交っています。ですが私はそうは思わない。今は入院こそしています。が、日経賞までのライスはあの春と殆ど変わらない出来でした、それは間違い無いのです」

それでもブルボンはそう力説する。自分よりも早くからライスと親交を結び、より長く彼女の走りを見てきたのだから、そうなのだろうとマックイーンも思う。

「そうなる、考え得る原因は」

では何が。体が出来上がり、トレーニングにも問題が無いならば何が足りないというのか。マックイーンの問いにブルボンは足を止める。

いつの間にか病院外にまで出て、トレセン学園へ続く憂愁の並木道の只中で、本題に切り出すブルボンの表情は心苦しかった。

「……恐らく、精神的なもの」。ライスは非常に繊細で傷つきやすい子です。ヒールとしての立ち位置を自覚したとしても、それを乗り越えてみせると決めたのだとしても。まだあの子の心の中には、迷いや不安が、走る事への怖れが、くすぶっているのかも知れません」

「それが違和感の正体、ですか」

ブルボンを破った菊花賞と、マックイーンを破った天皇賞。ライスに対し世間は如何な反応を見せたかを二人は思い出す。

共に大記録が懸かった大レース、押し寄せた大観衆の前で大本命を打ち破ったライスを待っていたのは歓喜でも祝福でも無かった。偉業達成の期待を水泡に帰され、興奮めした観衆達からの心無い罵詈雑言と野次の嵐。仮にも勝利をもぎ取ったにも関わらず、彼女に『ヒール』という印象を決定付けた、皮肉な過去。

この時の辛い経験が、ライスの心の奥底に今もなお消えないコンプレックスとなつて巢食つていて、その憂慮が長く続く不振によつて蒸し返して故障入院により一気に膨れ上がってきたのではないか。ゆえに復帰後の展望についても消極的になつてしまつているのではないか。ブルボンはそれを案じていたのだ。

「……もう一つ気になる事も聞きました。さつきマックイーンさんが来る前にライスが話していたのですが、ここ最近ずっと同じ夢を繰り返し見ると言っていました。それがとても『怖い夢』、とも」

ブルボンはさらに懸念を付け足す。

「怖い、夢？」曖昧で腑に落ちない内容に、マックイーンは怪訝そうに首を傾げる。「どのような、夢なのでしょう？」

「聞きました、が。とても思い返すのが辛そうで聞くのはやめました。どんな意味があるのかは分かりませんが……」

そこまで話し終えてブルボンの口は噤まれた。心がかりな面持ちの彼女を見、マックイーンは思ったよりも事態が深刻なのだと認識する。

ブルボンの苦悩も、ライスの苦悩も痛いほど分かるものだった。今まさにもがき、苦しんでいる友を放っておけない、どうにかしてあげたいというブルボンの痛切な希求。不振と怪我にあえぎ、心に影を落とし、先行きを見通せず不安に駆られるライス。

マックイーンも両者と似たような経験を味わってきた。『スピカ』でテイオーと切磋琢磨しあつてきた中で、互いに苦しみ、涙を流しつつも、手を差し伸べ合い困難を乗り越えてきた。

ならば今この状況で自身が為すべき事は決まっている。マックイーンは迷いなく決心すると、ブルボンに歩み寄ってその手を取る。

「話は分かりました。どうやら一つ大事な用が増えそうですね」

「マックイーンさん……」

「ライスシャワーさんを支えてあげられるのは、私達二人だけなのかも知れませんが。あの走りを最も間近で見た、本当の勝負をご教示戴いた私達だからこそ。ささやかながら協力致しましょう、今の彼女を見過ごせはしません」

テイオーと同様、ライスもライバルの一人。ライバルと書いて、友ともいうのだ。そう思いマッククイーンはブルボンに心の内を晒し協力を申し出た。普段は表情変化に乏しいブルボンも微笑み胸をつまらせ「ありがとう、マッククイーンさん」と答えるのだった。

その夜、トレセン学園に帰った二人は食堂で夕食を交えながら、寮の門限一杯まで以後の作戦を練っていたという。二人でライスの復帰を支援しようというささやかな計画がこの日スタートしたのだった。

だがマッククイーンもブルボンも未だ知る由も無い。この先、ライスを待ち受ける運命が想像を絶するものだということを。

『夢の中で、ライスは走っているの。どこか分からない、真つ暗なレース場を。そこで何か”が”ずつとライスを追い掛けてくる。足音はどんどん大きくなってだんだん近づいてくる。それと色んな声が聞こえてくるんだ。何を言ってるのかは分からない。分からないのに、何故かそれを聞くと怖くて、涙が出てきて。もう思い出せない、思い出せないよ』

何も言えなかった。

ブルボンさんにも、マックイーンさんにも、その夢のせいで走るのを怖れているなんて。

本当はレース復帰を怖れているなんて。

口にすると、それが本当になってしまうようで。

あの夢を見るようになったのは年が明けた頃からだった。それは夜毎、眠りに落ちた私の脳内で幾度も繰り返され、功を焦る心の憔悴に拍車をかけた。

夢の内容はいつも決まったものだった。闇の中を、私は息急ぎ必死に駆けている。それは真つ暗なターフの只中。走っているのは自分だけで他にウマ娘の姿は見えない。だけど気配を感じる。何か、何かが、後ろから自分を追いかけてくる。地面を蹴る音は異様に大きく、幾重にも折り重なった、まるで人ならぬ怪物のような重々しい足音。それから逃れるように、私は不安に駆られ必死に走る。

やがてどこからともなく声が聞こえだす。

『ぼつと出の脇役に、偉業を阻止されるなんて』

『この悪役が、どの面下げて出走する気だ』

『無敗の三冠が見たかったんだ』

『天皇賞三連覇が、消えちまったよ』

『出てこなければよかったんだ』

かつて聞いたことのある、呪詛の声。ヒールとして投げられる声。声の主の姿などない、まるで地獄の底から響いてくるような心を締め上げる怨嗟の数々。

聞きたくない、聞きたくない――。

そう思い耳を塞ぐ。しかしそれでも聞こえるものがある。怪物の足音。さつきよりもずっと大きく、間近に迫ってきている。それに伴い体を苛む重圧が、緊張が増す。怖れるあまりスパートをかけた。かえって足はもつれ、思うように前に進めない。

『この馬……領はこ……から。次……菊……で、徹……マークし……』

『倒せ、メジ……を！お前なら……三連覇……ど、碎……て……やれ！』

『誰が……と言……と、……はヒ……ローだ、……の厩舎にと……てお前は……ロー……だ！』

声が変わる。それまでと違い怨嗟の声ではないが、言葉の内容は砂嵐が被ったように途切れ途切れで殆ど聞き取れない。

しかし何故だろう。自分も覚えていない遥か遠くで、記憶の奥底に眠っていたような、何処かで聞いたその言葉の欠片たちは私の心を一層粟立たせた。

知らない、知らない――分からないよ。

不気味な既視感。押し迫った不安が恐怖に変わっていくのが自分でも分かる。

やがて暗闇のコースは右に湾曲していく。不思議とそこが『第三コーナー』だといつ

も分かった。何故かそうであると身体が断じるのだ。このまま第四コーナーも曲がればホームストレッチ、その先に待っているのはゴール。

そこまで走り切ればこの悪夢は終わる、辛くて怖い思いをするのもおしまいだ。そんな根拠のない自信を自分に言い聞かせようとしたその時。

そう、いつも決まつてこの第三コーナーの下り坂へ入つた時に、怪物の足音が並ぶ。すぐ真横の大外を抜いていく。私は驚愕に目を見開きいつも見るのだ。自分の体の五倍以上はあろう、漆黒を纏う巨大な「それ」が、私を流し目に抜き去ろうとするのを。

その瞬間、私は金縛りに掛かったかのように動けなくなる。手が、足が、時間が、すべてがそこで静止する。

『この小……な馬体……は、種……として、価値は知……て』

『無茶だ、コ……ツの疲労……考……てや……てくれ!』

『引退す……ま……に、まだ実績が必……な……だ』

『出……しかあるま……、宝塚……念に……!』

動きを止められた身に、最後に聞こえてくる声。さっきの声と同じでノイズがかった曖昧な声。だが明らかに違うのは、その声が悲愴さと苦渋に満ち満ちた声だということ。

そして何故だろう。この声を聴くたびに私はいつも大粒の涙を流すのだ。理由も分

からない、そもそも話している内容さえも分からないのに、独りでに涙がとめどなく湧き出でてくる。

私が見るこの夢は決まっただけでいつもここで唐突に途切れる。うなされて飛び起き、腫らした目を擦りながらいつも思う。幾重にも折り重なり響いてくるあの声は一体何なのか、夢の中のターフで追い掛けてくる怪物は一体何なのか。

そして何故いつも決まっただけで、第三コーナーで夢が終わるのだろうか。

私の望みしもの、それは歓喜と祝福。自らの走りを見てくれる皆に幸せを運ぶこと。でももしも、それは叶わぬ運命だと初めから決まっていたとしたら。走り続ける果てに辿るべき末路がもう決まっていたとしたら。

これは私——ライスシャワーの運命を辿る物語である。

第二章 呪縛

あんな夢を見るようになったのは、

他人を羨むから、嫉妬するから、妬んだりするから、

ライスが悪い子になってしまったからだ。

だからきつと神様が怒っているのかもしれない。

『ヒール』に相応しい、と。

去年の暮れの第三十八回有馬記念。そのターフには私もいた。

レース終盤、最終コーナーを回っての立ち上がり。順位は七、八番手だろうか。既にスパートに入っていたピワハヤヒデさんの姿は遙か前方に見えた。大逃げを見せていたパーマーさんは抜き去られ、ラストスパートをかけた他のウマ娘達もその背に追いつけるだけの脚を残してはいなかった。菊花賞よりの前評判通り、圧倒的という他無かつた。もう誰も追いつけない、勿論、私も。勝者は決まったと走りながらに思った。

でもただ一人、食らいつくようにその背を目掛けて猛追していく者がいた。私も見知っていたウマ娘。かつてブルボンさんやマックイーンさん達と共に、悩んでいた自分を説得し背中を押してくれたウマ娘のひとり。

トウカイテイオーさんだった。

必勝パターンに乗りもはや誰も止められないと思われたビワハヤヒデさんをテイオーさんは捉えた。体の限界はどうに超えていた筈なのに。まるでそれを気力と執念、否、それらでさえ説明も付かない——途方もない不可思議な力で補うように、末脚を開放したテイオーさんはそのままゴールへ滑り込んだ。

二分の一バ身差。不落と思われたビワハヤヒデさんの前に、テイオーさんがいた。

結果的に私はこのレースを八着で終えた。だけどその時は自分の順位はどうでも良かった。目の前で起きた、同じターフで確かに見た奇跡。その圧倒的な出来事を目の当たりにし、胸が一杯になるようだった。

観客席から湧き上がるのは割れんばかりの声援。大健闘を、大復活を讃える数々の声。『スピカ』のメンバーや『カノープス』、『リギル』の皆も涙を流してテイオーさんを褒め称えていた。絶えることなく続く歓喜と祝福のコールは、とても大きな渦となつて会場全体を一つにしていくようだった。

『……おめでとうございます』

ネイチャヤさん達に揉みくちやにされ、ターフに倒れるテイオーさんへ私はそう言った。言わずにはいられなかった。幾度の故障を乗り越えて、幾多の思いを背負って一年ぶりに勝ち取った勝利を祝福せずにはいられなかった。心の底からそう言つてあげた

いと思つたからだ。

ただその時、私の心の奥底にはもう一つ別の思いがあつた。純粹に称賛し勞つてあげたいという思いとは裏腹に、心底で微かに、確かに沸き立つ黒々とした思い。

『——私も欲しい。この絶えることの無い歡喜と祝福を。同じように浴びたい——』

菊花賞と天皇賞(春)。かつて二度GIの重賞レースで勝利した時、私は歡喜と祝福を受けることはなかつた。代わりに待つていたのは落胆と呪詛の声だつた。勝利を得たにも関わらず私に回つてきたのはヒールとしての役回りだつた。

それが単に間が悪かつた結果というのはいふまでも分かつている。ヒールの扱いを受けることにもすつかり慣れてはいた。しかしそれでも、否、だからこそ。あの感動の渦が揺り動かされた凄まじい光景を間近で目の当たりにして、私ははつきり、明確に羨んだ。恨めしい、と思つた。

なぜ自分は報われないのか。なぜ後ろ指を指されなくてはならないのか。皆は勝てば喜ばれるのになぜ自分は誹りを受けなければならぬのか。どうして、自分だけがこんな思いをしないといけないのか——。

決して人には語れない感情だつた。黒々とした心底の思いはその日を境に日に日に大きく、強くなつていく。気が付けば自らの身をも焦がすように肥大していくこの気持ちは紛れもない、嫉妬。それは知らぬうちに心と体を蝕み、いつしか私に深い影を落と

していく。

どうすればいい。勝利を得るには、歓喜と祝福を得るためにはどうすればいい——？
そう苦悩し迷いを抱き始めていた矢先のことだった。今年の春の天皇賞前週のト
レーニング中に私は骨折した。放課後の誰も居ない練習コースでの出来事だった。

偶々様子を見て来てくれたブルボンさんの通報がなければどうなっていたか分から
なかった。次に気がついた時に私が居たのは病院のベッド。右脚にはギプスが嵌めら
れ動かすことすらままならない。右管骨の骨折。先生からは半年以上かかるとも、悪化
すれば競走引退も有り得ると宣告された。目の前が真っ暗になるようだった。

入院した病室で出来る事は殆ど何もなかった。学園の教科書を読み受けられない授
業を独学するか、スマホを触るか、備え付けのテレビを見るかの三択。

入院当初はテレビを見るのは避けていた。『ライスシャワー骨折』『引退の可能性も』
『不振の只中でのダメ押し』画面の向こうで好き勝手な文言を並べ立て、世論を煽られる
のがとても嫌だった。何もする意欲が無くなっていき、無気力になっていくのが自覚で
きて、自己嫌悪が進んだ時期だった。

幾度かに分け大きな手術を受けた。幸いにも上手くいったらしく、先生は秋には復帰
できると太鼓判を押してくれた。症状が山場を越えたこの頃から学園の皆が徐々に見
舞いに来てくれるようになった。クラスの皆や同じレースで走ったことのある人、『ス

ピカ』のマックイーンさん。そしてブルボンさんも。ブルボンさんに至っては入院当初から何度もお見舞いに来てくれた。まるで身の回りの世話をするように何度も会いに来てくれた。

皆が一様に声をかけてくれた。復帰したらまた走ろう、期待している、トレーニング頑張つて、と。それは嬉しかった。だけど心の奥底では不安の方が勝っていた。入院するまで不振に苦しんでいた私が復帰したところで果たして何ができるのだろう。調子は戻らず走りも衰え、私が望む歓喜も祝福も得られない、苦しいだけのレースがまた続くだけなのではないかと。この葛藤は入院中ずっと抱えていたものだった。夜な夜な見る頻度が増えたあの夢のことも相俟つて、私は完治後の自身の進退に関しても消極的になっていた。

もう走るべきではないのではないか。復帰したところで戦績が振るわず、再び周りから揶揄され、期待を裏切ってしまうのを繰り返すだけならもう、自分はこのまま——。治っていく脚とは裏腹に私は怖かった。また走ることに怖れを抱くようになっていた。そんな状態のまま、退院の日は来た。先生はおめでとう、活躍を楽しみにしていると声を掛けてくれたが心は晴れない。今後の見通しも立たないまま、浮かない気持ちで私は病院を去った。

しかしトレセン学園に戻った私に思いも寄らぬ出来事が待っていた。

「ライス、退院おめでとう。早速ですが今後のリハビリとトレーニングについて話し合おう為に」

「快気祝いも兼ねて、スイーツ食べ放題に参りますわよ！」

復学した私にいの一番に会いに来たのは、ブルボンさんとマッククイーンさんだった。二人は私が退院するまでの間、ずっと復帰後の事を考えてくれていたらしい。その上で私を連れ出し、強く説いてくれた。

「……という訳で、当面の目標は暮れの有馬記念。それまでにライスに元の走りを取り戻させる。以上がマッククイーンさん達と練った復帰プランです。あ、マスター。メロンパフェを追加で」

「時間もさほどありませんが、ライスさんならばこなせますわ、必ず走りを取り戻せます。その為に私達も全力でサポート致します。あ、店員さん、私はチョコワッフルをー！」
驚くべきことに二人は私のトレーニングプランまでも考えていた。それも取って付けたようなものではない、入念に練られたものだった。

当初は二人の勢いに流されるがまま、走りが戻るかどうかとも半信半疑のままに、リハビリとトレーニングをこなしていった。最初のうちはとても辛かった。長い空白期間で落ちた体力や走りの勘を取り戻すのに時間を要し、否が応にも出戻り感を味わった。今の自分は病院のベッドで予想した以上に無力であることを痛感させられた。

だけど心には徐々に変化が起きていった。ブルボンさんとマックイーンさん、学園の皆とまた触れ合ううちに、下向きだった心を、少しずつ上へ上へと持ち上げられるのを感じた。これは入院中には無かったものだ。他人との触れ合いがもたらす精神的滋養とでも言うべきか。独りでいると消極的方向に向きがちになる気持ちを、持ち直させてくれるようでとても有り難かった。

ブルボンさんは以前と変わらず毎日のようにトレーニングに付きつきりで見えてくれるようになった。本当は自分のレース日程やトレーニングもあって大変であるにも関わらず。

マックイーンさんも自身のリハビリや、『スピカ』や実家の手伝いに多忙ながら、何度も顔を出して見守ってくれた。「私が復帰する時の、大いなるお手本を示して下さい」としきりに口にするのが印象的だった。

「ライス、また走ってもいいのかな。このまま走り続けても結果が出なかったら意味なんて……ないよ」

ある時私が二人にこう漏らしたことがある。トレーニングで自分を苛め抜いて疲弊しきったときに、思わず零した弱音だった。手伝ってくれている二人を無碍にするような発言だったとすぐに気付き、はっと口を噤んだ。

しかし二人は穏やかな顔で、こう諭してくれたのを覚えている。

「ライ스가走ってくれないと、私達が困るのです。あなたは私達のヒーローであり、私達にとつての目標。たとえば世界中があなたをヒールと呼んでもこれだけは覆らない」

「ブルボンさんのように粋な言葉は言えませんけれど。放っておけませんのよ、諦めそうになっている方の背を。かつての誰かを、見ているようで」

辛いと思っていた復帰後のトレーニングを、気が付くと私は楽しみながらこなせるようになっていった。そうなれたのは間違いないこの二人のお陰だ。一緒に走る喜び、支え合える信頼、許し合える心。不振にあえぎ、入院中に薄れてしまったウマ娘としての本懐を二人は取り戻させてくれた気がする。

いつしかまた走りたいという希求は、勝利を得たいという意欲へと発展していた。それだけ競走へのモチベーションを復調させることに成功していた。日々のトレーニングに夢中になっていって、告げられる時間も暇もなかったけれど。この時私は確かに幸せだった、心から二人に感謝した。

だからこそこの恩に報いなくては。勝ちたい、勝たなくては。火のついた思いは、日に日に大きく、膨れ上がる。レースで勝利せよと自身を衝き動かすようになっていく。

「ライス、頑張るよ。次の有馬記念で必ず……」

私は決意した。復帰戦となる有馬記念、そこで必ず勝利を掴むと。ブルボンさんとマックイーンさんに恩を返すため。そして『歓喜と祝福』を得る為に。

残されたレースまでの期間を全力でトレーニングに励んだ。ささやかながら心身も充足できていたこの頃、私だつて頑張れるという前向きな気持ちも芽生えつつあった。そしてこれまた不思議だつたのが、そんな心の有り様に反比例したかのように、あの悪夢を見る機会は徐々に減つていった。

瞬く間に時間は流れてその日は訪れた。第三十九回有馬記念。しかしそこで私は冷厳たる現実に直面する。

* * *

『さあ今年の最後を飾る大一番、有馬記念。第三十九回グランプリ、芝・二五〇〇メートル。選り抜かれました十三人によって争われます』

十二月末。テイオーさんの復活劇から一年振りの中山レース場に赤坂さんの実況が響く。

私は再びターフに立つ、六枠十番・ライスシャワーとして。

会場は昨年と同様、十万を超える観衆の熱気に包まれていた。レース前からターフには並々ならぬ殺気が満ち否応なしに緊迫を誘う。

それもその筈、このレースには同年クラシック三冠を達成したウマ娘、ナリタブライ

アンさんが出走していた。パドックやゲート前で放つ武骨で破天荒なその威圧感は、他のウマ娘が早くも掛かり気味になってしまいう空気を醸していた。勿論一番人気はブライアンさんで、世論は彼女がどのくらいの強さで勝つかに焦点が当てられていた。

それに負けじと、私も静かに闘志を蓄えスタートを待つ。会場をどよめかせるスタンドの大観衆に紛れ、ブルボンさんやマックイーンさんも見てくれている。絶対に下手を打つわけにはいかない。負けられない、負けるわけにはいかない。

ゲートインが始まる。勝負の時がやって来た。退院から数か月、この日を目指し調整してきた。二人の支えを受けながら苦しいトレーニングを続けてきた。走りも少しは自信を持ち直せるほどに復調したつもりだ。

見ている。ライスは必ず。

ついに有馬のゲートは開かれた。およそ九か月ぶりになる復帰戦のゲートが。

『十三人ゲートに収まり、スタートしました。ナリタブライアンが好スタートを見せた、そして予想通り内からツインターボ、ぐんぐんとツインターボが行って二バ身から三バ身とリードを取る』

レースは予想通りの展開で始まった。ターボさんがいつも通りの大逃げ。本命のブライアンさんは無理に追わず二番手集団に収まる。腰を据えて大胆不敵に時機を待つレース運びだ。

『単独行のツインターボをよそに、ナリタブライアンは二番手集団の直後につけています。これをびったりマークするのは内のライスシャワー』

私はそのブライアンさんをマークして走る。これはかねてより今回のレースへ向け考えていた作戦だった。最後の直線でトップに出るであろう最有力者にスタミナを駆使してついていき、ゴール直前に差し切る。私の最も得意とする定石だ。

『一周目のスタンド前出てきました、ナリタブライアンの周辺はごった返している。ツインターボの逃げ、リードが開いて五〇メートル、リードが開いています』

それも私一人で企図した安易な策ではない。ブルボンさんとマックイーンさん、二人の実力者からのアドバイスやシミュレーションも重ねて洗練してきた作戦だ。これは私だけのレースじゃない。二人の期待も背負っている。私の為にここまで手を施してくれた二人の為に絶対にも負けられない。

『第一コーナー回っていったって、既にツインターボはリードを七〇メートルぐらい開いた。大きくリードを取って、二コーナーへ向かう。大きく差があつて、二番手集団が続く、この辺り有力馬が固まっているぞ』

ターボさんの逃げもやはり凄い。ただでさえブライアンさんに注意を割くため心理的消耗を強いられているのに、そこへ更に大逃げで先頭距離を大きく開いて二重のプレッシャーがかかる。並の者ならば瞬く間に掛かってしまうレース展開が出来上がって

いる。

しかし今の、このレースでの本命はやはりブライアンさんだ。ここまで三冠を獲り、今なお暴力的な勢いを有する最有力。最後に前に出るのは紛れも無くこの人だろう。そこを差す。必ず差して勝利を得てみせる。だからそこまでは慌てず、騒がず、静かに、影を踏むようにマークに徹する。

『三コーナー入って、あと八〇〇メートルしかありませんがこの差はどうなのか。セーフティリードか、ツインターボの逃げ、軽快に飛ばして十バ身くらいのリードがある』大勢が変わらぬまま中盤を過ぎ、レースは早くも終盤へ差し掛かる。依然逃げ続けるターボさんは第三コーナーを曲がりだした。が、遙か彼方に見えるそのコーナーリング体勢に揺らぎが見えた。やはりスタミナが尽きかけている。所謂『逆噴射』だ。

この時を待っていたといわんばかりにブライアンさんの目つきが変わった。標的と定めた対象を射抜く眼光。ターボさんの劣勢を見抜いての一瞬の判断。直後、バ場を発破したかのような激烈な蹴り出しを以て、ブライアンさんは押し上げを開始した。持ち味の豪脚を開放し一気に先頭を奪い去るつもりだ。これに触発されたかのように後続集団もこぞって進出を始めた。いよいよ決着へ向けレースが一気に動き出した。

『ここで差が徐々に詰まってきた。三コーナー、二番手ナリタブライアン、外からグイグイ上がってきた！外からヒシアマゾンも行った、ライスシャワーもこれに続くか——』

そうここだ。ここが勝負の仕掛けどころ。

四コーナー後のホームストレッチ、中山の直線は短く、差しにかかるならば従来よりも早い仕掛けが必要。事前に数十通りに及ぶレース展開シミュレーションにより、このパターンも既に自分の中で構築済みだった。幸い、好位置は確保できて、スタミナも十分残してある。気力も十分。ここからスパートを掛け、コーナー後の立ち上がりでブライアンスさんの横を取れば、直線での差しに持ち込める。

仕掛けるなら今。第三コーナーからスパートを掛ける。いける、抜ける、差せる。

——見ていて、ブルボンさんもマツクイーンさんも。ライス、ここで絶対に差して勝つ。

今まで舐めた苦渋を、トレーニングの成果を、支えてくれた二人の思いを。

待ち焦がれた『歓喜と祝福』を今こそ！

そう思い、私も思い切り脚を蹴り出した。ゴールまでのラストスパートをかけようとした。

ところがその瞬間。

数百分の一にも満たないであろうほんの一瞬。踏み込もうとした『左脚』に、高圧電流でも奔ったかの如く、沸騰し燃え上がるかのようなおぞましい感覚がよぎる。

『……が上……つた。……つと一頭落……！一……落馬……！……何が落……したんで……か!?ラ

……シャワー落……ライ……ヤワー……であり……」

『ああ……残！十六番の……イ……ヤワー、左脚……折……！第三……ナーの下……で大ア……シ
デ……ト……！』

あのようなされた夢。そのなかで断片的に聞かされた、得体のしれない声。それと似通った、これもまたいつかどこかで聞いたような、心を粟立て掻き乱す幻聴が聞こえた。

私はその瞬間、レース中にも関わらず全身が総毛立ち身震いしていた。

——なに、今のはなに？

雷撃を受けたかのような衝撃から我に返ったのは一瞬だった。咄嗟に周りを見渡すが、何かと接触したり外傷を受けたような痕跡はない。さっきまでと何ら変わらずレースが続いている。自身の身体にも何ら変化はなく、左脚に生じた異様な違和感はまだで無かったかのように消え失せている。

一瞬。ほんの一瞬の出来事だった。

しかしそれは私のこのレースを狂わせるには十分過ぎた。気を散らされスパートが遅れた私は、瞬く間に上がってきた第二集団のバ群に埋もれた。ここまでびたり追従してきたブライアンさんは既に一バ身、いや二バ身先へと離れていた。

『ライスシャワー置いて行かれてる！かつての切れ味鋭い差し脚はどうしたのか、先頭争いから、完全に置いて行かれた』

そんな、嘘だ。待って。あれだけ練習をしたのに。絶対に差すと決めていたのに。慌ててスパートを切る。しかし既に前方は他のウマ娘達がひしめいていて、好位置を取られていた。バ群に吞まれた私は身動きを奪われたも同然だった。

『四コーナーのカーブに入ってツインターボの先頭はここで終わり！そして先頭はナリタブライアンだ、ナリタブライアンが先頭で、ヒシアマゾンが追ってくる。そしてナイスネイチャ突っ込んできた、現在三番手』

二番手集団がターボさんを次々に躲し、最後のホームストレッチに躍り出る。先頭を華麗にもぎ取りの一番に進出していくのはやはりブライアンさん。最後の直線に入って脚の伸びがより増した。追従するウマ娘を引き剥がすように、豪快な末脚を發揮し遠ざかっていく。

こんな筈じゃなかった……。全てが狂った。あの一瞬に見た悪夢のような幻、そのせいで狂ってしまった。最後のカーブを終えてようやくバ群から解放された私は必死に後を追う。順位は五、六。まだ先頭は見える。スタンドを横目に中山の直線最後のスパート。私だけでなく皆も必死に押し上がる。先頭を取り返そうとなりふり構わぬ形相で疾駆する。

あんなに練習したんだ、ブルボンさんとマックイーンさんと。二人の期待を背負ってここまで来た。なのにこれでは、これでは。負けたくない、負けられない。勝ちたい、勝

ちたいののに。でないと、私は――。

あと二〇〇メートル。一人抜かした、四番手。しかしブライアンさんの背はますます遠ざかっていく。

『三番手ライスシャワーが上がってきた、しかし！ナリタブライアン強い、強い！』

あと一〇〇メートル。三番手にまで上がった。もう心臓も脚も悲鳴を上げている。それくらい決死の思いでひた走る。だけどより遠くに、遠くへと、一着は遠ざかっていく。

ゴール板間近、スタンド最前席で声を張り上げ叫ぶ二人が視界の端に映った。ブルボンさん、マックイーンさん。ライスが勝つのを見届けようとそこで待っていてくれたのに。

「諦めるな、ライスッ！」

「まだですわ！まだ！」

何か応援の言葉を言ってくれているのは分かった。しかし私の目には、二人が敗北を目の当たりにし悲痛に叫んでいるように見えた。

『差は詰まらない、差は詰まらない！先頭はナリタブライアン、ゴールイン！鮮やかに、ナリタブライアン、四コーナー先頭でまさに横綱相撲――』

決着。順位は覆らなかった。当初の目論見は完全に外れ、差すことは出来なかった。

ゴール板を過ぎてすぐに私はその場に崩れ落ちた。三二〇〇のような長距離を走ったわけでもないのに、体じゅうから力が抜けるようだった。肩で息をつきながら、視界に入った掲示板に言葉が何も出ない。私は三着だった。勝つことは出来なかった。

遙か彼方のバックストレッチを悠々とウイニングランするブライアンさん。勝敗の決したいま、十万を越える歓喜の声は全て彼女に向けられていた。勝者を讃え祝福するエールを一心に集める堂々たる姿に、私の胸の奥底で黒い感情が去来した。テイオーさんの復活の時と同じだった。

何てはしたくない、醜い真似を。首を振って私は妬心を掻き消そうとする。これがレースだ、勝負なんだ。悪いのは、負けた私だ――。

涙が溢れてきた。悔しさと、自己嫌悪と、申し訳なさと、自分でもまとまりのつかない様々な感情で混沌とした涙。私はその場から起き上がれなくなる。

「ライス、お疲れ様。惜しかったですがいい走りでした。本当にお疲れ様……」

「復帰戦であれだけの走りをし、三着を取れた。十分に素晴らしい結果ですよ。顔を上げて下さいな」

二人が駆けつけてきた。労いの言葉をくれた。しかしそれに答える術もない。

「……ごめんなさい、勝てなかった。あんなに二人に手伝ってもらったのに、期待をしてくれただのに、ライスがそれを無駄にしてみました」

「大丈夫。ライスの走りはまだまだ取り戻せる余地があるのです」
「そうですね。気に病むことなんてありませんのよ」

二人はどこまでも優しかった。私が自力で引き揚げられるようになるまで、ずっとその場に付き添っていてくれた。だからこそその優しさが痛かった。とても身に刺さった。

いい走り？素晴らしい結果？違う、違う。

このレース、私は自分の手で勝ちを手放した。あの第三コーナーで見た幻。それに気を取られてペースをひとりで崩し、その末の敗北。敗因は何もかも私自身にあった。

どうして私はレース中にあんなものを見たんだろう。集中すべき大事なレースの最中に。それは精神的な弱さがあったからではないだろうか。昔から私は優柔不断でよくよして、些細なことで心悩ませて。競走界にデビューしてからもそうだ。『ライス シャワー』としての在り方、役回り、他人の評価を、気にしてばかり。

あれはそんな私の精神の脆さが顕在化したものではないだろうか。走る意義や意欲も曖昧で、数少ない応援し支えてくれる人にも満足に応えられない、『自分を越えられない』ことへの怖れそのものではないだろうか。

かつてマックイーンさんを倒したとき、精神は肉体を超越すると思っていた。現にそれを体現出来たからこそ、勝てたのだと思う。しかし今はその精神がかえって、肉体の

足を引つ張つてゐるのではないか。肉体を超越出来ない脆弱な精神は、勝利への足枷に過ぎないのではないか。

ならば私取るべき道は――。

敗北と苦悩にまみれた第三十九回有馬記念は終わった。それは、歓喜と祝福に手が届くのではないと思ひ上がつていた私への報いだつたのだろうか。

そして精神の弱さを明確に自覚し思ひ知らされたこの日以降、私はあの夢を再び見るようになつていった。

第三章 彷徨

「待つてくださいミホノブルボンさん、今日のレースの感想を一言」

「復帰明けから怒涛の三連勝、しかも今日は重賞勝利。次の展望は」

「こちらにも是非、一言だけでいいので」

中山レース場記者会見室のドアが開放されると同時に、目にも留まらぬ速さで人影が一つ飛び出してくる。栗毛のウマ娘、ミホノブルボン。近未来的な意匠の勝負服を着たままの彼女は、レース場の出口を目指し廊下をひた走る。

背後からは会見の途中で急に立ち去ったインタビュイーに取材を求め記者らの声が続々と上がったが、程なくしてその声は止んだ。「やかましい！」と大声で一喝した筋骨隆々の大男に阻まれたからだ。ブルボンのトレーナーである黒沼である。残りの記者対応は彼が単独で引き受ける手筈だった。

ブルボンには用事があった。大切な用事だ。そのため予め会見を途中で抜ける算段をつけていた彼女は単身、中山レース場の最寄り駅である船橋法典へ駆ける。道中はレース返りの観客もちらほら見られたが、メインレースが終わって間も無く然程の混雑ではない。

「あれってミホノブルボンじゃん」

「マジ？本物？」

「今日のレース凄かったよ」

「一着おめでとう！」

道行くファンから掛けられる声に律儀に手を振り返しつつ、駅に到着したブルボンは颯爽と改札口を抜けホームに滑り込んできた武蔵野線に飛び乗った。

トレセン学園に程近い府中本町駅までは小一時間。車両の振動がレースで疲れた身体に心地よい。忘れぬうちに、と座席に座ったブルボンはスマホを取り出しすかさず連絡を入れる。チャット形式のメールで『今から向かいます。十八時には落ち合えます』と送信。

一旦スマホをスリープにしようとしたところで周囲の目線に気が付く。突如レース用勝負服で乗車してきたウマ娘を目の前に、周囲の乗客は目を丸くしている。「問題、ありません」言いながらブルボンは顔を僅かに赤くする。

間髪置かずに返信が来た。『私もいま収録終わりました。一足先に準備してます』差出人の名はメジロマックイーンとある。『追伸、一着おめでとうございます！』とも送られてきた。

この日、二人は多忙だった。ブルボンは中山でのレース出場。マックイーンはトレセ

ン学園にてURRの取材対応。朝早くから夕方までそれぞれの用事で慌ただしい一日を送っていた。そんな二人が夕方になってようやく解放され、ある目的の為に一斉に動き出す。その目的とは。

『府中本町、府中本町。終点です。南武線はお乗り換えです。トレセン学園、東京レース場へお越しのお客様は○番出口を——』

列車はようやく目的地に到着、ブルボンがトレセン学園に舞い戻った頃には既に辺りは暗くなっていた。更衣室で手早く私服に着替えを済ませ、既に人通りもまばらになったキャンパス内を足早に進む。

美浦寮の建物前にまで辿り着く。「ブルボンさん。こちらですよ」寮の前で待機していたマックイーンに呼び掛けられ、合流した二人は寮の中に入ると一直線にある部屋へ向かった。

予め学園で待っていたマックイーンの両手には、大きな藍色の包みがしつかり抱えられている。包みには華やかな装丁が施されていて、しきりにそれを見つめながら「気に入って頂けるとよろしいのですが」と彼女は言う。ブルボンは少し考えたのち「大丈夫」と呟きながら、ポケットに忍ばせたクラッカーを二つ取り出した。

そして目的の部屋の前に辿り着く。相室の寮部屋。この時間、目的の人物が在室しているのは既に下調べ済みだ。ブルボンがノックをしたのち、二人は勢いよく部屋の中に

雪崩れ込んだ。

「えっ？ブルボンさん、マックイーンさん!？」

直前まで単身トレーニングに励んでいたのだろうか。部屋の中で湯上りの髪を乾かしていたライスは驚き呆気にとられる。その彼女目掛けて二人はクラッカーを放ちながら高らかに言った。

「ライス、誕生日おめでとう」

「ライスさん、お誕生日おめでとうございますわ」

乾いた二つの撥音、部屋に舞い散る色とりどりの紙吹雪。

この日、三月五日はライスシャワーの誕生日だった。突然のことに吃驚するも、徐々にそのことを実感してきたライスは目を潤ませ頬を朱く染める。

「あ、ありがとう……。覚えててくれたんだ」

二人が今日、多忙なのを彼女は知っていた。わざわざその大事な用の合間を縫ってまで、祝われる価値はない——そう思っていただけに喜びもひとしおだったらしく、感極まった彼女は涙までも浮かべ二人に感謝を述べた。

サプライズをするだけの価値はあったと、二人は気恥ずかしそうに鼻をかいた。

第三十九回有馬記念から年は明けて春が近づく三月。三人は変わることなく一緒だった。トレーニングに励むライス。それを手伝いつつ、復帰以来レースで徐々に活躍

の場を広げていくブルボン。リハビリを重ね、不治といわれた繋靱帯炎からいよいよ復帰秒読みと目されるマックイーン。

ブルボンとマックイーンがライスに付きつきりで行られる時間は以前より減りつつあったが、如何に忙しくとも三人で一堂に会する機会を決して無下にはしなかった。今回の誕生日会もその一つで、有馬記念以来、依然として調子の戻らないライスを気遣い、一計を案じてサプライズを実施したのだった。

「さあ、切り分けましたよ。紅茶もここに。どうぞ召し上がれ」

この日のために用意していた巨大特注ホールケーキ。ブルボンと協力して切り分けた山盛りのフルーツケーキをこれまた巨大な取り皿に盛り付け、マックイーンは主役へ手渡す。人間と比較し法外な食欲のウマ娘を満たすのにも余りある量だ。甘いものに目が無いマックイーンはもとより、そこまで食に食欲ではないブルボンも、せっせと切り分けながらもその口端が垂れつつある。

「美味しい。美味しいね、ケーキ」

クリームとスポンジ、イチゴを口一杯に頬張るライス。浮かび上がる満面の笑み。愛くるしい少女のような仕草を見ると、二人も心穏やかな気持ちになった。

「それと、これを」

一皿目を全員が平らげたところで、マックイーンとブルボンが包みを持ち出した。

マックイーンが予め準備していた華やかな装丁の包みだ。部屋に入ってからも巧く存在を隠していたものを、ここで主役へ手渡す。

またも驚くライスに、開けてみてと二人が促す。藍色の袋を開くと、中にはリボンの編み込まれた烏黒のパンプスシューズが入っていた。これは普通のシューズではない。ウマ娘用に強化繊維で造られたレースシューズの一種で、ライスシャワー勝負服仕様の特注品だった。

「皆で打ち合わせて造りました。サイズや形状は従来のを踏襲しているので問題はありません」

「そろそろ履き替える時期ですわ、それに。気持ちを新しく出来るかと思ひまして」

シューズはライスに合わせて作られた既製のものを発展改良した新生仕様だった。現在ライスが使っているものは、一〇〇%機能し得る耐用期限が間も無く切れる計算だった。それを見越した二人が誕生日の贈り物にと手回しして完成に至ったものだった。

「……ありがとう。ライスね、頑張る。次のレースも頑張るから」

ライスは袋ごと、受け取ったシューズを抱き寄せ涙ぐみながら応えた。頬には涙が伝って感激を露わにしている。

が、その時ブルボンとマックイーンははっとした。しまった、と思い内心では後悔の

二文字が浮かんだ。シューズを受け取ったライスが見せる涙や表情に、喜びだけではない意味合いが含まれているのを察したのだ。

「……やはり以前と変わらない、のでしょうか」

夜の帳が下りた、薄暗い学園のキャンパスを歩きながらマックイーンはしんみりとした口調で云う。寮の門限時刻が迫り、ささやかな誕生日会がお開きになったあと二人は所属寮へ戻る最中だったが、この言葉ではたと立ち止まる。

「表面上は変わらず振舞っています。やはり先の事、レースの事を考える時、辛そうでした」

思うところがあるのはブルボンも同様だったらしく、顔を俯けながら答えた。

二人が言うのは無論、ライスのことだった。サプライズで誕生日会を開き、ケーキを広げ、贈り物を渡したところまでは良かった。ライスは二人の友人に祝福され、感激し、喜びを感じていた。そこまでは良かった。

しかしシューズを受け取った時、一瞬表情が曇ったのをやはり二人は見逃せなかった。贈り物が気に入らなかつたわけではない。かねてより懸念していたように、ライス

は今なお先行きに少なからぬ不安を感じている。レースに出ることに、走ること自体に怖れを感じている。新しいシューズを見て、それがライスの中でよぎったのだ。これならプレゼントは他の物にしておけば良かったのではないか。良かれと思ひ、思慮が足らぬ浅はかな行為でライスに憂患を与えたことを二人は後悔していた。

そして今回の件で、ライスの精神不安は有馬での敗退以来、再び色濃くなってきたと二人は確信した。

現に年明けのライス初戦となつた二月の京都記念。GⅡレースで、周りのウマ娘は格下と言っても差し支えの無い面子だったが結果は八人中六着。彼女はスパートすべき終盤に伸び切らず惨敗。本来の持ち味である筈の差し脚は、有馬に続いて活かされなかった。ライス本来の走りは目に見えないものに、彼女の『精神的な弱点』によつて阻害し打ち消されているように思われた。

「トレーニングも十分、怪我の影響ももう無い。それでもまだ本調子にならない精神的な理由は一体何なのでしょう……」

言いながらマックイーンは思う。精神的な弱点、その克服こそがライス復調の鍵といふのは分かる。だがその正体が分からない。ライスシャワーという他人の見えない心の内の事なのだから当たり前ではある、容易に分かれれば苦勞もないが、それがもどかしかった。

言い換えれば、今のライスに対し具体的にどんな対処法を授けてあげればよいのか、精神的な弱点をどう克服させてあげればよいのか、何が何ら分からないのだ。

「私たちは、ライスさんのお役に立てているのでしょうか」

噴水横のベンチに腰掛け、弱弱しくマックイーンが言った。珍しく弱気な姿にブルボンも居たたまれなかった。

元々、積極的にライスを支える役を買って出たマックイーンだ。ウマ娘として華々しい経歴を持つ彼女だがその実、故障からの復帰やリハビリ等辛い事も多く経験しており経験値は並のウマ娘の比ではない。それを自負しているからこそ、今のライスに風向きを大きく変えるアドバイスの一つもしてあげられないのが悔しいのだろう。

ライスを苦しめるもの、彼女の精神を蝕むもの。一体それは何なのだろうか。

「……可能性があるとすれば」そこで突如ブルボンは思い出した。退院前にライスが病室で一度だけ漏らした言葉を。「夢。怖い夢を見ると言っていた、同じ夢を何度も」

ライスが見る『悪夢』。入院していた際、ライスはブルボンにそれを仄めかしたことが一度だけあった。具体的に内容を聞こうとしたが、ライスが思い出す事を躊躇ったので内容は分からずじまいだった。

「夢、まさかそれが？」

マックイーンは信じられないといった表情で顔を上げる。そんな曖昧模糊としたも

のが、精神的な弱点になつてゐるとは俄かに信じ難いといった様子だ。

それに対しブルボンも真剣な眼で見つめ返す。「本当に辛そうだったんです。話すことを憚るほど、ライスは……怖がつていたように思えて」

今思えば、ブルボンも恐れられたのかもしれない。深く追及することでライスをますます思い悩ませるのを。だがあらためて考えれば、その夢に何らかの意味があるのではないか。もしかしたらその悪夢こそがライスを苦しめる根源なのではないか。降つて湧いた異説に、二人は啞然とした。

「では、聞きますの？ライスさんに夢の事を。そこから手掛かりを得ようと」

慎重な面持ちでマックイーンは問う。こうなつた以上、話はそこに行き着く。ライスに『悪夢』の事を訊くのかどうか。具体的に話を訊いたうえで、そこからライスの精神面を弱らせる要因があれば抽出し、克服する手立てを考えねばならない。

しかしブルボンは首を横に振つた。ここまでの話の流れを反故にするそぶりに思わず声を上げそうになるも、すぐにマックイーンもやはりそうかと合点がいく。

「ライスは、繊細です。ましてや今のあの子はいつても以上に、苦しんでいる。苦しみ悩み抜いている。そこへ私達の方から辛い事を掘り返すような真似は、やはりしたくありません」

「ではどう致しますの」口ではそう言いながらも、マックイーンも既に為すべき事は分

かっていた。

「今出来るのは、一緒に居てあげること。寄り添い、勇気付けて、あの子に励みをあげる
こと。それだけなのかもしれません……」

ライスは一度ブルボンに悪夢のことを打ち明けようとしていた。だが彼女はさらけ
出せなかった。夢などという虚構的な、迷妄的な事象を話すことに気が引けたのか。そ
の内容自体、話すことも憚られる内容だったのか。或いは話すことでそれが現実となる
ような悪寒がしたのか。

「待つのですね、ライスさんの傍で。話してくれるのを」

ならば待つのみ。ライスの方から勇気を出して精神の弱点の根源、それをさらけ出し
てくれるのを待つのみ。ブルボンとマックイーン、二人の行き着く結論は合致してい
た。

「ライスを信じています、あの子はきつと蘇ると」

夜空を遠く、彼方まで見上げながらブルボンは祈るように呟く。

二年前、ライスを説得した時のことをブルボンは思い出していた。あの天皇賞（春）、
マックイーン三連覇を打ち破ることとなる、その直前の在りし日。テイオーと二人で学
園内にてライスを追い回し、出場を拒む彼女を説得した。「四の五の言わずに走りなさい
！」柄にもなく大声を出し、恐喝めいた真似もした。しかしそれは諦めてほしくな

かったからだ。

小さな頃から、ブルボンは感情表現が乏しかった。それ故周囲に友人と呼べる者もおらず、孤独に過ごすことが多かった。ウマ娘として頭角を表してからも変わらない。寧ろ無敗という言葉が周りを遠ざけた。無敗という言葉は孤高とともにより一層の孤独を彼女に与えた。そんなブルボンを初めて地につけ無敗の三冠を打ち砕いたライスは、それまで敗北を知らなかったブルボンにとって生まれて初めて出来た『ライバル』だった。

その後大きな故障で走ることが出来なくなり、走ることを諦めそうになった時。心の支えになったのはライスだった。次こそは勝ちたい、負けたくない。強いライバルともう一度走りたい。その気持ちを与えられたからこそ、今再びブルボンはターフにいる。ブルボンにとってライスは夢を奪った人物であり、それ以上の夢を新たに与えた人物だった。故にブルボンは『ヒーロー』としてライスを称える。だからこそ放っておけない、見限るなど出来ない。今再び、そのヒーローが苦しんでいるのを。

だつてあなたは私が初めて出会えた、心から親友と呼べるひとなのだから——。
ブルボンの横に並び立ち、夜風に透き通るような葦毛を揺られながらマツクイーンも静かに頷く。

二人にとって『ヒーロー』であり『ライバル』であるライス。その彼女の傍らで支え

続ける。今日のように三人で温かく手を取り合う時間を絶やさずに、今よりも心をもつと通わせるようになって。いつかライスの方から悩みをさらけ出してくれるまで。

たとえ遠回りであろうとも、今はそれしか術はない。でももし、あなたの方から打ち明けてくれたらば。私達は全身全霊を以て答えよう。あなたが「歓喜と祝福」を手に来るように。

二人が友を思う清廉な意志。後にその友の運命が佳境に差し掛かる局面で、あらためてその真価は問われることとなる。

二週間後の三月中旬。

この日、中山レース場は再び賑わいを見せている。毎週末恒例のウマ娘によるレースがこの日も朝から行われていた。午前は主に未勝利戦が繰り返され、午後から一勝クラス、特別競走、重賞レースと、プログラムが進むにつれレース格式が徐々に上がって行くのは従前通りのものであった。

時刻は昼下がりの十四時過ぎ。ターフでは十四時二五分発走のレースが間も無く開

始されようという時刻。

『……ゲート入りは順調の模様、本日の第九レース両国特別。一番人気は勿論この娘、エインベレーイ。二番人気、キアイスレンダー。三番人気は……』

選手控え室で中継モニターから聞こえてくる赤坂実況を耳にしながら、一人きりのライスシャワーは浮かない表情で床に目線を落とす。彼女はこの日、第十一レース『日経賞』に出走する予定だった。出走時刻の十五時四〇分までまだあるが、既に勝負服への着替えも済ませ、いつでも向かえる状態になっている。シューズも生誕日にブルボンとマックイーンから贈られた新しいものに履き替え、準備は全て整っていた。

だがレース直前にも関わらず、彼女のモチベーションは一向に上がって来ない。モニター越しには、既に開始された第九レースの様子が映し出される。先頭集団のウマ娘達がピックアップされ、必死の表情が浮かぶ。あと一時間もすれば自分も同様に走るのだ。しかしライスにはそれがひどく他人事のように思えた。

「凄いな、みんな」

画面を傍目に、ぼそりとライスは呟いた。少女の声はいつも以上にか細く力がない。

昨夜も彼女はあの夢を見た。最早、毎晩のように夢に現れる声と怪物にうなされた。いつものトレーニングで維持している体はともかく、心は決して万全ではない。今までと同じで精神的な弱さが今日もまた頭在化してしまう。レース前から早くもライスは

その事を気に病んでいた。

前走の京都記念も同様だった。有馬の時と同じ。レース中にあの囁くような声が聞こえた。集中を乱されて結果は六着。不甲斐無くてレース後は二人に合わず顔が無かった。

きつとそれが今日のレースも続くのだろうか、今日も勝てないのだろうか——消極的な思考をしていると、無意識にまた聞こえてくるようだった。まるでこの世の果てからの幻聴の音が。

そして不意に疼く左脚。以前故障を負い、今は完治した右脚とは反対の左脚がなぜ疼くのだろうか。

悪寒がしてライスは首を振った。丁度モニターのレースが終わる。画面から歓声が響き、カメラは一着で駆け抜けたウマ娘にクローズアップされた。

『一着エインベーン、過酷なローテと不良バ場を跳ね除け一番人気に応えました。泥だらけになりつつも、スタンドからは健闘を称える声が送られます……』

全身泥に塗れながらも、晴れやかな表情でウイニングランをする姿。それを見てライスは自分でも気付かぬうちに唇を噛んでいた。自分がどれだけ藻掻いても、これだけ苦しんでも得られない『歓喜と祝福』。モニターの向こうで走る娘は、今それを手にしている、噛み締めている。その事実が妬心を再び呼び覚ます。

第九レースが終わり次のレースまでしばし間が空く。ここでレース場を映していたモニター映像が突如切り替わり、ドキュメンタリー調のVTRが始まった。レース間にギャラリィを退屈させない為によく流れる、URAの演目の一種だ。

『あれから一年半。僕らは待ち続けた。次なる奇跡、誰もが望む新たな復活劇』

謹直なナレーターの声と共に、黒色の画面にテロップとして流れていく文字。菊花賞一着、阪神大賞典一着、宝塚記念一着、等々。最後に流れてきた一際大きい天皇賞（春）二連覇、という文言。

『名優よ、もう一度』

続いて、ホームストレッチで後続を引き連れ堂々とスパートを切る一人のウマ娘の映像。見覚えのあるその姿に、俯いていたライスも思わず目を瞬かせる。

『その名は、メジロマックイーン』

天皇賞（春）二連覇時のゴール映像。そこでVTRのタイトル『Document of Uma-Musume』が大きくセンタリングされ、オープニングが終了する。一旦フェードアウトしたのち、そこからトレセン学園でのマックイーンの姿が次々と映し出された。

VTRの内容は、マックイーンに関する特集映像だった。故障後のリハビリに打ち込む姿や、インタビュー、過去の実績等を踏まえながら、今後の彼女自身の展望や復帰計

画、目標を紹介していくドキュメンタリー仕立ての小番組だった。かつてライスの誕生日会を開いた日、その直前にマックイーンがU R Aからの取材要請に応え収録したものがこれだった。

この映像が始まると、ライスのいる控え室の外から大きなどよめきが起こり始めた。同じものはレース場のターフビジョンにも流れている。つまりそれを目にした観客達が反応を示しているということだ。かつて天皇賞連覇等で、世間を大いに沸かせたマックイーンの復活を予見させる映像に会場の期待も膨らみ上がっているのだろう。

『脚は既に完治しつつある、とのことですが』

『はい。お医者様からも許可を頂き、この春以降にトレーニング再開を予定しております』

『復帰後のレースについては、どのようなお考えで』

『私が志してきたのはステイヤー。それは今も変わりません。復帰後も主に長距離に挑戦していくつもりですわ』

反響は尚も取まらないようだった。ライスの控え室には今なお外の大歓声が伝播してきて、机上の物品を小刻みに揺らすほど。先程のレースが決した時以上に、マックイーンの復活ドキュメンタリーで観客は盛り上がりを見せているようだった。さながらレース後のウイニングライブを彷彿とさせる。

「……やつぱり凄いや、マックイーンさん」

ドキュメンタリーを見ながらライスは自然とそう口にした。発したその声が震えていることに彼女自身が驚いた。胸がつかえる思いもした。

まただ——またライスは。

レースで勝つたわけでもないのに。走つたわけでもないのに。あんな映像一つで、復活しますと宣言しただけで、多くの人の心を掴み、揺り動かせる。それだけ数多くのファンが、味方がマックイーンにはいる。

羨ましい——マックイーンさんもやつぱり私にはないものを持っている。

込み上げてくる黒々とした感情。自分でも御しきれない、やり切れぬ思い。普段は親しく接してくれる友人であり、尊敬すべきウマ娘である彼女に対し明確に抱いてしまっている。自身に無いものを持っている者への妬心。日に日に増していく嫉妬の思い。

私は——何を考えているんだろう。

思い詰めていると、背後でノックする音が聞こえた。肩を震わせ我に返つたライスは返事をして振り返る。来訪者だ。遠慮がちに控え室の出入り戸が開けられる。入室してきた人物を見、ライスは息を？んだ。

「お邪魔致しますね」

「マ、マックイーンさん」

ライスは思わず目を逸らす。直視できなかつた。

たつた今まで、ライスはあなたのことを――。

「あのドキュメンタリー、作っていただいておりますが、自分で見るととても恥ずかしくて」

髪をくるくると指で巻きながら、恥ずかし気な様子でマックイーンはライスの隣まで来て空いた椅子に座った。それから今まで今日のレース観戦のため観客席にいたこと、先の映像が始まって周囲の盛況ぶりがかえって居づらくなつたこと、それで控え室を訪れたことを話した。

「本当はレース直前なのに、邪魔はしたくなかつたのですが。ごめんなさい」

「う、ううん。いいの」

「次の第十がブルボンさんのレース。そして第十一レースがいよいよライスさんの出番ですわね」

「……うん」

ばつの悪そうな表情でライスは、答える。普段と違う緊迫めいた様子に、マックイーンはライスの肩を優しく叩いた。

「大丈夫。トレーニングの成果を出すだけ。思うがまま、思い切り走ってくるだけでいいのですから」

思うがまま、思い切り。本当にそう走ることが出来たらどれだけよいだろう。どれだけ気持ちよいだろう。それで勝利を得られるのならどれだけ楽だろう。

心の中で沸々と現れては消える皮肉を押し殺す。いまマックイーンは励まそうとしてくれている。氣遣つてくれているというのに自分は嫉妬をし、あまつさえ掛けてくれる言葉を疎ましく感じている。あらためてそれを自覚しライスは自らに失望した。

依然レースに勝てず、自分を長い目で見て支援してくれる仲間之恩を仇で返す様な、抱いてはならない感情を向けている。これも精神的な弱さがそうさせるのだろうか。弱さの矛先を、何よりも大切な恩人に突きつけるようにまで、なってしまうのだろうか。

だとすれば——やはり、私は。

『お知らせします。第十一レース出場者はパドックへお進み下さい。繰り返します、第十一レース出場者は——』

業務放送が鳴った。出走前のパドックでのお披露目の招集だ。第十レースが間もなく開始されるので、第十一レースに出走するライスはその前にパドックに向かわなくてはならない。

「行つてくるね」

椅子を立ったライスはそう言うと、控え室をあとにしようとす。逃げるような足取

りだと自分でも思った。

「ライスさん。応援していませんから。二人で見えていますから」

去り行く背に穏やかな声が染み入る。戦場に向かう者へのエール。

それを今自分に受け取る資格はあるのだろうか。優しさを享受する価値が今の自分にあるのだろうか。

「頑張るね」それだけしか言えなかった。振り向いて言うことも出来なかった。俯いたまま戸を閉じ、ライスは部屋を後にした。

「……ライスさん」

控え室に残されたマックイーンは憂いをたたえながら、友の消えた戸口を見つめる。

やはりまだライスは心のトンネルの中を彷徨っている。出口の見えない精神の暗い狭間で藻掻き続けている。見守ってあげなくてはならない。今日のレースも結果が如何なものになろうと――。

一人頷いた彼女は、ようやく落ち着きの戻った観客席へと戻っていった。

『第十一レース、続いて登場するのはこのウマ娘。一枠一番、ライスシャワー』

いつも通りの反応を傍目に、回ってきた順番通りパドックでの慣例行事をこなす。反応はいつも決まりきったものだった。成績不振を呪うもの、ブーイングや心無い野次。レースで走る前からいつも同様。最も苛烈だったあの菊花賞や天皇賞（春）に比べれば昨今はかなり落ち着いてきてはいるが、マイナスにはなれどもプラスとなることはない、ライスにとって憂鬱な時間に変わりなかった。

心にわだかまりを残したまま、早々にパドックステージから退いたライスは、ステージのすぐ横にあるライブモニターが目についた。ちょうど第十レースが始まったのか、モニター内で中継映像が流れ始める。

第十レース、東風ステークス。このレースにはミホノブルボンも復帰後四戦目として出走していた。観客席のマックイーンは今日、このブルボンの出るレースとライスの出る第十一レースを連続観戦する為訪れている。

『ミホノブルボン、第三コーナー入ってなお先頭。降り続く雨と朝からのレースでバ場はすっかり荒れているが何のその。安定した走りだ』

レースは既にブルボンの独壇場だった。復帰後の脚質変化で重バ場への適正が懸念されていたが、その下バ評を跳ね除ける快走により後続のウマ娘を寄せ付けない。

ターフの面子の中に差し返せるであろうウマ娘はいない、これはもう決まりだろう。モニターでレース模様を見ながらライスはぼんやりとそう思う。ブルボンとの付き合

いも長く、実力も把握している間柄だ。その予測は当たっていた。

『さあ最後の直線。後続が追い上げてくるか。ジーザスナチュラ、外から四番のシルバリオテイガー。まだしかし、二バ身から三バ身、残り二〇〇だ、ブルボン先頭!』

ホームストレッチ。差は三、四バ身。二番手が詰め上がりラストスパートで差し上げる。が、ここに至つても末脚を残すブルボンに敵うはずもない。差は全く縮まらないまま、距離だけが減つていき。

『チャリオッツ三番手上がった、二番手集団はしかし、ブルボンには届かない、おそらく勝てるだろう! ミホノブルボン強い、三バ身から四バ身、五バ身リードで逃げ切った!』
パドックの裏手で歓声が上がった。レース場からの観客の声。無論それはブルボンの一着へ宛てられた歓声に他ならない。

『終始圧倒、ミホノブルボン貫禄! この勢い、再びトウインクルシリーズに旋風を巻き起こすのは間違いないでしょう』

無敗の二冠をかつて達成しただけのことにはある。その実力者が今日のレースでも遺憾なく実力を発揮した。一度は故障で終了したと思われたブルボンは復活から四戦を経て、今後の第二の隆盛を思わせる勢いを誇示してみせた。

「ブルボン、やっぱり速いな!」

「カツコよかったよ」

「次のレースも楽しみだ！」

パドックにいても聞こえてくるブルボンへの歓声。勝利への祝福。今、会場を揺り動かしているのは紛れも無く彼女に他ならない。

「いいな……」

ライスはまた、羨んでいた。ブルボンの勝利を讃える言葉よりも先に、その言葉が口を衝いて出ていた。

レースの内容は本当にブルボンが強い走りをしたという一言に尽きた。最初から最後までただの一度も先頭を譲らなかつた。

その走る直前、ブルボンが控え室に来た時の事をライスは思い出す。「私も頑張ります。頑張つて走ってきます。だから、ライスも。二人で応援していますから」それだけ言つて軽く抱擁を交わしレースに向かつていった。

頑張る、頑張る——どう頑張ればいいのか。頑張りが分からない。どうすればいいのか分からない。だから今これだけ、勝てずに苦しんでいるというのに。レース中に遭遇する幻聴。あの悪夢の延長。それはライスの精神の弱さが形となつたもの。それを打ち消し、聞こえなくなるようにし、それで走れるようになること。そこでようやく初めて、頑張るといふ皆と同様の土俵に立てる。その弱点の消し方が今も分からない。この先ずっと分からないままなのかもしれない。それなら今、走っている意味は何

だろう？果てない自問自答をライスは繰り返す。

『いよいよ本日のメインレースです。GⅡは日経賞。九人立てで行われます。雨足は強くなる一方ですが、健闘を期待したいところ』

レースの 때가、発走の 때가近づいてくる。本バ場入場でコースに放たれ、ファンファーレが鳴り響き、流されるままにゲートへ押し込まれる。

どうしてこんなところにいるんだろう——とふと思う。降りしきる雨で、髪が、肌が、服が濡れることもどうでもよく思えてくる。

枠入りが完了したのか、勢いよくゲートが開く。一斉に駆け出す出走者。ライスも引つ張られるようにそれに続く。開始早々、出遅れた。後続集団につく。

不意に、周囲の音が遠くなっていった。スタンドからの声、ターフに響く足音と打ちつける雨の音、全ての音量が下がっていくように、やがて何も聞こえなくなる。

『雨が上が……観客……合いも……、京都レ……場、雨……がりました！』

『マック……ンも、ミ……ブル……ンも、お……く応援して……るのでは……いか！そのライ……シ……ワー……都の坂の上り……先頭に立……勢……！』

また聞こえ始めた。例の幻聴だった。レース開始早々、未だ四分の一も走らぬうちに、少女の身を苛んだ。

「やめて——」

左脚が痛み、疼く。鉛が乗ったかのように頭が重かった。この時の幻聴は、直ぐに消えようとしなかった。レース前から大きく空いたライスの心の隙に居座ろうとするかのように、すぐに出ていこうとしなかった。

目を瞑る。頭を振り乱す。早く去つてと心で叫ぶ。いずれも効果は無かった。足並みは乱れペースも大きく狂わされていく。

『ライスシャワーは掛かり気味！今日は向こう気がありません。雨で濡れたターフで足取りが重いか、そろそろ差していかねばならないが、どうしたのかライスシャワー！』ぬかるんだターフの泥が絡みつく。一足一足を踏み込む度に足を取られ、少女の口からは呻きが漏れた。新調したばかりのシューズはあつという間に汚れていく。

やっとの思いでバックストレッチに辿り着く。今なお聞こえる呪う声。彼女をいずこかへ手招きする、運命の呼び声。

「ライスは、勝ちたい」

それだけなんだ——勝つて、そして。歓喜と祝福を得たい。皆を幸せにしたい。「それだけなのに、なんで」

何故。何故邪魔をするのか。勝利とは、こんなにも難しいものだったのか。自分が歓喜と祝福を得るのはそんなにいけないことなのか。

ブルボンや、マックイーン、他のウマ娘達。皆は得られるものが自分には得られない。

遠く、遠く、遠ざかっていく。

『第三コーナーと、第四コーナー中間入る。先頭争い激しい叩き合い、ライスシャワー伸びてくるのか。間に合うのか?』

あの足音が聞こえる。大地を穿つ、重厚で幾重にも重なる怪物の足音が、徐々に迫ってくる。ライスにはそれが死神の足音に思えてならなかった。

「いや、だ、いやだ……」

心が擦り減らされていく。半ば狂乱しつつ、ホームストレッチ。先頭は遠い。既に六バ身、七バ身以上。左方に掠めるスタンドからの罵詈雑言、ライスにはそれが全て自分に投げかけられるようにさえ聞こえる。

『今日も期待外れだ』

『前の有馬そこそこだったのに、何だよ』

『もう、完全に終わりだな』

言葉の一つ一つが心の壁を抉る。突き崩され無防備になった心の中身をも啄んでいく。やめて、痛い——そう叫んでも止めてくれない。

こんなに脆い精神なら。精神が勝利への足をやはり引つ張っているのならば。

『残り二〇〇! ライスシャワーやはり駄目、伸びて来ない! このレース唯一のG I ウマ娘、完全に失速——』

「ライスは、ライスはッ——！」

慟哭。頭が真っ白になるようだった。気が付けばあの声も足音も掻き消えていた。身体が、手が、足が動き続ける。気力も体力も欠乏していたが、誰かに操られているかのようにしばらく動き続けた。

ライスが我に返ったのは、レース場の作業員に数人がかりでようやく引き留められた時だった。ゴールしてから何周も、ウイニングランが終わっても尚一人だけ走り続けていたらしい。丁度止められた場所がゴール板の間近。見上げるまでもなく目につく掲示板。五着までの番号にライスのものは無かった。彼女は六着入線だった。自分ではそれさえも覚えていなかった。

次のレースが始まるからと、呆れた表情の作業員らに地下バ道へ移動を促される。その間も安心していたライスだが徐々に？み込めてくる事実がただ一点。今回も負けた、それも今までにない最悪の負け方で。

そこへ更なる追い討ちを掛けるように退場するライスの背にスタンドから罵声が飛ぶ。

「いつまでグズグズしてんだ」

「引っ込んでろよ、期待させやがって」

「情けないと思ったらないよな」

「あんな走り、ブルボンとマックイーンが可哀想だ」

もう慣れたと思っていた野次、悪辣な声。もう気にしないと決めた。ヒールと呼ばれても頑張って走り続けると決めた。それなのに今は、かつてない程に心に刺さる。ズタズタに精神を引き裂かれる。

こんな思いをするために戻ってきたんじゃない——リハビリやトレーニングを頑張ってきたのは。

力のない足取りでようやく降りてきた地下バ道。既に引き揚げたのか他のウマ娘の姿はない。足が止まる。雫が垂れる音がする。雨の中走り続けた身体から、髪から、勝負服から、水がぼたぼたと零れていく。そこでもう決壊した。通路の壁に身体をつき、力が抜けていくのを感じながら嗚咽を吐く。

「どうして、勝てないの。うう、うう……ッ」

ライスは限界を感じていた。出来得る努力を全て尽くしても、彼女の精神の弱さがあると一步を妨げた。自らをここまで恨めしく思ったことはない。歯を食いしばり、表情は苦しく歪む。

残された道はもはや一つ。肉体を凌駕出来ない精神。それそのものを——。

「ライスッ」

「ライスさん」

その時、地下バ道に声が二つ響く。聞き覚えのある声に、今この時は聞きたくない声にライスは身震いした。駆け足でやって来る二つの足音。顔を上げずとも分かった。ブルボンとマックイーン。レースを見て、その後の様子を心配して駆け付けてきたのだ。

「ライス……こんなところに。これを」

ブルボンは持つてきたタオルで、ライスを包んで水気を拭おうとする。

「こんなに濡れてしまつて。風邪をひいてしまいます」

マックイーンはうずくまつたライスを抱き起こそうとした。

——この二人の期待も裏切つた、今回も裏切つた。なのに施しを受ける価値なんてあるのだろうか。この先もずっと勝てることも無く期待は裏切り続けるだろう。一緒に居たところで迷惑だ。二人に迷惑をかけ、不幸を伝染すだけではないか。

レースでこれから勝ちを重ねていくであろうブルボンさん——復帰後はマックイーンさんだつて——。冷静さを失つた頭が、ズタズタになつた矜持がライスの黒々とした思いを一気に肥大化する。

きつと自分はこの先も勝てない。対する二人は素晴らしいウマ娘。きつとこの先勝つていく。自分を差し置いて、勝つて、歓喜と祝福を得ていく。自分に無いものを得

ていく。それが眩しくて、羨ましくて、妬ましくて、憎らしくて。勝てども得られない祝福。勝つことさえ出来ない現状。親愛を寄せる友をも妬む心。自分を型取る全てのもの、それを蝕んでいく精神も、何もかもが憎い。憎いのは自分、ライスシャワーという自分が憎い。憎い。憎い。

ライスの心中でこの時、何かが決壊した。

「やめて！ライスにもう、構わないで！」

思わず手を跳ね除けていた。タオルが地面に払い落とされる。驚愕に目を見開く二人。無意識のうちに自分がした行為にライスはぞつとした。それでもなお沸き上がり首をもたげてくる赤黒い感情。

「ライス……？」

「ど、どうしたのですか」

突然のライスの言動に狼狽しその場で固まる二人を他所に、ライスは悠然と立ち上がる。ブルボンとマックイーンはまるで金縛りにあつたかのように動けなかつた。仮に動けたとしても、その場で動こうとするものを食い千切らんとする異様な空気が満ち満ちていた。

かつて二人が感じたことのある気配。特にマックイーンはその身にまざまざと覚えている。そう、かつて三連覇のかかった天皇賞で、追い縋り差し迫ってきた『鬼』の気

配そのもの。だが今感じるこれは『鬼』というよりは――。

「ライスは不幸にしちやう……ブルボンさんもマックイーンさんも、このまま一緒に居ると不幸に……だから」

ライスから立ち昇るそこはかとなない末法的な、悲愴な空気。重苦しい、身の危険さえ思わせる剣呑なオーラ。隔絶的な影を纏った彼女はそれだけを言い残すとおもむろに歩き出した。地下バ道の暗闇の奥にその姿は遠ざかっていく。

ライス、待つて。待つて――。

お待ち下さい、ライスさん――。

二人は呼び止めようと声を発するも、まるで声帯が麻痺したかのように掠れ声さえ上げられない。ライスが遠い所へ行ってしまふような、戻つてこないような気さえする。しかし何度発声しようとしても無駄だった。

二人がようやく身動きが取れるようになったのは、それからずっと後のことだった。

その日のうちは追うのを断念した。レースで上手く立ち回れなかったことによる一時的なシヨックなのだろう。一人にして欲しかったのだろう。だから一度間を置いて、

もう一度出直そう——ブルボンとマックイーンはそう決めて、翌日あらためてライスの様子を見に行くことにした。

だが学園の授業が始まる前の早朝、美浦寮へ向かう二人は胸騒ぎがずっと収まらなかった。昨日にライスが発したあの悪寒。天皇賞で見せた『鬼』の気配に似た異様な雰囲気。それが一体何を意味するのだろうか。そして去り際に放った言葉も気になった。やはり昨晚、無理をしても会ってやればよかったのではないか……そんな後悔さえも浮かんでいた。

とにかく一目だけでもいい、会ってあげなくては。そう思い辿り着いた美浦寮で待っていたのは二人にとって重い事実だった。

「ライスシャワー？……ああ、今は居ないんだ」

美浦寮の寮長ヒシアマゾン。寮の玄関で遭遇した彼女へ二人が訪問した理由を話したところ、返ってきた答えがこれだった。

呆気にとられると同時に、不穏な空気を感じる二人。不在の理由を聞くと、ライスと親しい二人にならとヒシアマは躊躇いがちに喋り出した。

「昨夜あいつが来てな。自主トレでしばらく寮を離れるってさ。昨日のレース、アタシも見てたけど……堪えたんだろうな」

その他にも様子がおかしかったのを咎めたが有無を言わさぬ空気で行ったこと、

かつての天皇賞（春）以前にも同じことはあったがその時と異なり雲行きが怪しいこと、心配故に出来れば様子を見てやって欲しいということを告げられた。

二人は即座に学園を発った。授業やトレーニングの予定はあったが居てもたつてもいられなかった。向かったのはかつてライスが単身で山籠もり特訓に使用していた場所。学園から人里離れた山奥の廃校跡地だ。

嫌な予感はしていた。電車やバスを乗り継ぎ、夕方になってようやく二人はその場所に辿り着く。既に日が暮れかけ薄暗くなった廃校のグラウンドに入ると、果たしてそこにはかつてのように一人分のキャンプ用品一式が置かれていた。ライスが使っていたのと同じ物品だ。

やはりここにいた、と安堵したのも束の間だった。グラウンドには肝心のライスの姿は無かった。廃校の周辺も探し、夜になるまで待っても彼女の姿は見えなかった。

ただ残っていた痕跡は——これもまたかつてと同様、ボロボロに履き潰されたトレーニングシューズの山。しかし今回はその量が異常だった。自主トレーニングを始めて一日と経っていない筈なのに、その一日間に履き潰せるとは思えないような、何十足もの靴が打ち捨てられていた。

「ライス、一体何処に……」

「ライスさん……」

いくら待てどもライスが戻ってくる気配は無かった。山積みになされた襪襦切れの靴とともにライスは往つてしまった、大切な何かを置き去りにして——ブルボンとマツクイーンはそんな気がしてならなかった。

彼女達が次にライスを見るのは、第百十一回天皇賞（春）のターフとなる。そしてその舞台で、二人は恐るべき光景を目の当たりにすることとなる。

第四章 餓鬼

精神力——。

走力や経験値では勝てないので、

精神力で勝る必要があります。

それには徹底的に自分と向き合うため、

一人になろうと。

精神は肉体を超越すると思います。

かつて私はこう言った。マッククイーンさんの春の天皇賞三連覇が懸かったレースの直前、自らを追い込むトレニングを課した際の言葉だ。この言葉を胸に私は決死のトレニングに臨んだ。普段の練習ペースを遥かに超えるオーバーワーク。レース前に身体が潰れるかと思うほど徹底的に、激しく自身を追い込んだ。極限まで削ぎ落した。

そうして私は肉体を超越する精神、『鬼』を得た。その力は絶大だった。それまで勝算のなかったマッククイーンさんを相手に本番のレースで食らいついた。無尽蔵のスタミナを誇り最強のステイヤーと呼ばれる彼女の走りに完全に追従できた。最後の直線では限界を超えた自分の走りで、彼女を追い越すように差し切れた——。

精神力。その偉大さを私は実感した。歓喜も祝福もない苦い勝利とともに嘯み締めた。これこそがライスシャワーの、ウマ娘としての私の最大の武器なのだと思ひ疑わなかつた。

しかし。

今やその『精神』は勝利を遠ざけ、阻害し、足を引っ張るだけの荷物と成り下がった。一向に得られない、訪れない歓喜と祝福。低迷を続ける走り。功を焦った矢先の右管骨の故障。走れない焦り。そして見始めたあの『悪夢』。怪我からの復帰後も振るわない。ブルボンさんとマックイーンさんにも辛く当たってしまった。あれだけ私の事を支え寄り添ってくれた二人に、私は――。

そう、全て心の弱さ――精神の弱さが招いた結果だった。私は大きな勘違いをしていた。元来、気が弱く優柔不断で臆病だった私が、ほんの一時の成功で精神は肉体を超えられるなどと驕っていたのが、そもそもの間違いだったのだ。

今ならばつきりと分かる。肉体を超越出来ない脆弱な精神など足枷に過ぎない。ならば私が取るべき道も分かり切った事だった。

そうだ。

『精神』を――切り捨ててしまおう。

そして残された『肉体』だけに全ての力を注げばいい。

勝利を得るため、歓喜と祝福を得るために。

ブルボンさん、マックイーンさん。

ごめんなさい、でも。

分かってくれるよね——。

パドックでのお披露目から感じていた。観衆の私を見る目線。まるで腫れ物や、異物を見るような目。同じく出走するウマ娘達もそう。皆が私を好奇と不審の入り混じった目で見ていた。

だからといってどうということとはなかった。何も思いはしなかった。周りからどう思われようと気にも留めなかった。これこそが成果なのだろうとも得心した。私がここへ戻ってきたのは勝利を得るため、その為だけにやってきたのだから。

『……京都レース場、天皇賞出走の十八人の本バ場入場。フルゲートです、今姿を現しました。一番のエールブリテン、十一戦五勝、名うてのステイヤー。場内では手拍子が湧き上がって……』

本バ場入場が始まる。ターフに入った私はゲートまで脚を奔らせる。自分でも意外

な程に前へと動ける。軽い、とても足が軽い。苛み続けた錘が取れたように感じる。

『続いて二棒三番ライスシャワーです。マックイーンも、そしてミホノブルボンも応援しているのではないかと思いますが、果たして闘志に火が付くか』

闘志？それもいいかもしれない。だけど今のこの私には似つかわしくないものだろう。所詮、不要なもの。頭の天辺が冷めるのを感じながら、ゲート前に辿り着いた私はスタンドを振り返る。

今日もスタンドには一杯の観衆。第百十一回天皇賞（春）とあつて満員御礼の様相。そこではいつものように私へのブーイングを飛ばす人も沢山いるのだろう。今日も期待を裏切るのだと見下す人達が多くいるのだろう。

それがどうした？何も動じない、何も聞こえない。今の私には何ら響くことはない。弱点である精神は今の私からは切り離されているのだから。

『さあスターターが台上がりまして、第百十一回天皇賞のファンファーレです』

ゲート前に一堂に会する出走ウマ娘たち。私の周囲に穴が開く。というより、周りの皆が避けていく。私が移動するとそれにあわせ距離を取ろうとする。皆、何か半信半疑な、怪訝な表情で私を見る。すっかり同業からもヒール扱いということだろうか。それさえも無味に思えた。

『雨が上がりつつ観客の気合いも高まつてきた、京都レース場、雨が上がりました。さあ十

八人のウマ娘、ゲートインが終わりました。いよいよスタートです』

ゲートに入る。緊張も高揚感もないスタート前のひと時。これが本来あるべき姿だったのではないかとも思えてくる。この境地に至らねば得られなかったものとも。

でも本当にこれで良かったのか、精神を切り捨て、心を切り捨て、周囲や仲間をも切り捨ててきて今このターフに立つ意味は？……そんな事は後で考えればいい。そんな事は勝つてから考えればいい。今私が欲しいものはただ一つ。

『さあ行こう、第百十一回の天皇賞、今スタート！』

勢いよくゲートが開いた。足を踏み出す。天皇賞（春）。最後の勝利から二年越しとなるターフ。感慨は湧かない。ただ走って勝利する、それしかない。

『ご覧のように三二〇〇メートルから、十八人が一斉に飛び出した。京都レース場、芝コースは重。シナノゴールデン、アウターレイサー、そしてクリスティアレイ、これは意外なウマ娘が先行争いを繰り広げている』

私は中段につけた。先行勢は序盤から前に押し上げる。焦り気味なペースだな——手に取るようにそう感じられた。まるで私から逃げようと必死なようにも見える。滑稽だとも思えた。

『外に三番のライスシャワーがいた、不気味な黒い帽子。一番エールブリテン、そしてファストジョナサン、人気どころが前の前へと差を広げていく』

冷めた思いだった。とても冷めた思いで私はレースを見つめていた。今まであんなに苦しみながらしていたレース。どうしてあんなに苦しんでいたのか。何故あんな取り越し苦労をしていたのだったか。それが遠い昔のように思えていた。

『緑一色になった京都レース場、一週目のホームストレッツチで大歓声が上がります。ライスシャワー、すーっという所へ上がってきている』

ホームストレッツチで前を走る数人が掛かっているのが分かった。スタンドの大歓声で足並みが乱れていた。

私はただ一人音も声も聞こえないままスタンド前を過ぎる。集中できているということなのだろうか。きっとそうなんだろう、そういうことなんだろう。位置をキープしたまま次のカーブが迫る。

『十八人が殆ど一団で第一コーナー、右へカーブを取ります。クリステイアレイが依然先頭、エールブリテンが二番手に上がろうという勢い。アウターレイサーも外を通って上がって行った。間も無く半分の一六〇〇メートル』

天皇賞の距離は三二〇〇。中間地点を過ぎ、あらためて私は自分のスタミナを確認する。はつきりいつて疲れは全く感じなかった。ここまで中段について温存してきたからだ。脚もまだまだ動く、心肺も何ら問題ない。

それに引き換え周囲はどうだ。掛かり気味に上げすぎた先頭の集団。中段の私の周

りも気圧されたのか走りに覇気は見られない。後続も言うに及ばず。

他愛ない。そんな言葉すら浮かべながら、向こう正面に入った私は大きく脚を踏み出した。

『場内大歓声。おおつと行つた、ライスシャワー黒い帽子が行く！内から一番のエールブリテン、アウターレイサー、人気の三人が先行集団を形成、し、しかし』

バックストレッツチに入ると同時の、立ち上がりから思い切りいく。もう中段に甘んじる必要性を感じなかった。ここから勝ちにいく。私が勝つんだ。

ビリビリと全身に滾る電撃のような衝動。内なる声が叫ぶ、ここから行けと、勝利を得よと。淀の上り坂を前にして、私は向こう正面から超ロングスパートに入った。それは常識外れの暴挙であり常識的な戦術じゃなかった。普通に考えてそんな位置からゴール板までスタミナが持つ筈が無いのだ。

でも関係ない。蹴散らす。私が立つ、先頭に立つ。何かが解放されたような清々しささえ感じる。

『なんとライスシャワー行く！早仕掛けだ、マックイーンも、ミホノブルボンもおそらく応援しているのではないか！そのライスシャワーが京都の坂の上りで先頭に立つ勢い！エールブリテンが内で四番手、十三番はアウターレイサー、スタークジェンヌもいる、有力どころが先頭集団へ上がっていく！』

『ひ……っ!? す、凄い気迫だライスシャワー! 間も無く第四コーナー、スタークジェンヌ、ファストジョナサン、この辺りが差を詰める! しかしライスシャワー先頭だ! いやあやはりこのウマ娘は強いのか——!!』

ついていく? このレースにそんな戦略など必要なかった。敵など無かった。最大の敵、それは私自身だったのだから。脆弱な精神で自らの首を絞め続けてきた脆弱なライス。今の私は違う。今の私は鬼を超えた鬼と成し得たライスシャワー。

これが正解だったんだ。生まれてから私はどれだけ悩み、苦しみ、無為な時間を送ってきただろう? 軟弱で、優柔不断で、いつも周りの目を覗う臆病な日々を送ってきた。ブルボンさんを菊花賞で破った時も、マックイーンさんを天皇賞で破った時も、私は自分の勝利を素直に喜ぼうとしなかった。周囲の声や評価、そんな有象無象に足を取られた私は、無様にも自分で自分を否定していたのだ。

それでもそんな不甲斐無い私をブルボンさん、マックイーンさんは——支えようとしてくれた。精神の弱さを補おうとするように、言葉を掛け、手を差し伸べ、心を通わせようとしてくれた。『ヒーロー』であり『ライバル』だと。私はそれに甘えていた、愚劣なまでに二人に甘え切っていた。自分の精神の弱さを棚に上げ、本当に強くなる道をつか、またいつかと先延ばしにし続けた。二人の期待を、思いを、何度も何度も裏切り踏み躪ったんだ。

私が強くなる選択はやはりこれしかなかった。脆弱な精神を捨て去り、心身ともに真正銘の鬼となることこそ、私が目指すべき最終到達点だった。それは間も無く証明される。このレースに勝って、勝利を掴んで証明する。この選択が正しかったのだと、私は間違っていないと――！

『残り三〇〇だ、そしてアウターレイサーが来る、内からエールブリテン差を詰めてきた！しかし！ライスシャワー完全に先頭だ！』

最後の直線。あとはスパートし切るのみ。この最高の力を以て、逃げ切るだけだ。もう直ぐ近くにまで迫ってきた。永く待ち望んだ悲願、勝利がもう目の前にある。

二〇〇の看板。ゴール板が見えてきた。思わず息を呑む。自分より前に誰も居ないまま、ゴールが遂に見えてきた。やつと、やつと私が勝てる、勝てるんだ。ずっと手を伸ばしても得られなかったものがすぐそこに。今までの苦しみからようやく解放される。欲しかったものがやつと手にはいる。

私の勝ちだ、勝ちだ――！そう確信した。

が、その刹那だった。

左脚。

左脚が、痛い。地に着ける度、まるで骨が皮膚を破って突き出て来そうなおぞましい痛みが突如私の脚を襲った。思わず足が止まりそうになる。ゴールは目前だというの

に、ゴール板がもう目と鼻の先だというのに。

——なんで、どうして!?

——まだ邪魔をするの!?

日経賞までレース中に現れたあの幻聴。左脚が疼くのはその時の現象の一つだった。しかし精神を切り捨て、鬼を超える鬼となった今、どうして左脚が疼くのか。否、疼くなんて生易しいものじゃない。それは鮮烈で生々しいはつきりと感じられる痛みだった。

『外からスタークジェンヌ！オギノリアルクイン来る！先頭はライスシャワーだが、二番手上がってきたがどうか!』

しかし、だからといって。だからといってなんだ。

ゴールはもう近くなんだ。勝利は私のものだ。これは私が欲した勝利なんだ。負けは嫌だ、絶対に嫌だ、渡すもんか、誰にも渡すもんか！絶対に、絶対にツ！渡すかアツ!!

「勝利は、私のものだあああああああああああああああああああああああああああああ
ああツツ!!!!」

私は絶叫し、ゴールへ駆け込んだ。喉が一杯で掠れるかと思うほどの叫び。真っ白に滲む視界。手が、脚が、脳が、全身が沸騰し最大に燃え上がる。

私は譲らなかつた。外から上がってきた二、三番手にも譲ること無く。私の頭が、真つ先にゴール板を割つた——。

『ライスシャワー——だ——ツツ!! やつた、やつたツ、勝つたのはライスシャワーです! 恐らくメジロマツクイーンも、ミホノブルボンも喜んでゐる事でしょう! ライスシャワー今日はやつたツ!!』

ウイニングランで走り続ける余力も無く、私はゴール板を過ぎてすぐ両膝に手をついた。

勝つた、勝つた——? ライスが勝つたの——?

最初は実感が湧かなかつた。三三〇〇という長距離戦で常識破りの超ロングスパートをしたのだ、肩で息をするのがやつとだった。それでもやつと、ようやく、少しずつ、理解できてきた。

私は、私はやつと得た。一着を、勝利を……。

『まだ鳴りやまない京都レース場の大歓声。第三コーナーの坂の上で先頭に立つたライスシャワー、今日は本領を見せました! 最後の直線、後続が懸命に追い上げて来ましたが、それを退け僅かの差で勝利! まさしく二年越しの大復活でしたね、細江さん?』

『今日は動きが速かつたですね。二周目の向こう正面から、前の前に取り付く走り。直線で差を詰められるも、最後は執念で勝ちを手にしましたね。この勝利は長い低迷を抜

けた彼女本来の実力だけでなく、かつてのライバル、ミホノブルボンとメジロマツクイーンの名譽をあらためて証明したと言えます』

ようやく整ってきた息。汗を拭い、顔を上げる。眩しい陽光に目が眩む。直後に私は意図せずハツとする。思わず息を呑んだ。見上げた先、目と鼻の先にあるスタンドが揺れていた。

「す、すっげえ……」

「あんなの見せられたら、もう」

「ああ、認めるしかねえよな……」

「ライスシャワーって、あんなに凄かったのか」

「ただのヒールじゃ、なかったんだ……!」

観客達が大きく声を上げ、うねり、巨大な一つの固まりとなつて揺り動いていく。やがてそれは幾重もの『ライス』コールへと変わり、場内を震わせ続けた。

これは――。

今まで幾度と無く傍から指を啜えて見た。勝者たるウマ娘だけが得られた光景。私が見たいと羨み続けた景色。『奇跡の復活』を果たした時のトウカイテイオーさんや、ドキメンタリーで復帰の意思を示した時のメジロマツクイーンさん。この前のレースで圧勝し貫禄を見せつけたミホノブルボンさん。彼女達にしか得られない、もう叶わな

いと思つていたものが今、私の目の前にあつた。

これが私の望み続けたもの、『歓喜と祝福』……？

湧き上がる人々の渦。はち切れんばかりの声。皆が驚いた顔をし、そして笑つていた。とても幸せそうにみえた。私が勝つたことで、皆に幸せを運んだ。

だが。

どうしてだろう。

その光景を見ていても私は……何の感慨も湧かなかつた。何も感じるものが無かつた。本来ならば手の一つでも振つて、礼の一つでもして応えるべきなのだろう。そんな気は起こらなかつた。無味で乾燥した、何ら味気の無いものに見えなかつた。

勝つたのは、一着を取つたのは私だつた。その結果、歓喜と祝福を一身に得た。それは間違いない、間違いない筈だつた。

なのに、それなのに何故こんなにも『渇く』んだろう。

あれだけの反響を一身に受けたというのに何も満たされない。心にはぼつかりと穴が開いたまま。嬉しさも、悲しさもどちらも無い。ただひたすらに渇く。心が渇く――

自問自答し、鬱屈とした思いを持って余しながら私はターフを後にする。地下バ道をくぐり、スクープのため我先にと近寄ってくる記者達をかわしながら、一旦選手控え室に

戻ろうとした。一人きりになりたい気分だった。

ところがその控え室で待つていた。誰も居ない筈の部屋に入った瞬間、中に気配がした。二人。私がそこに戻るのを狙い澄ましていたかのように部屋の中にその二人は居た。言うまでもない。

「ブルボンさん……マックイーンさん……」

二人は言葉も無く、神妙な面持ちで私を見ていた。様々な、複雑な思いの絡んだ目で私を見ていた。それは数十秒間続いた、まるで睨み合いのように思えた。

「……ライス。優勝、おめでとう」

「おめでとうございませす。でも……心配、していましたのよ」

沈黙を経たのち、二人が静かな口調で云う。言葉とは裏腹に表情は依然として硬く声にもトーンが無い。怒っているのだらうと私は思った。当然だ。あの日経賞の敗北後、自棄になった意思のままに二人を拒絶しその許を離れた。何も言わず、それまでの長い付き合いへの礼すら無く一切の連絡を絶つたのだ。それ以来の恩讐の再会。怒って当然、見放されて当然だった。薄情者と、恩知らずと思われても仕方がない。

「……………」

私は無論返す言葉も無い。あるとすれば、せめて謝罪することぐらいだろうか。ごめんなさい、という安易な謝意を述べることぐらいか。そう思った私は脳内で言葉をした

ためおもむろに口を開こうとする。

でもそれよりも早く、二人が近寄ってくる。私の方へと迫ってくる。引つ叩かれるの
だろうか。否、違う。二人の目は潤んでいて、揺れ動いていて、そして。

「本当に、すみません。ライスの本当に辛い気持ちを分かってあげられずに、私達は――」

「親身になれていなかった、支えているつもりでいただけでした。私達はライスさんに
何もしてあげられていなかったのです――」

私を抱き寄せ、縋る様な面持ちで二人は言った。言葉を絞り出しながら、泣いている
のが分かった。

私は胸の奥底を叩かれるような衝撃を味わっていた。大きく空いた心に込み上げて
くるものがあつた。二人のもとを-outしたのとはとても薄情な行為だつたと自分でも
思っている。さぞかし二人は不満なことだろうと想像もしていた。だけど二人の思い
は予想とは違っていたのだ。

違う――違うよ。二人は何も悪くないんだよ。ライスが自分の意思で飛び出した、い
や、逃げ出したんだ。そして精神を切り捨てた。これ以上二人に迷惑を掛けたくなかつ
たから――。

「お願いです。どうか学園に戻って下さい。皆が心配している。ライスの事を心配して

いるんです」

ブルボンさんが涙で目を腫らしながら云う。いつもは表情に乏しく、時々考えている事が分からない彼女の、優しく温和な目。そこから目を逸らせない。

「だから今は、今は身体を休めて下さい。皆が待っていますのよ、ライスさんを。だから帰りましょう」

マックイーンさんも泣いている。三連覇を碎かれた時も、毅然として振舞い涙一つ見せなかった彼女が、私の肩に顔を埋めて泣いている。

私は思い知らされた。二人は本気で心底から心配してくれていたんだ。私が独りよがりになくなる道を模索し、二人から逃げ出したあとも、この二人はずっと気に懸けてくれていた。学園の授業や、トレーニング、各々の用事も脇に置いて私を探してくれていたのかもしれない。二人の重荷にならないように、不幸に巻き込まないように出奔したのに、結局二人には今まで以上の迷惑を掛けていた。にもかかわらず私に戻って来て欲しいという、学園に戻って欲しいと。

こんな私を——赦すの？臆病で独りよがりなライスに、また居場所をくれるの——？ブルボンさん。マックイーンさん。本当は、私は怖かったんだ。ウマ娘として輝きを取り戻していく二人が。それに引きかえ私はいつまでも弱く、愚かしく、自分を変えられないまま。いつかそんな私を二人は置き去りにして行ってしまうのではないか。そ

う思い込んでいた私は、ずっとずっと怖かったんだ——。

不意に熱いものが込み上げてくる。目頭が震える。久方振りに衝いて出る、頬が濡れる感触があつた。涙だ。ああ、私はいま泣いているんだ。そう自覚した時にはもう堪え切れなくなり、私は二人の腕に飛び込んでいた。一度切り捨てた筈の精神。もう流すこともないと思つていた涙がまた、私を大きく揺り動かす。

同時に、分かつた気がした。先程の勝利で歓喜と祝福を得たのに喜ばなかつた理由を。それは精神を切り捨て、心が抜け落ちていたから。歓喜と祝福を享受する器を失くしていたからだ。

鬼を超えた鬼、なんて思い上がりも甚だしい。私は、心を失くした餓えと渇きに苦しむ亡者——『餓鬼』に為つていたに過ぎなかつたのだ。

「ごめん、ごめんね。ライス、二人に、二人に……」

言葉が詰まる。言いたいことが、言うべきことが続かない。押し殺した心、止まつていた情動の再始動に言葉が追い付かない。押し寄せる感情の波が枯渇していた精神を洗おうとする。体中が、心の奥底から急激に熱を帯びる。そんな私を宥めるように二人は肩や背を抱きとめてくれた。

謝らないといけない。そしてもう一度、本当にあるべき道を——そんな考えがよぎつた矢先だった。

あの『悪夢』が。幻聴がまた、聞こえてきたのだ。

『引退は、まだ出来……すまい。中距……での勝利実績が乏し……』

『それに……の小……な馬体では、種牡馬として価値は知れている』

頭に激痛が走る。割れるように痛い。私は思わず振り乱す。彼方から聞こえてくる言葉の明瞭さが以前より増している。その意味はやはり理解できない。

しかしただ一つ、私は厳然たる事実を思い知る。

『価値だと、命とど……が大事なんだ！』

『無茶だ、コイツの疲……を考え……やってくれ！』

一度切り捨てた精神、それを再び元に戻すということは。そう。それごと拭い去った筈のあの『悪夢』もまた蘇ってくる。私を決して逃すまいと、運命からは逃れられないのだと。どこまでも追い縋ってくる。この瞬間、その事実を私は骨の髄まで思い知らされたのだ。

『引退するまでに、まだ実績が必要なんだ』

『出るしかあるまい、宝塚記念に……！』

宝塚記念——。

その言葉が頭の中で反響し、心を粟立て震駭させる。

一度戻りかけた精神が、心が。打ち寄せた波が引いていくように、薄つすらと掻き消

えていく。心と体に灯りかけた熱が、氷水に陥れられたように瞬く間に冷め切っている。頬を伝う涙が途切れ、干乾びるように霧散する。

学園に戻ったところで、切り捨てた精神を元の鞘に戻したところで、同じ繰り返しをするだけなのではないのか。ならば道は一つ、既に選んだ道、自身で選択した末路。不要な精神を置き去りにせよ、心に渴きを、勝利だけを求めよ——耳元で運命の声が囁く。『もう逃れられない。疲れたよね、だから楽になろう。こっちだよ……』

私だ、私の声だ。この先の運命を知る、最果ての地で待つ私の声。魂の履行を望む没我の甘辞に、私の意識は塗り替えられた。暗澹たる黒一色、ヒールを体現したような漆黒の意思へと。

「ライス、どうしたんです。ライス！」

「一体何が。しっかりして下さいまし！」

二人が何かを言っている。慌てふためいた様子で、私の身体を揺すっている。

ごめんなさい。やっぱりライスは、一緒に居られないみたい。きつとまた裏切ってしまう。呆れさせてしまう。不幸を味わうのは私だけで十分なんだ。

二人の手を払い、私は歩き出す。為すべきことはもう決まっている。永劫渴き続ける心を満たすため、勝利を求め続ける。運命のあるがままに、来るべき宿業をこの身に受け容れるのみ——。

「行くな、ライス！」

「待って、待ってください、ライスさん！」

もういい、もういいんだよ。

部屋の戸を開け放とうとした私は振り向きざまに二人を射抜いた。全身を突き抜ける黒々とした衝撃、瞳から青白い妖光が迸る。それに中てられ、制止しようとした二人はその場で固まった。蛇に睨まれた蛙の如く、驚愕に目を見開いたまま動かなくなってしまった。『餓鬼』として湛えた無尽の絶望、末法を垣間見た二人は、私とはもはや別の世界に分かたれたと知ってしまったように思えた。

「呼んでるんだ。あの淀の坂が、私を——」

それだけを言い残し私は再び、二人のもとを立ち去った。痛みの止まない、左脚を引き摺りながら。

第五章 運命

新緑の時期になり青々とした葉をつけた並木を掠め、一団が往く。トレーニングコースの土が踏まれ、確かな手応えで蹴り出されたウッドチップが弾む。コースの外側、柵の外縁には学園の生徒たちがまばらに居並び、コース内を走る一人のウマ娘を注視しながら口々に会話を踊らせていた。

「いよいよ今日からなのね——、よくあんな大怪我から——注目の声がそこかしこで上がる。」

持て囃す外野を他所に、コースを走る一団はカーブを抜けて正面側ストレートに戻ってきた。非凡なハイペース。いの一番に駆け抜けてきたのは逃げの脚質を有するサイレンススズカ。それに牽引されるように、二番手スペシャルウィーク、三番手にウオツカとダイワスカレットが並行して続く。そして最後尾に注目されている当人、メジロマックイーンが続いた。

今や学園でも一、二を争う実力派揃いとなったチーム『スピカ』。その並走トレーニングが今まさに行われていた。それだけならば日常的な光景なのだが、この日はマックイーンの復帰後初のトレーニング参加だった。そのことはかねてより学園内で話題と

なっており、彼女の久し振りの勇姿を一目見ようと練習コースに数多くのギャラリーが集っていた。

最後の直線で差が詰まるも「スピカ」の面々は先述した順位のまま続々とゴールに入線し、数秒の遅れでマックイーンもゴールインした。直後にギャラリーからは拍手や喝采が上がった。第一線で走る他のメンバーに遅れは取ったものの、実に約一年半ぶりに走りの世界へ舞い戻ってきた名優の姿を見た者達は心躍らせていた。

しかしそれはコースの外側にいる者達だけだった。ゴールを切ったスピカの面々は汗を拭い飲料片手に各々クールダウンを開始したが、一様に懸念の表情を浮かべている。その視線を向けるのは最後にゴールしたマックイーンに対してだった。

「どう思います、スズカさん」

スペシャルウィークがスズカにボトルを手渡しながら訊く。

「彼女の走り、あんなものじゃ無かったと思う。やっぱり集中できていないみたい」

「ライスシャワーさんのこと、でしょうか」

「……そうね」

スズカの奇妙な言葉に、皆が共感していた。その理由も既に一同には察しがついていた。以前の第百十一回天皇賞（春）。あのライスシャワーが二年振りの勝利を掴み世間を

賑わせたレース。その観戦に——ひいてはライスに会うため現地へ向かったマックイーン。だが、そこから帰ってからの彼女の様子がおかしい。件のライスも学園には戻らぬまま。何かがあった。マックイーンの心を曇らせる何らかの事象が起きた。そう考えるのが自然だった。

当初、スピカの面々は話を聞こうとした。マックイーンの憂慮の理由、ライスに何があつたのか。だが彼女は多くを語ろうとしなかった。「私にも分からない」そうしきりに口にして、明言することは避けていた。

「……もう一本、走つてきます」

間を置かず、水分を摂ったマックイーンは単身立ち上がるとコースを走り出した。

「初日から飛ばしすぎだぜ」「そうよ」「ウオツカとスカーレットが止める声も聞かず、マックイーンはあつという間に前を過ぎ去りコーナーに消えた。心なしか、駆け抜ける表情は八方かぶれだった。

ギヤラリーからは再度喝采が舞う。事情も知らぬ外野は、ただ能天気な声を張り上げる。

そんな様子をコース横の学園校舎内から見下ろす者がいた。上層階に位置する生徒会室のカーテンの隙間から、単身コースを駆けるマックイーンを峻厳たる面持ちで俯瞰する一人のウマ娘。生徒会長、シンボリドルフ。皇帝と称され学園内外問わず多くの

者から崇められる彼女もまた、重苦しい表情を浮かべていた。間も無く訪れる嵐の到来を予期するかのよう。

チャイムが鳴る。学園全体に共通放送として決まりきった時間に流れる予鈴。十五時ちょうどを告げるもの。それを聞き流しながらミホノブルボンは遅い昼食をぼうつとした面持ちで口に運んでいた。場所は学園内の食堂。一人でテーブルに座してはや三〇分、彼女の箸は一向に進まない。時間が時間なので周りを見渡しても他の生徒の姿は少なく、食堂内は閑散としている。

『次のニュースです。先日可決された耐震改修促進法の今冬からの施行に先立ち、兵庫県では県独自の調査を実施したところ、県内の大規模集客施設の……』

壁に吊るされた大型テレビジョンでは、十五時のニュースが始まっている。他愛もない話題を意に介さず、ブルボンはようやく最後の一口を食べ終えた。机の上には中身の空っぽになった食器だけが残る。何だか今の自分の心境のようだ、と彼女は思う。

いつもならば授業も終わったこの時間はチームでのトレーニングに充てる時間だったが、今のブルボンはすることが無かった。厳密に云うと、彼女はトレーナーの黒沼か

ら当面の休暇が言い渡されていた。

「そんな腑抜けた状態で走れると思っているのか。当面休んでろ」つい先日のトレーニング中に大声で叱責された時の言葉だ。周りのチームメイトはその剣幕に震撼し、後でそこまで怒らなくてもと同情もされた。

ブルボン自身も最初は驚きもしたが、すぐにトレーナーの本心は察した。あの天皇賞での一件以来の心の痞え。それをすっかり見抜かれていた。それがトレーニングに身が入らない要因となつていふこと、ブルボンの心中に翳りを及ぼしていることも。黒沼の言う休んでいろ、とはその心の痞え——ライスを取り巻く問題を解決してこいという暗黙の了解だと、ブルボンは心得ていた。かつて過剰なトレーニングにより故障を誘引させたこともあつて、黒沼は今の彼女に無理をさせたくなかつたのだ。トレーニングから一時離れることにはなつたがブルボンはその配慮に感謝もしていた。

だが——、一体何から手を付ければいいのか。

布団の中でも、朝食の時も、授業の間も、昼食のタイミングを逸するほどずつと思ひ悩み考え続けても、見通しは立たないままだった。ライスを「元に戻す」方法が。

「お隣、失礼します」

ようやく食器を返却しようかと思いだした時、ブルボンのテーブルに来訪者が現れた。マックイーンだった。彼女もちょうど授業終わりであつたらしく、学園の制式鞆を

肩から降ろし向かいの席に座った。その表情はブルボンと似たり寄ったりな浮かない面持ちだった。

「何か、思い浮かびましたか——」

「……いえ」

マックイーンの問い掛けに、ブルボンは小さく首を振る。会話はそれだけで途切れ、力が抜けたように両者は机上に目線を落とした。

「もう、一か月も経ちます。何も変わらないまま」

長い間を開けたのちブルボンは独り言のように宣う。自らを省みるように、苦い無力さを味わうように。

第百十一回天皇賞（春）からひと月が経過していた。ライスは、未だ戻らない。ブルボンとマックイーンは消息を得ようと動き続けていたが進展は無く、ただ徒に時間を浪費していただけだった。

ライスシャワアの二年越しの勝利、そして二度目の春天制覇。レース後の世間はその話題に大きく沸いていた。それはテイオーの奇跡の復活と比べても遜色ない華々しい快挙に違いなかった。その華やかな舞台の裏で起こっていた驚愕の事態は、ブルボンとマックイーンしか知らない。

ライスに起こった異変。肉体を御する精神を捨て、限界を突破する驚異的な走りを実

現させた『鬼を超える鬼』。彼女はその力を余すところなく解放し、勝った。二年ぶりの悲願の勝利をもぎ取り、紛れも無く歓喜と祝福を得た。だがライスはその代償として精神を——心を失くした『餓鬼』と化していた。少女のように稚く、愛くるしかった彼女はまるで人が変わったかのように、悪鬼の如き変貌を遂げてしまった。

ブルボンとマックイーンはあの日見た全てを回顧する。日経賞以降どれだけ探しても邂逅できなかったライスは、天皇賞に出ると知った二人は、レース場ならば必ず会える筈だと京都レース場に赴いた。そして観客席からライスの凄まじい走りを目の当たりにした。一着でゴール板を駆け抜ける瞬間も、ようやくライスの強さを認めた観客から巻き起こる万雷の拍手も見ていた。二人もライスがようやく報われたと思った、が、同時にレース中から彼女の身に起きた変貌も鋭敏に感じ取っていた。

レース後、控え室にて待った。果たしてライスは姿を現した。二人の不安はそこで確信に変わる。よく見知ったライスの面影はそこになく、その本質は勝利を渴望する飢えた鬼に取って代わられていた。二人は再会してすぐに理解した。精神は肉体を超えられる——かつてそれを実践してみせたライスは、今度はより強靱な肉体を發揮せんが為に敢えて精神を切り捨てたのだと。そしてそれは果てしない葛藤と苦しみ、血と涙の果てに、彼女が身を切る思いで敢行した究極の選択なのだということも。

ライスの苦しみは分かっていた、分かっていたつもりだった。常に付き纏うヒールの

影に苛まれ、陥った長い低迷。その矢先に負った故障。もう勝てないのでは、歓喜と祝福は得ることはないのではという復帰への不安。そして、今なお子細が謎に包まれている『悪夢』。

ブルボンとマックイーンは思う。ライスの傍に寄り添い、悩みと苦しみを自ら打ち明けてくれるまで待つ。当初二人はそう考えていた。彼女を最も苦しめる『悪夢』を無為に引き出し苦しめたくはない、せめて傍にいてあげて心の拠り所を与えたい、その上で話せると思った時に打ち明けてくれれば——そんな思いからの決意だった。だがそれは間違いだったのだろうか。ライスの立場からすればそれは、ただ放置され、見放されているだけに映ったのではないか。

自分たちがライスを追い詰めたのか。彼女の事を分かっているつもりになって、知ったふうになつて接し続けた結果、彼女が離れて行ってしまう引き金となつたのではないか。心を捨てた鬼となる原因だったのではないか。もしそうであれば今まで自分たちのしてきたことは何だったのだろうか？ライスの為を思つてしたことは全て、かえつて彼女を苦しめるだけだったのだろうか。

その正否を確かめる間も無く、ライスは再び二人の前から去つた。その時の事は今でもはつきりと覚えている。近寄る者を押し上げる、隔絶を突きつける漆黒のオーラ。見るものを射抜き、封殺するような青白く妖しく輝く眼。鬼を超えた鬼と化したライスカ

ら二人は、底知れない絶望と拒絶を感じていた。その戦慄の姿は深々と心に刻み込まれ、以後の二人に影を落としていた。

もしもまたライスに会えたとして、自分たちはどう接することが出来るのだろうか。また以前のように見守つてあげればいいのか。それとも単刀直入に『悪夢』の事を問い質せばいいのか。どちらも出来そうにない。どちらを選ぼうとライスはまた、去つてしまふのではないか。自分たちをきつぱりと拒絶し今度こそ、二度と手の届かない遙か遠くへ往つてしまふのではないか。

二人はジレンマに陥つていた。また会いたい、ライスに会いたい。だがそれが怖い、会うのが怖い。何かに憑りつかれたような恐るべき姿のライス。彼女はもう自分たちを受け容れてはくれないかもしれない。『ヒーロー』であり『ライバル』であつたライス。臆病ではあつたがひたむきで、純粹で素直な、大切な友人であつたライス。昨日のことのように思い起こせるかつての姿が頭をよぎり、ブルボンとマックイーンはテーブル上で互いに目を逸らす。もうあの頃には戻れないのだろうか。そんな言葉が胸中を覆つてきた。

チャイムが鳴る。時刻は十六時を回っていた。この予鈴を以て学園での一日の授業時間は全て終了となる。

窓の外の空には真つ黒な積乱雲が発達していく。程なくして一雨降るだろう。ト

レーニングを切り上げた者、下校し寮に戻ろうとする者らが、食堂の眼下のキャンパスを足早に過ぎ去っていく。

「二人ともちよつといいだらうか」

薄暗くなった食堂に声が響いた。凜とした、それでいて荘厳なトーン。聞き覚えのある声だった。ブルボンやマックイーンのみならず、トレセン学園に関わる者ならば誰もが聞き知っている声。

「あなたは」

「ルドルフ会長……？」

突然の来訪者にブルボンとマックイーンは目を見張った。

生徒の往来が絶えた廊下や階段を先導されるままに歩く。窓の外からは時折閃光が差し込み、長い間を置いて鈍い遠雷が響いてくる。それに触発されたようにぼつぼつと、やがて雑多なノイズを響かせる雨音が鳴り始めた。バケツを返したようなにわか雨は、あたかも空が泣いているようだった。

ブルボンとマックイーンは学園内のある一室へ案内された。トレセン学園生徒会長、

シンボリルドルフの直々の招致によつて。部屋の名は生徒会室。文字通りルドルフを筆頭とした生徒会の面々がその活動拠点としている執務の間だ。

「座つてくれ」

生徒会室の応接間に通された二人はこわごわと言われるがままソファに腰掛ける。部屋にはブルボンとマックイーン、そしてルドルフの三人のみ。他の生徒会メンバーは見当たらない。

放課後のこんな時間に会長が直々に自分たちを呼び出す用事とは。ブルボンとマックイーンは薄々、今後の展開を察しだす。

そこへ。「失礼します」三人しか居なかつた応接間の戸がノックされてもう一人、おもむろに入室してくる。小柄なウマ娘だつた。給仕用トレーを片手に、ソファに座る三者に飲み物を肅々と配ると颯爽と身を翻し戻っていく。落ち着いた所作に、その人物をよく知るマックイーンは思わず目を丸くする。まるで彼女の実家の給仕係のような自然な動きに少なからず感心したのだ。

トウカイテイオー。かつての奇跡の立役者は生徒会室への来賓対応を貞淑にこなすと、小さく一礼して後ろへ下がつた。

「ありがとうテイオー、あとのことは私が。今日はもう上がつてくれ」

「うん。マックイーンもブルボンも、久しぶりだね。ごゆっくりどうぞ」

ルドルフにそう言われたテイオーは静かに笑みを浮かべ、応接間を後にした。普段の学園生活での振舞いや『スピカ』にいる時の彼女とうって変わって物柔らかな様子に、ブルボンもマックイーンも意外な驚きを感じていた。

テイオーはあの有馬記念の後、競走活動の傍らであることを始めた。それは生徒会活動への従事だ。浮沈を繰り返す波瀾な競走生活を送ってきた彼女はその中で何かしら思うところがあったのか、敬愛するルドルフに倣い生徒会活動の補佐をするようになった。明確な役職はまだ無く、あくまで手伝いや雑務をするだけの立場だったが、先程の振舞いといい生徒会内では既に様々な手ほどきを受けているのかもしれない。一言でいえば、どこか垢抜け大人びたという印象をブルボンとマックイーンは抱いた。

「いきなりで済まない、ここまですごい足労頂き恐れ入る。実は二人に話があつてな」
それはよそに、再び三人だけとなった応接間でルドルフは早くも本題を切り出そうとする。表情も険しいものになり、ぴりっと部屋の空気が張り詰めた。

「話というのは君達の友人、ライスシャワーのことなんだが」
やはりその話か——ブルボンとマックイーンは互いに顔を見合わせた。生徒会室に先導されている時から二人には予想し得たことだった。

「一か月前の天皇賞、彼女の走りは見事だったな。低迷を乗り越えた二年越しの復活勝利、素晴らしかった。親交が深い君達にとっても喜ばしい事だろう」

二人は内心で溜め息をついた。ライスと親交が深いのなら喜ばしいだろう——ルドルフの科白は既に様々な相手から言われたものだ。

故障からの復帰以降、ライスが二人と三人四脚で走りに取り組んできた事實は多くの者が認識している。そのライスが天皇賞という舞台で二年越しの復活を遂げた。結果だけを見れば確かに喜ばしいことだろう。だがそれは上辺しか知らない者の言葉に過ぎない。裏で今、ライスがどういふ状況に直面しているのか世間は知らない、何も分かっていないのだ。

「だが、当のライスシャワーは近頃どうも姿を現さないようだ。見たところ学園での就学状況やトレーニング参加も、ここ数か月間途絶えている。所属寮長のヒシアマゾンからは自主トレという名目で外に出たきりと聞いているが」

ルドルフは鋭い声色で続けた。事情聴取を執り行う刑事よろしく、さらに事情を追及しようとしているのが二人には分かった。

「仮にも生徒会長という立場上、レースで結果を出したとはいえ学園生活を蔑ろにする生徒を看過するわけにもいかなくてな。そこで彼女と親密な君達に話を聞きたい」

そういう話かと二人は合点がいく。ルドルフは生徒会長として、生徒であるライスが学園にも姿を見せない現状を気に懸けているのだろう。ゆえにライスと親交のあるブルボンとマックイーンから事情を聴くために呼んだのだ。

二人は反応に窮した。何と答えたものか。この数か月の間にライスの身に起こったことは、今に至るまで誰にも口外していない。信を置く者へ相談すべきかと考えたこともあつたが、話したところで十分な理解を得られるとも思えないし、世間的には二年越しの復活を囃されているライスの評価に水を差すのではとも思えた。

そして何よりも、誰かに話すことで、今自分たちはライスを怖れているのだと認めてしまうようで。これまで築いてきた三人の関係が決定的に崩れてしまうのではないかと思え、安易に口に出れなかつた。

「どうだろう。彼女の最近の動向に関して何か知っている事があれば、教えて欲しいのだが」

ルドルフの問いに二人は目を伏せた。何と返答すればよいかと思ひあぐねる。

「じ、実家に帰省しているのでは」冷や汗を流してブルボンが言う。

「多分、スイーツの食べ過ぎで減量のために」目線を泳がせながらマックイーンが呟く。沈黙は不味い、何か言わねば、とちぐはぐな回答をした両者を射すくめ、ルドルフは息を小さく吐いた。そして柳眉を逆立て、「では質問を変えよう。あの天皇賞のレースで彼女の身に起きていた異変について話してもらおうか」こう問うた。

ブルボンもマックイーンもたまらず泡を食った。あまりにも直球な問い方からして、既にルドルフがおおよその当たりを付けているのは明らかだつた。

どうしてその事を、世間が全く触れてもいない事実をどうして。動揺を顕わにする二人の顔を見、ルドルフは嘆息しながらこう宣う。

「仮にも皇帝を自負する私の目を、節穴と侮ってもらっては困るな」

学園の全生徒の頂点に立つ生徒会長シンポリルドルフ。ウマ娘としての実績や周囲を惹きつけるカリスマ性もさることながら、その洞察力、本質を見抜く力は長年培った経験値と相俟って並大抵のものではない。それを以てして、あのレースを見ただけで二人と同様にルドルフもライスの異変を鋭くキャッチしたのだろう。神懸かり的だ、とさえ二人には思えた。

今までひた隠してきた凶星をあつさりと指され、すっかり萎縮気味になってしまった二人。それを流石に見かねたのか、ルドルフは努めて穏やかな口調に戻り、言い論じた。「どうか、話してはくれないか。これはライスシャワーのためでもある。頼む」

生徒会長の真摯な表情に、迷いはまだあったが、ブルボンとマックイーンは意を決した。

二人は包み隠さず打ち明けることにした。ライスの身に起きた分かり得る子細の全てを。彼女が抱いていた精神的な弱点、日経賞後の出奔、精神を切り捨てた天皇賞での変貌、そして例の『悪夢』のことまで、これまで内に秘め続けた苦い心境ごと吐露した。ライスに対して後ろめたさはあったが、ルドルフはその事を不用意に周囲へ広めるよう

な真似はしなないと思つたし、信を置けるとも思えた。話をする間も、ルドルフは終始落ち着いた様子で二人の話を聞き入つていた。ただその表情は話の深度に合わせるようにどんだん、より険しくなつていった。

「……なるほど、事情は分かつた」

長い時間を掛け二人が説明を終えようとルドルフは目を瞑り、考え込む。再び沈黙が室内を支配し、ブルボンとマックイーンは困惑する。

そしてここから更に、思わぬ方向へと話題の舵が切られていく。

「これから私がする話は到底受け入れられない……というより、とても馬鹿げたものに聞こえるだろう。それを念頭に置いて聞いて欲しい」

普段は直入に物申す、ルドルフらしからぬ前置きの口上を告げられ二人は身を固くした。一体何の話をしようというのか。

ソファを立つたルドルフは部屋の奥の執務机から古めかしい書籍を抱えてきてそれを脇に置く。『ウマ娘の歴史』、『ウマ娘行動心理学』、『精神分析学』、『ウマ娘の場合』等々、古くから存在するウマ娘に関する専門書を捲りながら、ぽつぽつと言葉を投げかけてくる。

「ウマ娘は、別世界の魂が乗り移つた存在、というのを聞いたことはあるな？」

「は、はい。確かその魂の名を受け継ぎ走る」

「それが私達の運命、と習いましたわ」

二人はかつて履修した授業を思い返しながら答えた。トレセン学園のカリキュラムには自分達ウマ娘に関する基礎知識を学ぶ授業が幾つかある。社会・経済、生物学、心理学等、あらゆる側面からウマ娘を考察しその何たるかの理解を図るもののだが、その教導基本理念には以下の一文がある。

『ウマ娘とは、走るために生まれてきた。ときに数奇で、ときに輝かしい歴史を持つ別世界の名前と共に生まれ、その魂を受け継いで走る。それが、彼女たちの運命』と。

「これは以前ウマ娘に関する古い文献で目にした、オカルトじみた話だが」捲っていた本をぱたりと閉じながらルドルフは言葉を紡ぐ。「別世界での魂が歩んだ運命。私達ウマ娘の人生はその再現を為している、という説があるんだ」

二人にはその言葉の意味がすぐには解せない。怪訝な表情を浮かべながらルドルフを凝視する。

「例えばテイオーが有馬で復活を果たしたのは、別世界の魂がかつて果たした偉業が……」ただそのまま再現された」とする仮説がある。勿論単なる仮説だ、テイオーが自身の力で掴み取った結果だと私は思っているが」

何だつて——。二人は思わず呆気に取られた。

つまりは、自分達ウマ娘が切磋琢磨し合う日常や、各地で開催されている数多くの

レース結果は全て、別世界の魂とやらが歩んだ運命をそのまま再現しているというのか。ブルボンが無敗で二冠を達成したのも、マックイーンが天皇賞（春）を二連覇したのも、ライスが二人の前に立ちはだかり更なる偉業達成を打ち砕いたのも、全て元から運命により決まっていた予定調和だともいうのか。

ルドルフが馬鹿げた話、と前置きした意味が理解できた。とても簡単に受け入れられる話ではなかった。その意味の解釈次第では、下手をすれば自分達ウマ娘の存在が根底から覆されるようにも思えた。

「しかしだ、仮にその仮説を信じるとするならば。もしその運命とやらが負の方向にも作用することがあるとしたら」

二人の反応を窺いつつもルドルフは話をどんどん進めていく。語るべき、予期し得る核心へと着実に迫っていく。

「覚えているか、サイレンススズカが故障した秋の天皇賞を」

ブルボンもマックイーンもその言葉に身を震わせた。その時点でルドルフの語ろうとしている結論が垣間見えた気がした。

挙げられたのはトレセン学園に属するものならば誰でも知っている事件だった。所謂「沈黙の日曜日」。当時名実共に最盛期を迎えていたサイレンススズカが、天皇賞（秋）のレース中に故障、競走中止となった大事件だ。

「あの時スズカは心身共に最高潮だった。にも関わらずレース中に突如左脚に故障をきたした。当時治療に当たった医師団曰く、故障原因は今なお不明のままだそうだ。というよりも原因が分からないのではなく、無い……予兆も前触れもなく、まるで運命の悪戯のように発生したとの事らしい」

この一件が競走界に与えた衝撃は大きく、重度の怪我を負ったスズカは一時、競走引退間近に追い込まれ、当該レースを目にした者の中にはトラウマとなった者もいたほどだった。

運命の悪戯、というにはあまりにも残酷な出来事である。

「……それがライスさんと、どう関係あるというんですの」

堪りかねたマックイーンが口を挟んだ。だがそう口にしながらも直感していた。隣にいるブルボンも同様だった。

まさか——それと似通う出来事が、これからライスの身にも起きるといふのか。二人の表情が徐々に青ざめていく。

「君達は言ったな、ライスは悪夢に魘されていると。根拠もない想像だが、その悪夢とは彼女が辿る運命を、意図せず予知夢として見ているのではないだろうか」

馬鹿な。受け入れられない。オカルティックな本当に馬鹿げた話だ。だが聞き流すことも、一笑に付すことも出来ない。これまでのライスの移りゆく姿をずっと見てきて

いるからこそ、ルドルフの話は奇妙な真実性を以て二人に突き刺さる。

「同じウマ娘とは思えない、天皇賞での真正の鬼が憑りついたような姿、かつての彼女とは思えない変貌。予知夢によって自らの辿る運命を悟った彼女が、自らその変容を受容しているのだとしたら」

「そんな、こと」ブルボンが反駁しようとする。が、続く言葉が紡げない。あの悪夢を思い出そうとした際のライスの怯える姿が脳裏をよぎる。怖れ慄き、震えて苦しんでいたライスの姿が。ルドルフの仮説を聞いた今ならば納得がいく、いつてしまう。

「ライスシャワーはもしかしたら、運命に引き込まれつつあるのではないだろうか。かつて別世界の魂が辿った悲しい運命に憑りつかれて。私はそんな気がしてならない」

そう結論付け、ルドルフは一旦話を締め括った。

雷が鳴る。稲光で白黒のストロボに晒された生徒会室の空気が、びりびりと揺れる。雨はまだ当面止みそうにはない。痛い沈黙が三人の間にしばらく流れた。

「仮に……その話が現実に取り得るとして。会長はどうお考えですか」

やがて沈黙を破り、ブルボンが恐る恐る問う。

「繰り返しになるが、天皇賞でのライスシャワーの走り、あれは異様だ。ウマ娘としての能力を越えた、文字通り心身を削った走り。そのためのトレーニングも常用的に行っているとなれば、非常に大きな負荷が掛かっていよう。このままいけば——」

潰れる。ライスシャワーの身体は潰れてしまう。ルドルフはきつぱりそう断じた。

精神を捨てて得た限界を超えた身体。その身体までもが潰れてしまった時、ライスは一体どうなってしまうのだろう。あらぬ想像に二人は心底から粟立つ。

「どうしたら防げると思われますか。ライスさんに起きるその悲劇を」

マックイーンが食い気味にルドルフへ迫る。ルドルフは苦渋の表情を浮かべた。

「……私が提案できる解決策が一つだけある。だが君達にとつても苦しいものとなる。方法は単純、学園の権限によってレース出場を差し止める」

そう言うルドルフの顔には不本意、とまさしく書いてあるようだった。

解決策の具体的内容はこうだ。まず学園側からURRAへライスシャワーのレース出場差し止め措置を行う。数か月もの間、学園を不在にしている就学義務不履行を主理由としてだ。この差し止め請求が受理されれば彼女は全レースの出場が不可能となる。さすればライス本人が、差し止めに對する申し立てを行うため学園に足を運ばざるを得なくなる。そこを押さえる。有無を言わさず休養をさせ、心身の自壊に歯止めをかけるというものだった。

だがレース出場を禁じられるということ——それは競走界に生きるウマ娘にとつては存在を否定されるようなものであり、ある意味死と同義であった。仮にその後再びレースに出られるようになったとしても『出場差し止めになったライスシャワー』とい

う経歴が世間に与える影響は計り知れない。過去の実績からいまだヒール扱いを多く受ける彼女にとつて、決定的なマイナスイメージとなるのは避けようがない。ルドルフが自分の案に消極的なのはそうした理由があつた。

そしてそれだけではない。学園から、自身の存在を否定された——ひいてはルドルフや、親友であつたブルボンやマックイーンの決定によつてレースの道を断たれたと知れば、ライスはどう思うだろうか？その心境を思えば思うほど、二人は胸を引き裂かれるような思いがした。

「決められません、そんな方法……」

「そうですわ……」

二人は頭を抱えながらそう答えるので精一杯だつた。

途方も無い事態になつたとつくづく実感する。行方知らずとなつたままのライスは、見えざる運命の手により望まぬ末路へ進もうとしている。ブルボンとマックイーンは知つてしまった、もう座視できる状況ではない、静観している猶予はないということ。

とは言え、今のところ打つ手は無い。ライスの行方や、次にどのレースに出場しようとしているのかといった動向も何ら掴めないのだ。現状はルドルフが提示しているレース出場差し止めという強硬手段しか現実的な対処法が無い。その苦肉の策も、二人に決行する覚悟は到底なかつた。

「他に方法があるとすれば直接会って説得するくらいだが、行方が分からないのではなしにルドルフもうーんと唸りながら他の方策を熟考している。強硬手段を使いたくないのは彼女も山々だ。行方を辿るにはどうしたらよいのか。「せめて、次に何処のレースに現れるのか」思い悩みつつ何の気なしに発せられたその言葉に、ブルボンはずわはつとする。

何処のレースに———そういえば。「ライスはい前言った。//淀の坂が呼んでいる」と」

思い余つてブルボンは大きな声を発した。天皇賞のレース後、別れ際にライスがうわごとのように宣つていた言葉を思い起こしたので。

他の二人もそれを聞いて目を見開く。淀の坂。その言葉で連想されるものは。

「淀、と言えば京都レース場のことか?」

「もしやライスさんは、次も京都開催のレースに?」

ルドルフとマックイーンが口々に言った。

よもや、思わぬ処から降つて湧いた仮説。一か月前の天皇賞で勝利を掴んだ京都レース場、すなわち淀のターフに再びライスは現れるのではないか?つまり次にライスが出てくるのは、京都開催のいずれかのレースなのではないか?そういう仮説へと思いつく。

しかし。

「いや待て。当面、無い。京都での開催レースは幸か不幸か、しばらくの間一切無い」
ルドルフは生徒会室の壁に貼られたレースカレンダーを即座に確認した。京都でのレースは例年四・五月に一開催十二日間開催される。三人がいま会談している五月末の時点で、既に全レース日程は終了していた。京都での次期開催は秋季の十・十一月まで待たねばならない。つまり。

「その話の通りならば、彼女は当面レースに出てこないという事になる……」

勿論、自分達の勝手な想像に過ぎない。他のレースに出てくる可能性もある——ルドルフの言葉に、ブルボンもマックイーンもそこから先の二の句が継げなかった。京都レース場をマークする策は根本的に、打開策になりえないと感じた。

それからも生徒会室で三人の議論は続いた。しかし他にこれといった案が出ないまま時間だけが流れその場は解散とされた。残された時間は少ないのだと、三人は予感していた。

「手は早く打たねばならない、強硬策のこと、よく考えておいてくれ」ルドルフが最後に

念押しした言葉を反芻しながら、遅い夕食を摂るためブルボンとマックイーンは再び食堂へと戻った。はつきり言って食事どころでは無かった。二人の間に流れる空気は昼間より一層重苦しくなっていた。

「どうしたら、いいでしょう」

「どうすれば、よいのでしょうか」

箸も進まず、思い詰めたままテーブルについて二人は同じタイミングで質問を投げ、同じタイミングで黙りこくった。二人は焦燥感に駆られていた。強硬策に同意すれば、ルドルフは断腸の思いながらレース出場差し止めの手続きに入るだろう。そうすればライスの身に降り掛かる目下の悲劇は防げるのかもしれない。だがそれは同時に彼女のウマ娘としての本懐を奪い去ることにもなるのだ。

どちらかを選べと言われても二人には到底選べない。親友であるライスの生殺与奪を握らされたような現状に、際限なく気が滅入った。

それでも本当に時間は無い。決断の時はもう間近に来ている。その予感が二人に悲愴な覚悟を迫る。やはりルドルフの案に賭けるしかないのだろうか、レース出場を無理にでも止めて学園へ連れ戻すしか――。徐々に二人の決心は傾きつつあった。

窓の外ではまだ雨がしぶしぶと降っている。食堂の閉店時間が近づき、他のウマ娘らが一人、また一人と席を立っていく。ラストオーダーの時間も過ぎ、厨房の従業員らは

積み重なった食器やワゴンを慌ただしく片付け、いそいそと閉店作業に入っていた。

『……やってきましたURR Aニュースのお時間です。細江さんと共に、今夜もウマ娘に関する話題のトピックを紹介して参りましょう』

壁に掛かった大型テレビジョンでは、ちょうど夜のスポーツニュース放映が始まった。実況者の赤坂氏と解説者の細江氏による、ウマ娘とそのレースに関連した話題を紹介する定期コーナーが映し出されている。

ブルボンには目もくれず、ため息をついて久々に箸をつけた。人参の乗ったハンバーグはすっかり冷め切っている。

『えー、早速ですが、速報です。本日、阪神レース場運営事務局が発表した耐震工事計画を受け、つい先ほどURR Aから以下の発表がなされました』

今流れているニュースは、ウマ娘のレース興行に使用されている阪神レース場で施設の老朽化による耐震強度不足が発覚、問題視されているという内容だった。震度七クラスの大地震が発生した場合の施設の安全性が保証出来ないということで、急遽耐震工事が行われるのである。

ライスの事で思い煩っている二人にとって、それはさして関心を引くほどの話題でもない。聞き流しながらマックイーンも人参スープを啣った。生温くなっているのは言うまでもない。

『UR Aによると、本年度宝塚記念の阪神レース場開催は、当該施設の耐震検査が間に合わないとして断念するとの発表があり……』

例年、宝塚記念は阪神レース場で行われている。本年の開催は目前まで迫っていたが先述した事由による急遽の工事入りを受け、UR Aが開催を取り止める判断を下したというのだ。こればかりは止むを得ない事情だ。

だが。

『その救済措置として本年に限り、宝塚記念を京都レース場で臨時に代替開催することも併せて発表され……』

——京都レース場で代替開催？その文言にブルボンとマックイーンは耳を疑った。思わず席を立ち、テレビの前に陣取った。

画面上では、記者会見席でUR Aの責任者らがマイクを片手に経緯を語っている。画面端には『GI宝塚記念、京都臨時開催』のテロップ。聞き間違いなどではない、紛れも無い事実だ。二人は心臓が跳ね上がり震撼するのを実感した。

「これは……!」

「な、なんですって!?!」

驚愕のあまり、画面に向かって声を上げる二人。

京都レース場での臨時開催、そして淀の坂が呼んでいるというライスの言葉。交わら

ないと思われた二つの点が思いも寄らぬ形で結び付いてしまった。

何故。何故こんなことが。衝撃、という言葉でさえも足りない。

『……以上、ご覧になられましたでしょうか。一時は開催が危ぶまれましたが、六月四日、京都レース場にて第三十六回宝塚記念が臨時開催となるようです!』

六月四日、京都レース場、宝塚記念——その文字の羅列に、ブルボンとマックイーンは体の芯から戦慄くのを感じた。何故かは分からない、だがとても嫌な予感がした。二人にも宿っているであろう、別世界の同じ名を持つ魂。その魂は知っているのかも知れない。その日そこで、何が起こるのかを。その本能が二人にひしひしと危機感を告げるのだ。

『続きましてその宝塚記念。ファン投票による集計結果が締め切られたとのことで、早速見てみましょう』

畳み掛けるように更なる衝撃が二人を襲う。画面上には宝塚記念のファン投票集計表が大きく映し出された。昨今の競走界を席卷する、錚々たるウマ娘達の名が連なっている。宝塚記念は有馬記念と同様にファン投票で出走ウマ娘を決め、得票数上位者には優先出走権が与えられていた。そして今回の投票で、最多票を得たウマ娘は——。

『集計の結果、一〇五七九九票でファン投票一位を獲得したのは……ライスシャワー! 天皇賞での復活劇が記憶に新しい、ライスシャワーです!』

『低迷からの大復活を評価されてのものでしよう。ヒールと言われ続けた彼女ですがこれは文句なし、納得の一番人気と言えます』

『宝塚記念、実に楽しみですね細江さん』

『そうですね。彼女をはじめ、有力なウマ娘が選出されたこのレース。白熱した展開が期待できますよ』

投票結果に沸く画面の向こう側を他所に、ブルボンとマックイーンは愕然とテレビの前で立ち尽くした。待ったなしで破局への手数が進んでいく。事態は取り返しのつかない段階へ陥っていく。ルドルフの言っていた、ウマ娘の辿るといふ運命。その底知れない業の深さと偏執的なまでの可逆性を一挙に見せつけられたのだ。

「だ、駄目です。ライスは、きつと出る、宝塚記念に……」

手を震わせながらブルボンが呟いた。もはや認めざるを得ない、完全に信じざるを得ない。あらゆる要素が指し示している。ライスの辿る末路を明確に示している。

「これが……運命？ 私達にはライスさんの運命を止められないのですか……？」

マックイーンは力なく床にへたり込んだ。思い悩み足踏みしていた二人を嘲笑うかのように、運命は先の先へと往ってしまった。修正が不可能な域へと。

もうライスは止まらない。淀のターフに移された宝塚記念へ、彼女は彼女に課された運命のままに邁進する。レース出場差し止めという強硬策も今からでは間に合いはし

ないだろう。ファン投票一番人気で、宝塚記念への最優先出場権が与えられたのだ。開催が直前に迫った今、レース最大の目玉となる出走者を学園からの待ったで今更止められるとは思えない。既に出来上がった大きな流れを押し留めることは到底不可能だった。

六月四日、京都レース場でのライスシャワー宝塚記念出走。もはや避けられない、疑う余地もない。そこで『何か』が起きる。ライスシャワーを破滅に導く『何か』が――。運命のピースが全て嵌まる音を、二人ははつきり聞いた気がした。

「マックイーンさん、ともかくこの事を会長に」

「でも、ああなつてはもう差し止めなんて効きませんわ」

「ならどうすれば、他に手があるのですか……!」

「そんな事、私が聞きたいくらいですわ、私が……!」

他に誰も居なくなつた食堂で、二人は半ばパニックに陥つた。ああでもない、こうでもないといふと討議しようとするが言葉は踊るのみ。打つ手を全て失い、出来ることといえば地団駄を踏むことぐらいしかなかった。

その実、二人は心底から自分を情けないと呪つた。ライスを支えるどころか、彼女が悲しい道を辿ろうとしていたことに気付くこともなかった。所詮はライスを手助けしているという自己欺瞞に溺れていたただけだったのではないか、そのツケが今まさに回つ

てきたのではないかと。

ブルボンと思う。『ヒーロー』ではなく『ヒーロー』だと、かつて彼女はそう宣いライスを激励した。だがそれは勝手な押し付けだったのではないだろうか。目標が欲しかったという自分の心象や願望を彼女に投影していただけではないか。それ故にライスは長く苦しみ、喘ぎ、拳句の果てに運命の渦に身をやつす結果になったのではないかと。

マックイーンは思う。かつて自分の夢を阻んだ『ライバル』を支え、復帰の手助けをした。だがそれはライスが自分を倒しその夢を奪ったという現実から目を逸らす為——その『ライバル』と馴れ合うことで傷ついた自尊心を満たすという歪曲した渴求があつたからではないか。そんな底意地が知らず知らずのうちに、彼女を追い込み、運命の渦中へ駆り立ててしまったのではないかと。

一度思い込むともはや負の螺旋だった。膨れ上がっていく消極的な思い。自分達がかつた。私、不甲斐無かつたからライスは去っていった。その背中を止めることが出来なかつた。本当は隣に立つ資格などなかつた。自分達はライスを本当の意味で救うことなど出来なかつた。もうやり直す事は出来ない。賽は投げられた。長い雌伏の時を終え、ファン投票一位で初めて文字通りのヒーローとして立つはずの宝塚記念。その舞台を最期に彼女は——。

あらぬ想像が脳裏を掠め、二人は絶望に言葉を失つた。気が付けば二人とも互いを見

合わせたまま、さめざめと涙を流していた。間も無く来る審判の刻の前に、如何ともしがたい圧倒的な見えざる力を前に、無力さを思い知りただただ嘆いた。

ライスシャワーはもう決して戻らない。帰ってはこない。私達にはもうどうしようも……。

そう思い、全てを投げ出しそうになったまさにその時だった。

「諦めちゃダメだよ」

他に誰も居ないと思われた食堂に明朗な声が突如響いた。二人は思わず振り向いた。二人の間に割って入ろうとするように、小柄な少女が一人。

いつの間にかいたのか、それはトウカイテイオーだった。

「いま話してたの、ライスの事だね」

「どうしてそれを」涙を拭いながらマックイーンが問う。

テイオーはごめん、と一言添えて、「実は生徒会室で盗み聞きしちゃった。あんなにピリピリしてたカイチョー、久々に見たから」頭を掻きながら遠慮がちに答えた。

ブルボンもマックイーンも咎める気にもならず、気まずそうに目を逸らすだけだった。二人は今の状況に困惑していた。ただでさえつい先ほどまで互いにライスのことと気を揉み乱心していた。そこへ急に話に割って入って来たテイオーの意図が読めない。しかしそんな二人へ交互に目配せをしながら、テイオーは穏やかな表情を浮かべて

続ける。

「正直驚いたよ。別の世界とか、魂とか、ウマ娘の運命とか、考えたこともなかった。凄く難しい話だつてことしか、そのせいでライスが辛い目に遭つてることぐらいしかボクには分からない」

ぽつぽつと、純粋なテイオーらしい素直な言い分。だが続けて「でも、一つだけ分かることがある」凜とした声音で発せられた言葉に二人は顔を上げる。

「運命なんか縛られちゃダメだ」

毅然とした表情でテイオーは言う。二人を見据えて、一喝するような氣勢でそう宣告する。それが他人事のように聞こえたのは、ブルボンにもマックイーンにも否めない。いきなり何を——テイオーは自分達がいま置かれている状況を十分に理解していないのだ、と。だがその言葉は心の奥底にまで確かな残響を残していく。不思議な引つ掛かりを二人の心中に騒めかせる。

「カイチヨは言つてたね、ボクがああの有馬記念を勝てたのは運命のおかげかもしれない。でも自信を持つて言うよ」

テイオーの表情から穏やかな笑みがふつと消える。それを目にしてはいるブルボンとマックイーンは、知らず知らずのうちに引き込まれている。テイオーが醸す誰かと似通う語勢と覇気に。

「ボクがあそこで勝てたのは、奇跡を起こせたのは運命じゃない。一緒に走る仲間がいたから。言葉を交わし、手を取り合い、心を許し合つて、助け合えた仲間がいたからだ。それに応えなきやつて思えたからだ」

言葉の途中から、テイオーは真つ直ぐにマックイーンを見据えた。その真つ直ぐな視線で心を突かれたように、マックイーンは狼狽する。仲間——。ここしばらく続いた鬱屈とした状況の中で随分久しぶりに聞いた単語のように思える。テイオーとマックイーン。一昨年の激しい競走界を駆け抜けた中心的な二人。その道程は決して順風なものではなかった。互いに栄光と挫折、勝利と敗北の狭間で藻掻き、苦しみ、時に笑い、涙した。その果てに二人が得たものは何だっただろう。

もしもテイオーがいなければ——自分は繋靱帯炎で、走りを諦めていたのだろうか。テイオーがあの時手を差し伸べてくれなければ、もう走ることは出来ない、無理をして走る意味も無いのだと、あそこで『メジロマックイーン』は終わっていたのだろうか。仲間がいたから——自分はその運命を乗り越えられたのだろうか？テイオーもまた、自分がいたからあの有馬を乗り越えられたのだろうか？

(だとするならば、今のライスさんは……)

「いまライスはひとりぼっちだ。とつても怖くて、寂しくて、きつと震えてる。だからこそ、ライスの一番近くにいた二人が傍に居てあげなくちゃだめだ」

テイオーは次にブルボンを見据えた。傍に居てあげなくては——その一言に、頭を強く打ったような感覚をブルボンは味わう。それはかつて彼女自身も口にしていた言葉だった。ライスを支えてあげたい。何も言わずとも、傍にいて心の拠り所になってあげたい、安心させてあげたい。その想いの由来は一体何だっただろう。

そうだ。ライスは自分にとって——、初めての目標だった。無敗の三冠を破られ、故障で離脱を余儀なくされた自分の目の前に颯爽と現れた大いなる目標。それがライスを意識するようになったきっかけ。彼女とまた走りたい、今度は負けないよう全力を尽くしたい。感情表現が希薄でサイボーグと揶揄されたブルボンにとって、初めて内から溢れた気持ちの発露。ライスがいたから、今の自分がある。その繋がり of 尊さ、大切さを理解し得なければ『ミホノブルボン』は再び起動することなくそこで終わっていたのだらうか。友と歩む温もりを知らぬ冷たいサイボーグのまま。

自分はひとりぼっちではなかった。孤独なサイボーグでは無いと、ライスが教えてくれたから——運命を乗り越えられたのだらうか？

(なら、今ライスにしてあげられることは——)

「行つてあげて。次の宝塚記念、きつとライスは出る。たとえ何があつても、どんなことがあるうと、そこから目を背けちゃいけない。ライスが走る姿を、二人が寄り添つて見てあげるんだ」

意を決したテイオーが一気に捲し立てる。意気消沈しそうだった二人に火を着けようと、促そうと。その目つきは普段の、あどけなく世間見ずなものではない。遠く見据えたその先に、非常に小さくも確かに起こり得る可能性——奇跡を確信した、煌きを帯びた目に違いなかった。

「で、でもテイオー」

「レースに出たら。ライスは……」

それでも。懸念はまだ尽きはしない、容易に認められるものではない。テイオーの助言を信じライスの宝塚記念を見守ったとして、果たして本当に彼女は乗り越えられるのか。過酷な旅路の終着点、悲劇が待っているであろう舞台を、最期の運命を乗り越えられるのか。二人はまだ半信半疑だった。

そんな不安を遙か彼方まで吹き飛ばすように、「四の五の言わずに行くんだ！」テイオーが大声を張り上げる。びりびりと、フロア全体に響く甲高く、突き抜けるような声。ブルボンとマッククインは足先から毛先まで震えた。慄いたのではない、武者震いのように感じられた。

「ライスの事を諦めないで。でないよ。奇跡は起こらないよ」

最後に不敵な微笑を再び浮かべ、テイオーはそう締め括った。聞くものに、えもいわれぬ気迫を与える語勢と覇気。誰かに似ていると感じられたもの。それはテイオー自

身が最も憧れる者とそっくりだった。かつてどこかで誰かが言っていた、帝王は皇帝を超えたかもしれないと。ブルボンとマックイーンはそれをまさに今実感していた。

打つ手は最早尽きたと思われる。もうライスを止められる術はないのだと絶望もした。でも、違う。まだある。自分達に出来ることがたった一つだけ。遠回りであっても、たとえどんな現実が待っていようとも、あなたにしてあげられることが。最初から、分かっていたことだ。

怖れてはならない、行くしかない、運命の舞台へ。ライスに寄り添う為に――。

二人が友を思う清廉な意志。その友の運命が佳境に差し掛かった今、間も無くその真価が問われようとしている。待っているのは悪夢か、奇跡か。

いつの間にか、雨は止んでいた。

ついに、運命の日は訪れる。

第六章 祝福

私は——ライスシャワーはどうして生まれてきたのだろうか？

祝福の意味を持つ名を受け、

ウマ娘としての道を歩み出した私に、

待っていたのは茨の道だった。

勝利することで得られると思っていた、

歓喜と祝福はそこにはなかった。

かわりに待っていたのは落胆と呪詛の声。

ヒーローではなくヒールとしての扱いだった。

『……ああ、ライスシャワー先頭に立った！ミホノブルボンは三冠にならず！ライスシャワーです、ライスシャワーです！あつという悲鳴に変わりましたゴール前！……』

——あなたさえ、あなたさえいなければ。無敗の三冠に私は——。

あの菊花賞の舞台。ゴールした私をブルボンさんが睨みつけてくる。深い恨みのこもった目で。あのレースで私はブルボンさんを不幸にした。紛れも無く彼女の夢を奪った。

『……ライスシャワー完全先頭！ライスシャワーだ、ライスシャワー一着！マックイーンは二着！黒い刺客、天皇賞でもメジロマックイーンの大記録を打ち砕きました！……』

——あなたが、あなたがいなければ。三連覇は私のものでしたのに——。

あの春の天皇賞。マックイーンさんが涙を流しながら言う。深い憎しみを滲ませた声で。あのレースで私はマックイーンさん不幸にした。間違いなく彼女の夢を踏み躪った。

どうして私は走るのだろう。走れば走るほど、周りに不幸を振り撒くばかりではなかったか。思えば私が望んだものは何一つ叶わなかった。自らの走りで、それを見てくれる皆に与えたのは不幸ばかりだった。所詮は叶わぬ運命だと初めから決まっていたのだろうか、走り続ける果てに辿るべき末路はもう決まっていたのだろうか。

どうして今更こんなことを考えるんだろう。私にはもう何も無いのに。あるのはただ精神を——心を失くした、操り人形のように衝き動かされる肉体だけ。何ら意味も無くなった勝利だけを求める餓鬼としての身体だけだ。

今も聞こえる。声にならない声が、淀の坂から私を呼ぶ声が聞こえてくる。あそこには何が待っているのだろうか。私が欲するもの、望むものがあの坂の向こうにはあるのだろうか。

そんなものはない。私の夢を叶えるものなど何も待つていない。あるのはただ運命のみ、運命の終着点が待つのみ。何かが私の中でそう告げる。この痛む左脚を引き摺つてでも、そこへ向かえと意思を続ける。

私は行かなくちやならない。運命に従つて。

もう私は——ライスは、走り疲れたよ。

だから行こう、あの最期のターフに。

『……三十六回目を迎えました、宝塚記念。本年は諸般の事情あつて京都レース場で行われます。本バ場入場、それではあらためて十七人の出走ウマ娘をご紹介しましょう』

渴く。喉が渴く。いや、違う。渴いているのは喉じゃない。渴いているのは私の心だ。その渴きを満たすため、失くした心の器を埋めるため、私はいまだに走ろうとする。

身体の赴くままに訪れた京都レース場。第三十六回宝塚記念。大勢の観客も、色とりどりの勝負服の出走ウマ娘達も、青々とした空もターフも。全てが灰色がかつて、乾燥して見える。そこまで意味の無いものに見える。私にとつて意味あるものは勝利。際限ない渴きをほんの一時でも誤魔化し、仮初めの安息をもたらしてくれる勝利のみ。

『続いて八枰十六番ライスシャワー、春の天皇賞ウマ娘です。二年ぶりに復活した彼女は、この宝塚記念にファン投票最多得票で選出、レース前から大歓声を受けています!』
本バ場入場、返し走行。どうでもいい、何もかもがどうでもいい。こんなことをしている場合じゃない。私は早く走って勝利を得たい、勝利の為だけにここに来た。いち早くゲート前に辿り着き枰入りの準備を待つことにする。

「タイシン、頑張つてね」「一年ぶりのレースだ、無理はしないようにな」隣で他のウマ娘が会話をしている。観客席にいる応援者達と喋っているらしい。その光景に既視感を覚える。私にもかつて同じようにレース前に声を掛けてくれる人がいた。もう会うことはないであろう、私が不幸にしてしまった人達。今頃は私のことなど忘れてあるべき日々へと戻っていった筈だ。私にとっても彼女たちにとっても、それで良かったんだ——と思う。

『これからスターターが台上がりまして、第三十六回宝塚記念GIのファンファール。京都レース場、大歓声が上がります。今年上半期を締め括る大一番、間も無く始まります』
何も聞こえない、何も耳にする必要もない。ゲート入りが始まりウマ娘達が続々と入っていく。私も造作も無く歩み寄り、狭いゲート内へ収められる。背後で音が鳴りゲートが閉じられる。

不意に頭の隅が騒めく。思わず振り向く。ゲートを閉めた係員と目が合った。不思議

議そうに見返してくる。もう後ろには引けない、戻ることはできない。閉められたゲートを見つめて私は予感する、が、それさえもすぐにどうでもよく思えた。

『さあ今年もウマ娘の、そして私達の夢を乗せて走る宝塚記念。ゲートが開いて一七人が一斉に飛び出した!』

呆気なくゲートは開かれた。その向こうには清々しいまでの白い空。眩しい、と感じる。周囲が駆け出す。総勢十七人のウマ娘の足取りが地面を揺らす。ターフが揺れている。思わず足を取られるような錯覚に陥る。

これしきのこと。直ぐに無心を取り戻し、進路を得ようと身体を軋らせる。十六番という外枠からの発走だ、最初のホームストレッチを終えて内についた頃には、バ群の最後方に着く形となる。スタートは好ましいとは言いがたいものだった。宝塚記念の走行距離は二二〇〇メートル、芝は稍重。長距離戦を本分とする私にとつては比較的短期戦となる。思い描く一着への布石の為には出遅れたと言わざるを得ない。

『第一コーナーへ殺到する十七人ですが、ご覧のように緑のシャドーロールが揺れていきます。先頭まで固まったバ群が重なっていた。位置取りも思いの外、苦しいポジションを掴まされた。』

先頭までは固まったバ群が重なっていた。位置取りも思いの外、苦しいポジションを掴まされた。

これでは勝利が——私の勝利が手に出来ない、掴めない。

どいて——邪魔だ、退け。

私を妨げるな——。

「……ハアアアアアア——ッ!!」

足を思い切り跳ね上げ、地面に大穴を穿つように蹴り出す。肉体に秘めたる力の発現。精神を捨てて得た餓鬼の力で私は蹴散らそうとした。勝利を邪魔する周囲の万物を、押し上げるように。後方から一気に先頭集団にまで躍り出ようと最初の第一コーナーから仕掛けた。

（——仕掛ける？何の為に？）

決まっている、勝つ為、勝利する為。常に私はそのため走り続けてきた。

（本当にそうだったの？）

今の私には勝利こそが全て。勝たなくては、勝ち続けなくては、歓喜も祝福も絶えずこの手から零れ落ちていく。ほんの一時のまやかしに過ぎない。だから勝つ、この宝塚記念も、次のレースも——。

——次？

次って、いつだろう。私にこの次なんてあるんだろうか？

『ご覧のように各ウマ娘、まだ一団十七人。第二コーナーに向かいます。四番のセイヨラファール依然トップをひた走る、ダンシントアロの姿も見えた。距離二二〇〇に

どう対応するか、ライスシャワーはまだ後方!』

そして、最初のコーナーを回った時点で私は気が付いた。様子がおかしい。身体がついてこない、前方との差が縮まらない。以前の天皇賞のような、精神を切り捨て極限まで削ぎ落した体に宿った餓鬼。限界以上を発揮できる筈の走力が、今は十分に解放出来ず、殆ど本領を発現出来ない。

なんで——? どうして? バ群がこじ開けられない。先頭まで連なる他の出走ウマ娘達の中に、勝利の二文字は埋もれていく。

困惑する私の脳裏を、忘れた筈の言葉がよぎっていく。

——ライ스가走ってくれないと、私達が困るのです。あなたは私達のヒーローであり、私達にとっての目標。たとえ世界中があなたをヒールと呼んでもこれだけは覆らないだから……)

分かってている——分かっている! 私は一番に駆け抜けねばならない。でない、でないといと。

(引退は、まだ出来ませんまい。中距離での勝利実績が乏しい)

(それにこの小さな馬体では、種牡馬として価値は知れている)

(無茶だ、コイツの疲労を考えてやってくれ!)

(引退するまでに、まだ実績が必要なんだ)

私には何も、なくなってしまう。精神を失くし、心の道標失き肉の人形と化した私が、勝つことも出来なくなったら。存在している意味なんかない。ただの不必要な生物になつてしまう——。

『……後方集団も動きはまだないが、内を通つて、ナリタタイシンの元気な姿も見えました、八番はナリタタイシン。それから十六番、春の天皇賞を制したライスシャワー、虎視眈々と機会を窺っているのか?』

まだだ、まだ向こう正面に入っただけ。この位置からでもスパートは出来る。ここから全速を出せばごぼう抜きに出来る、先頭まで躍り出れる。

（——ブルボンさんのように粋な言葉は言えませんけれど。放つておけませんのよ、諦めそうになつていている方の背を。かつての誰かを、見ているようで——）

分かつている——分かつている!こんなところで終わりたくない、終わるわけにはいかない。でないと私は一体何のために生まれてきたのか、それすらも分からないままじゃないか。だから勝つ、勝つ!勝つ!このレースに、宝塚記念に勝つて見つけるんだ、証明するんだ!

（何を見つけるの?何を証明するの?）

それは、それは……ライス自身の証明。勝利する。勝利することで歓喜と祝福を——。

——？

私は何の為に走ってきたのだろう？勝利の為？歓喜と祝福の為？勝利は祝福を得るための手段に過ぎない？祝福は勝利に付随する添え物でしかない？

分からなくなる。私は一体今まで何をしてきたんだろう。苦しみ藻掻き走り続けてきた目的が今になって分からなくなる。それともそれ以外にも答えがあつたのだろうか。遠い彼方に置き去りにしてきた、一番大切な答えは何だったろう。分かるのだろうか？この宝塚のゴールに辿り着けば、その答えが。

(ゴールなんてない。終わるんだよ、ここに)

運命を受容した心が囁きかける。その瞬間私は戦慄した。

先刻より、意識外から聞こえてくる数多の声。この現象はかつて散々私を苦しめ続けてきたあの『悪夢』と似ていた。しかし今聞こえるこの声はまるで、すぐ傍から直接語りかけてくるような生々しきがある。それでいて似ているのだ、他ならぬ私の声に。

そう悟つたと同時に景色が歪む。青々とした淀のターフがぐずぐずに溶け、それにとつて代わるように真つ暗で煤けた芝が続いた。荒れた廃道の如く変貌したコースの両岸には、不気味な紅を放つ彼岸花が咲き並ぶ。一緒に走っていた筈のウマ娘達の姿も掻き消えた。

いや、一人いる。私の陰に隠れるように、ぴったりマークするように並走してくる。

それが何かはすぐに分かった。横目で見ると、漆黒の勝負服に黒い髪を靡かせる、黒ずくめのウマ娘。それは他ならぬ私自身だった。もう一人の私は、頬に涙を伝わせながら私を外から抜きに掛かる。その口元が動いている、私に嘔きかけてくる。

(ゴールまでは辿り着けない。それが運命なんだよ) 悲痛に訴えかけるようにもう一人の私が言う。

涙に腫らしたその眼から、私は目を逸らせない。私にはもう流せない涙を彼女は見せつけるように真横を並走してくる。その姿から感情的な波をひしひしと感ずる。底なしの悲しみ、深い恨み、悔いきれぬ後悔、身を切る絶望。もう一人の私からありとあらゆる負の感情が流れ込んでくる。かつて私も味わったことのあるものが。

——ああ、そうか。私は理解する。幻想の只中に突如現れたもう一人の自分。彼女はかつて私が切り捨てた『精神』そのものだ。肉体を越えられない脆弱な足手纏いとして切り捨てた『精神』が、もう一人の自分という形となって再び表れたものなのだ。

(あの淀の坂で、全てが終わる)

もう一人の私が前方を指さす。バックストレッチの終わりに、坂が見える。勾配のある京都レース場の第三コーナー、所謂淀の坂。見るとその坂の終点——坂の下りに彼岸花が溢れんばかりに乱れ咲いていた。そこから先の道は真つ暗闇に覆われ途切れている。

(ライスはあそこで、最期を迎えるんだよ) 達観した口調で彼女はそう告げた。

その言葉で私は分かった気がした。あそこが私の最期の——。意外なほどにすんなりと、私はこれから自分の身に起こることを受容していた。

薄々分かっていたのかもしれない。本当はずっと前から悟っていた。あの『悪夢』を見始めたところから、私は私の辿る末路を。二度に渡る大記録の阻止。そこから生まれたヒールの影、祝福無き勝者。その後の長い低迷、ヒールをよりヒールたらしめた苦渋の刻。二年の刻を越えての天皇賞での大復活、ようやく初めて受けた祝福の賛辞。満を持して、ヒーローとして初めて臨むこととなった宝塚記念。そこで辿る悲惨な最期。

何てことは無い。実に私らしい、日陰者に相応しい末路じゃないか——。もう一人の私は、いち早く運命を受容していた彼女は分かっていたんだ。だけど精神を切り捨てていた私には分かっていたいなかった。彼女の悲痛な声に気付くのが遅すぎた。今日ここに、来るべきでは無かったのだ。運命に呑み込まれると分かっていたいながら。私は結局、衝き動かされるまま来るべくしてここまで来てしまった。取り返しのつかない処まで。でも、それでもいい。これでもういいんだ。

今更、あの坂を回避したとして他に何があるだろう。何も無い。私にはもう何も残っていない。精神を蔑ろにし、肉体も傷つき、最も大切なものもなげうってしまった私には、これ以上走り続ける意味も資格も無い。戻るべき場所すらも、無い。

『早くも十七人が第三コーナーをカーブして、第四コーナーへ向かう！淀の坂を下る！ここからどのウマ娘が抜け出してくるか！第三十六回宝塚記念は佳境へ——！』

私はヒールじゃない。ヒーローになりたかったんだ。

勝利のためじゃない。歓喜と祝福を得たかったんだ。

そして私の走りを見てくれる人達に、幸せをあげたかった。

でも、そんなのは夢物語だった。叶わぬ夢だった。

それが運命だったのだから。

私はもう——ライスはもう、走り疲れたよ。

溢れんばかりに咲き狂う彼岸花の群れ。坂を下り始めた私の身に、その場所はどんどん近づいてくる。最期の場合。行き着く処。ライスシャワーとしての運命を遂げる場所。

暗闇に塗りつぶされていたそのコースの先に、見えたような気がした。遥かなる故郷、母なるユートピア。最期に私を迎えに来たのだろうか。

「ああ、行こう。還ろう——」

やっと楽になれる。もう苦しまなくていい。そう思い最期の一步を踏み出そうとした。

その時だった。

（——ライス！）

(——諦めないで！)

二つの声が聞こえた。暗闇の中でも明瞭に響いた。聞き覚えのある、二度と聞けないと思っていた声。

思わず我に返る。目の前に戻ってくる元の、淀のターフの景色。淀の坂から彼方に見上げた大スタンド。私の目が満員となったその客席の一点を捉えた。ゴール前の最前席。そのあたりだけが突然光って見えた。

その二人は深く項垂れていた。詫びるように、祈るように胸の前で両手を握り合わせていた。細かく震えている気配までもが伝わってくる。その姿を見て私は身体の奥底から熱いものが押し寄せてくるのを感じた。今日のこのレース前にも声を掛けにきてくれていた。でも私には何も聞こえず、見えてもいなかった。失くしたと思っていた最も大切なものは、いつでも一番近くにおいてくれたのに。私がどんな姿になろうとも。

そうだった。まだちゃんと謝れていない。謝らなきや、二人に。
ブルボンさん——。

マックイーンさん——。

直後。

何かが碎ける音がする。左脚。血と肉が抉れる感触。急速に力が抜ける。二人の方へ差し伸ばそうとした手が、空を切った。青いターフが、地面が視界一杯に迫ってくる。

『場内悲鳴が上がった!? 一人転倒、一人転倒! こ、これは誰が転倒したんでありましょうか!? ライスシャワー転倒、ライスシャワーが転倒している!』

弾けて舞う土と芝。うねり狂うコーナー柵。真つ白な空。眩しすぎる太陽。観客一杯のスタンド。黒いターフビジョン。転倒しターフ上をのたうつ私の視界を、目まぐるしく移り変わる景色。その全てがスローモーシジョンのように流れていく。あたかも走馬灯のように。

身体じゆうが痛い。時速六〇キロ以上から転倒した衝撃で、全身に無数の傷が入る。ようやく慣性が収まり、投げ出された第三コーナーの上で私は突っ伏した。

それきりだった。起き上がることも、かぶりを振ることも、足はおろか指一本動かすことも私は出来なくなった。唯一分かるのは、左脚が千切れそうな程痛い。眼球を動かすこともできず、脚の状態がどうなったかささえ確認できない。悲鳴一つさえ、上げることが出来ない。

『だ、大波乱。第三コーナーの下りで、あの、天皇賞では先行で渡ったライスシャワーが転倒! 第三コーナーで大アクシデント、なんと十六番のライスシャワー故障……!』

会場が騒然としているのが伝わってくる。その一方で私は状況をおぼろげに理解してきた。淀の坂で、あの第三コーナーで私は転倒した。左脚を故障したことによって。

そういうことだったんだ——これが私の運命。此処に至りようやく私は全てを理解

し得た。

精神を切り捨て極限まで肉体を突き詰めた。その果てに鬼を超えた力を体現した。しかしそれはウマ娘としての肉体の限度を超えた酷使に次ぐ酷使を重ねて得たもの。身体の悲鳴すら聞き取ることを放棄していた私は、自身の脚が限界を迎えることさえ気付いていなかった。その末のレース中の故障発生。それは起こるべくして起こったものの、私自身が招いた結果だった。

運命は私を逃さなかった。最期の最期、私の身体に戻ってきそうになった心。そのやさやかな熱意の芽を完全に摘む様に、完膚なきまでに私をこの淀の坂へと叩き伏せた。視界が徐々に暗くなる。コーナー柵の向こうから、係員や救急要員が駆けつけてくるのが見える。でももう手遅れだろう、既に命運は決めたのだから。故障した左脚から全身の力が——魂さえも抜けていくように感じられる。心も身体も、ライスシャワーという存在が見えないものに吸い取られ薄れていく。こんな時なのに、否、こんな時だからかとても眠い。瞼が重くなる。このまま目を閉じれば二度と目覚めることもないのだろう。

矢は放たれ、たつた今射抜いた。元から分かりきった結末、自ら承知で進んだ末路だ。受け入れる他無い。運命の終着点、ライスの最期を。

唯一つの心残りは、謝れないまま。ブルボンさんとマツクイーンさんに最期まで謝れ

ないままだ。二人はきつと転倒の瞬間を目の当たりにしただろう。そしてこのまま私の末路を見届けることとなるのだろう。最期の最期まで私は、不幸な思いを二人に味わせるのだ。そんな二人の心境を慮ると胸がこの上なく痛んだ。

——ごめんさい。ブルボンさん。マックイーンさん。ごめんね——。

せめてもと私は心中で二人に合掌する。永劫届くことの無い思いを独白した。心の底から申し訳なく思った。情けなくて、惨めで、消え入ってしまったかった。

瞼が閉じられる。もう何も見えない。黒一色の漆黒の世界。これから私が逝く世界。冷たくて、無機質な、渴ききつた永遠の無。私はその瞬間、静止した。ウマ娘としての生命活動を停止し、身も心も役割を終えた。ライスシャワーという存在が終わりを迎えた。

やがて『あの足音』が聞こえてくる。

悪夢の中で幾度となく自分を追いかけてきた怪物の足音。地面を蹴る音は異様に大きく、幾重にも折り重なった、人ならぬ重々しい足音。それが徐々に近づいてくる。倒れ伏した私の元へと迫り来る。死神の足音だ、と感じた。

思えばこの足音の主はいつも、夢の中で私を追い立ててきた。まるで私を運命の末路へ駆り立てるように。故に、死神が来たのだと思った。だが運命を完全に受容したい

ま、嘗てのような恐怖はもうない。連れていかれることに、多少の未練はあれども後悔はもはやない。迎えに来たというのならばかえって好都合。連れて行って欲しい。この魂の還るべき場所に、懐かしきユートピアに――。

そう考え私は観念した。無の世界に突つ伏したまま。果たして足音は間近にまでやつて来た。どす、どす、という重厚で鋭い音が耳元のすぐ近くで響いて止まる。死神がいま自分を見下ろしている。審判が下される刻を私は黙して待った。

その瞬間はなかなか訪れなかった。

代わりに息遣いが聞こえた。空を震わす静かに嘶く声も。何か私の頬をくすぐつてくる。とても大きくて、確かな熱を持った何かがある。

温かい。これは――なんだろう。

恐る恐る、私は目を開けてみる。滲む視界の中にぼんやりとそのシルエットが浮かび上がってくる。真つ先に目に入ったのは四本の細く長い脚。一見すると華奢に見えるが、その四肢には絞り込まれ集束された強靱な筋が浮かび上がる。その脚が支える、漆黒の美しい艶がかった毛並みを持つ胴部。屈強さと美しさを兼ね備えた、芸術的にも思える肉体はとても大きく、私の五倍以上はあるのではないか。そしてその胴から緩やかに伸びた頸と鬚、精悍な風格を感じさせる面長の顔。私の頬に触れていた鼻端を離す

と、死神だと思つていた。『それ』は私の前で泰然とした様子で甲高く嘶いた。

見たことの無い生き物だった。私の知らない、名も知らぬ生き物。でも何故だか知っている。知らない筈なのに知っている。私は『あなた』のことを知っている――。

自然と手が伸びた。もう動かないと思つていた手が、その生き物の額へ吸い寄せられるように。つぶらな瞳を閉じた『あなた』も、まるで何かを伝えようとするように自ずから頭を寄せ、額を私の手の平にそつと添えた。

互いが触れ合つた瞬間、目の前が微かに煌いた。そして私の脳裏に、幾多の光景が流れ込んでくる。

『ぼつと出の脇役に、ブルボンもマックイーンも偉業を阻止されるなんて』

『この悪役……どの面下げて出走する気だ』

『無敗の三冠が見たかつたんだ』

『春の天皇賞三連覇が、消えちまつたよ』

遙か彼方の別世界の京都、淀のターフ。スタンドにすし詰めになつた何万もの群衆が罵詈雑言を叫ぶ。私がかつて受けた心無い声の数々、誰にも報われぬ勝利の味。あなたも同じ光景を見ていた、同じ思いをしていた。私よりもずっとずっと、前に。

私が見聞きしたものと同じものをあなたは見ていた。

あなたが見聞きしたものと同じものを私は見てきた。

『この馬の本領はここから。次の菊花賞で、徹底マークの成果を見せてやれ!』

『倒せメジロを! お前ならやれる、三連覇を砕いてやれ!』

『誰が何と言おうとお前はヒーローだ、この厩舎にとつてお前はヒーローなんだ!』

古めかしい小屋の中に漂う寝藁の香り。入れ替わり立ち替わり現れる名も知らぬ人たちが、私の——あなたの名を呼び、語り掛けては消えていく。遠い昔、そこではあなたを家族のように思い大切にしてくれる人達がいた。ヒーローだと褒め称えてくれる人達もいた。

『引退は、まだ出来ません。中距離での勝利実績が乏しい』

『それにこの小さな馬体では、種牡馬として価値は知れている』

『無茶だ、コイツの疲労を考えてやってくれ!』

『引退するまでに、まだ実績が必要なんだ』

『出るしかあるまい、宝塚記念に……!』

今度はその人たちが苦渋の表情であなたを見つめている。口々に何かを言い合いながら痛切な面持ちを浮かべ、申し訳なきように、労わるようにあなたの頸を撫でる。

ああそうか。この後に、私は――。

『……一頭落馬！一頭落馬！これは何が落馬したんでしようか！ライスシャワー落馬！ライスシャワー落馬であります！大波乱、大波乱！第三コーナーの下りである、あの天皇賞では先行で渡ったライスシャワーが落馬しています！……』

『……ああ、無残！十六番のライスシャワー、左脚骨折……！第三コーナーの下りで大アクシデント……』

『……お知らせします。只今のレースで、十六番ライスシャワー号は、他の馬に關係なく故障を発症し、競走を中止し……』

淀の坂で最期を迎える、あなたが――。

胸が張り裂けそうになる。もう助からない。駆け付けた人たちの誰もが悲痛な面持ちで、あなたをターフ上に横たえる。泣いている人もいる。その場に幔幕が張られ、白衣を着た人が注射器を取り出し、そして――。

そこで脳裏を流れていた景色は終わった。永遠とも思える刻の狭間で私は見た。別世界の同じ名を持つ魂が歩んだ運命、その全てを。

そう。今日の前に悠然と佇む見たことの無いこの生き物は――あなたは、他でもない

私。ライスシャワーの魂そのもの。私の辿った末路はまさしく元の魂が歩んだ運命の再現だった。私が宝塚記念で、淀の坂で最期を迎えるのも必然だった。全てが繋がり、合点がいった。納得もした。やっぱりこれが運命だった、私のウマ娘として定められていた運命だった。そう独りで得心した。諦めがついた、そんな気持ちだった。

しかしそんな私の心中を見透かしたかのように、あなたは突然私の元に再び近寄り、大きな口で私の腕を引っ張り上げる。

何をするの——？

不思議と痛みは無かった。これから眠りにつこうとしていたところを強い力で揺り起こされた私は、その場で立ち上がらされる。思わずよろけそうになった背中を、額と鼻梁でぐいと押し支えられた。起きなさい、と言われているようだった。

もう眠らせてよ——起きている意味がないんだもの。

そう訴えかける。あなたと視線がぶつかる。本当にそうかな、とつぶらな瞳が言い返してくる。

だつてもう——私は誰にも必要とされないから。

(そんなことはない)

今度のはつきりと聞こえた。初めて聞いた、精悍なあなたの声。実際に声を発したのではない、直接心中に語り掛けてくるようなテレパシーの様な声なき声。

(聞こえないか)

あなたは毅然と云う。長い頸を上げ暗闇の彼方を仰ぐ。するとどうだろう、見上げた先の闇がぼうつと輝き始める。暗闇の中に差してきた二つの眩い白い光芒。耳をよく澄ますとそこから微かに聞こえてくる。

「ライス、目を開けて下さい、ライス」

「お願いです、目を覚まして。ライスさん」

——!!ブルボンさん。マックイーンさん。

運命はもう決したのに、二人ももう分かっている筈なのに、それでもまだ……。まだ諦めまいと向こう側から呼び続けている。枯らすことなく絶えず必死に声を上げ続けている。あんな目に遭わせたというのに、二人はまだライスを必要としてくれるの？

(あなた達がなぜその姿で魂を受け継いだのか考えてみなさい。あなたには共に歩める同胞がいる。言葉を交わし、手を取り合い、心通じ合った者達と共に、助け合つて進む力がある。時代や舞台の垣根を越えて)

隣に立つあなたが云う。私がウマ娘として在る意味。それはかけがえのない仲間を見出すためののだと、私達は共に支え合つて生きていけるのだと。

(これはかつてのわたしたちには無かったもの。何物にも代え難き尊きもの。そして、運命を乗り越えられる唯一のもの)

光芒が徐々に大きくなっていく。私を覆う深い暗闇を打ち払い、今自分がいる場所を露わにしていく。ひゆう、と風が吹く。目の前を紅の彼岸花が散り散りに舞っていく。その花吹雪の彼方に、景色が浮かび上がる。淀の坂の先。第四コーナー。そしてホームストレッチの彼方には、ゴールが見えた。

（あなたを想う声が在る限り道は拓き続ける。運命など決まっではない）

そう言うあなたの姿が徐々に薄らぎはじめた。闇が払われるのと共に、その漆黒の馬体も消え入るように光に包まれていく。待つて、と反射的に手を伸ばそうとする。しかしあなたは目を閉じ、どこか満足気に頸を上げて尻尾を揺らした。

（還りなさい。あなたのあるべき処へ）

私の視界が白一色に変わった。

そして次に目を醒ましたとき。私の視界には二人の姿があった。

「ライス……ライス！目を醒ましたね」

「よ、良かった。ライスさん、本当に……良かった」

ブルボンさんとマックイーンさんに、二人に抱き起され私は目を醒ました。スタンドの観客席から駆け付けてきてくれたのだろうか。周りには他にレース場の係員や救急要員の人もいた。

一体どれだけの時間が経ったのだろうか。とても、とても長い間、夢を見ていたような気がする。怖ろしくも儂い、夢の形見が、余韻のように胸の奥にまだ微かな熱として残っている。でもきつとこの二人が呼んでくれなくては、彼岸の向こうから私を呼び留めてくれなければ還つてこれなかつたと思う。

目から熱いものがこみ上げてきて、自ずと溢れた。我慢できそうにない。涙だ。もう流すことも無い、流せはしないと思つていた涙。止まつていた精神が打ち震える。心が叫ぶ。今こそ伝えるんだ、私の意思を、と。

「ごめん、ごめん。一緒に居てくれたのに、見守つてくれていたのに。なのに私は、ライスは応えられなくて、二人に、……」

上手く言葉が紡げない。溢れ出る、止め処なく零れる思いだけが先に行く。二人は何も言わずただ頷く。焦らなくていい、ゆつくりでいいんだよと語り掛けるように寄り添つてくれている。

「ライスはまた、また二人を不幸にただけ……本当に、ごめんなさい。ごめんなさい」私に関わつたばかりに二人は無敗の三冠と三連覇という夢を失つた。さらには差し伸べてくれた手を打ち払うような仕打ちを加えた。私の精神の弱さの所為で、私自身の運命に二人も巻き込んだ。私以上の苦しみを味わせた。悔やんでも悔い切れない。謝つても謝りきれるものではない。本来ならばそんな二人に私が救われていい筈が無

い。

「不幸なものですか。こうしてまた、あなたと会って話が出来る」

「それが不幸の筈がありませんわ。ライスさん……！」

なのに二人は大粒の涙を流して、言葉をくれ、手を取つてくれる。心を通わせてくれる。こんなに幸せなことはないのだろう、とあらためて胸を打たれる。ずっと忘れていた、最も近くにあったのに気付いていなかった。『あなた』の言つた通りだった。これが運命を乗り越えられる唯一のものだった――。

私達は三人で抱き合いさめざめと泣いた。今まで募つたわだかまりや恩讐をまとめて清算し洗い流すように、元のあるべき三人へと還るために。

やがて会場の騒めきは収まっていった。事態のいきさつを察した観客も落ち着きを取り戻していく。レースもとうに私以外のウマ娘達がゴールして終わっていた。

ひとしきり泣いたあと、係員の人たちが治療を促してきた。レース中の故障につき、場内の医務室で検査を行うのでそちらまで搬送したいのだという。

「さあ、ライス。肩を」

「すぐ診ていただきましょう」

ブルボンさんとマッククイーンさんが肩に腕を回し、ターフ上から私を起こしてくれる。間近に搬送用の救急車も控えていて、そこまで支えようと杖代わりになつて歩いてくれた。スタンドからは僅かに拍手も起こっていた。今の私達三人の姿を見ての感嘆を込めてのものだろう。

二人のおかげで破滅の運命は乗り越えられた。とは言え左脚に故障は負つた。元に戻るまでどれくらいかかるのか、それ以前にまた走れるのかの見当も付かない。それでも確かに私は運命を乗り越えられた、何よりも大切な仲間の助けで……今はただそれだけで気持ちが一杯だった。

だけどその時。二人に足取りを支えられ、ゆつくりと一歩ずつ歩いていたその時だった。故障して動かなくなっていた左脚が、ぴくりと動く。自分でも信じられない。強烈な痛みはあつたが確かに動いた。恐る恐る、芝の上に左脚を着けてみる。

「いけませんわ、体重をかけては」左半身を支えているマッククイーンさんが慌てて云う。でもその時には既に左足が地の感触を確かめた後だった。

同時に、風が頬を掠めた。ついさつき夢の中で感じたのと同じ風だ。あの悍馬の足音が、嘶き声が聞こえた気がして振り返る。かぶりを振った先に広がる第四コーナー、ホームストレッチ。その彼方に見えるゴール。

風はまだ、吹いている。

そうだった。まだだ——まだ越えていない。まだ完全に乗り越えられていない。私はおもむろに二人から肩を離す。左右から不安そうに見つめ返してくる二人に私は精一杯の勇気を込めてこう告げた。

「ブルボンさん。マックイーンさん。あと一つだけ、ライスの我が儘を聞いてくれますか」

「わがまま、ですか」

「なんですの、それは？」

「ライス、行きたい。この宝塚記念だけは、あのゴールまで行きたい」

私の発した言葉に二人は目を丸くする。そして周囲の係員の人たちも仰天し真っ先に口火を切ってきた。「なにを言うんだ」「怪我をしているんだぞ」「診てもらうのが先だ」と。それが当然の反応なのは自分でも分かっている。

ブルボンさんとマックイーンさんも、憂いを含ませた表情でお互いに目配せをし合っている。突拍子もない発案を受け、どう諫めるべきか反応に困っているという風情だった。

だけどそれでも。このレースだけは、この宝塚記念だけは勝ち負けに関係なく行かなくてはいならない。あのゴールまで行かなくてはならないと、不意にそんな使命感が湧き

上がってきたのだ。

果たして私のその意思を読み取ったのか。しばらく黙っていたブルボンさんとマツクイーンさんはおもむろに私へと向き直る。反対されるだろうかと思つた矢先、二人は穏やかな表情に変わつてこう続けた。

「分かりました。しかし絶対に、無理はしないで」

「悔いの残らぬよう。行つて来て下さい」

屈託のない表情で二人はそう云つた。言葉足らずであつたらうにまるで全部わかつてくれているようだった。私の運命のこと、それをここで越えねばならないこともし。

そうと決まればこうしてはいられない、感傷に浸るのはまだ早い。二人に深く相槌を打つと、私は踵を返す。あらためてコースに向き直る。第四コーナーが眼前に広がる。何度も走ってきた淀のコースがとても広大に感じる。

私は深呼吸を一つし、心の準備を終えたのち一步を踏み出した。右脚、左脚、右脚、左脚と、ターフの感触をあらためて確かめるように少しずつ進み始めた。

「待ちなさい、どこへ」「もうレースは終わっているんだぞ」「戻るんだ」背後から矢のよな制止の言葉が続々と飛んできた。迷惑を掛けているのは分かっている。身勝手をしているのは分かっている。だけど今だけは、このレースだけは内から湧き出るウマ娘

としての本能、走る為に生まれてきたという本能に従わなくてはならない。ゴールまで、行かなきゃいけないんだ。

「行かせてあげて下さい。このレースはライスにとって——」

「そうですね。ここが彼女の、越えるべき場所——」

遠ざかる淀の坂から、制止しようとする係員達を押し留める二人の声が微かに聞こえてくる。ブルボンさん、マックイーンさん。私の本当に大切な人たち。本当にありがとう。二人に今まで与えてしまった不幸の数々を変えてみせる、この淀のターフで。だから見ていてください。ライスは行きます、あのゴールまで必ず。

『えっ……これはどういう事でしょうか。故障したライスシャワーが再び走り出した、第四コーナーに差し掛かっていく。既に決着を見た宝塚記念、ここで再び思わぬ展開。十六番ライスシャワーがレースを再開した！しかしその足取りはとて重そうだが』

驚きと困惑の入り混じった赤坂さんの実況が再び場内に響く。それに煽られたようにスタンドの観客達も再び騒めき出した。

「お、おいあれ」

「嘘だろ。レースは終わったのに、まだ走ってる」

「あのウマ娘、怪我したのにゴールまで行くつもりなのか」

「無茶だよ……もう走らない方がいいのに」

そうかも知れない。ここで走るのを止めて治療してもらった方がいいのだろう。その方がきつと確実であるし、楽なのだろう。でも理屈じゃない。今の私を衝き動かしているのは理屈でも運命でもない。

第四コーナーの半分まで差し掛かる。遠い。とても長く遠い。実況に指摘されたように足取りは重かった。レース場がこんなに広く遠大だと感じたことは無かった。転倒の影響で身体じゆうが軋んでいる。これでは歩いているも同然の速度しか出せない。それでも止まってはいいない。少しずつでもゴールへ近付ける。

『ようやく、ようやく第四コーナーを終えますが、辛い表情だライスシャワー、苦しい足取りで長い長い最後の直線へ』

やっとの思いで到達したホームストレッチ。ゴールはまだ遙か彼方、蜃気楼の中に揺らめいている。間近に迫ってきたスタンドの振動が身体に伝播してくる。想像していたよりもずっと辛い。左脚の痛みは依然強烈だった。地に着くたびに絶叫が漏れそうになるほど、気が遠くなるほど痛い。

それでもまだ動く。動く限り前に進める。

『スタンド前へ、ライスシャワーようやくスタンド前を通る。故障による競争中止と思われた彼女ですが、その足を止めるつもりはないのでしょうか。大観衆の前を一步ずつ進む……！』

思うように上がらない左脚がターフの窪みに蹴躓く。激痛に思わず膝をついた。間近の客席からわつと悲鳴に似た声上がる。吹き出た脂汗が地面に零れて落ち、痛みのあまり視界はぐにやりと歪んだ。身体はもう限界に近い。

でも、それが、どうした。歯を食いしばって、形振り構わず立ち上がり、足取りを再開させる。

「うっ……とても見てられないよー！」

「も、もういい十分だ」

「お願い、もう無茶はやめてー！」

近くの観客席からそんな声が聞こえた。心配してくれてありがとう、でも、やめるわけにはいかない。ここでやめたら、諦めてしまったら。私に全てを託してくれた『あなた』が、安心して還れない。

これくらいの苦しさが、痛みがなんだ。

あなたは——ライスシャワーはひとりで戦ってきた。

ブルボンさんと走った菊花賞も、

マックイーンさんと争った天皇賞も、

あの辛かった低迷期も、

復活を果たせた二度目の天皇賞も、

そして、この宝塚記念も。

たとえヒールと罵られても、歓喜と祝福を得られなくとも、

あなたは最期まで戦い抜いた。文字通り魂が燃え尽きるまで戦い抜いた。

あなたは誰よりも熱く、強く生きた。その魂を継いでいるのは私だ、私なんだ。

運命を乗り越えるのは私自身だ。

仲間に助けられているだけじゃない。その手を取って、起ち上がって、私自身の足で

乗り越えなくちゃいけないんだ。

絶対に克つ、克ってみせる。

だから私はいま走っている、本当の意味で運命を越える為に。

運命は決まっていない。

運命を決めるのは私なんだ！

自らを鼓舞するように。奮い立たせるように。私は自分に強く言い聞かせる。心底へと叫ぶ。そして、それに返事が来たかのようにだった。『あなた』の勇壮な声が私の心に響き渡る。あなたが私にくれる最後のメッセージだと直感的に分かった。

（わたしの為し得なかったこと、見ることの叶わなかった景色を、あなたが見届けなさい。それこそがわたしの魂を受け継いだ、あなたの運命なのだ。

志半ばで潰える無念を、あなたにまで負わせはしない。

おゆきなさい。走れ、ライスシャワー！

わたしの名を継ぐものよ——)

その言葉で全てが吹っ切れたようだった。視界が涙で滲み、不明瞭だった頭の中が晴れ渡る。少しだけ足が軽くなったような気がして私はペースを上げた。スタンド前で微力ながらラストスパートに入った。

『これは……スタンド前、凄い歓声が上がっている！こんな光景は初めてです、ライスシャワー、少しペースが上がったのか！ゴールへと近付くぞ！』

「凄いぞあのウマ娘。何が何でもゴールする気なんだ」

「が……頑張れ！ライスシャワー」

「そ、そうだ。あとは直線だけだ」

「頑張れ、ゴールまで辿り着け！」

皆の声を押してくれる、私の背をゴールへと押してくれるかのようだ。私はファン投票最多得票でこの宝塚記念へ選出されたのだという。声援が多いのは、それだけ多くの人がゴールを心待ちにしてくれているのだろうか。勝利を手にすることは出来なかった、その上故障をしてしまった。でもせめて、せめてこの声援に応えよう。初めて受けたヒールとしてではない声に、ささやかながら報いよう。

『残り二〇〇メートルを切った、誰も居なくなったターフをただ一人、ライスシャワーが

往くぞ！ファン投票最多票、場内の誰もがエールを送っているぞ！」

息が詰まり肺は苦しい。それでも前のめりになりながらも必死に駆ける。前傾した私の視線に映る、勝負服仕様の烏黒のパンプスシューズ。誕生日にブルボンさんとマツクイーンさんがレース用に新調してくれたもの。この僅か数か月ですっかりボロボロになってしまった。特に左側のシューズは転倒の衝撃で大きく拉げて蹄鉄も欠損してしまっている。でもその毀れようはまるで、左脚へのダメージを幾分か肩代わりしてくれたようにも思えた。

後で直そう。二人が私に贈ってくれたものだ。また履けるように、この靴でもう一度二人と走れるように。

『さあもう少しだ、頑張るぞライスシャワー！届かないと思われた宝塚のゴールまであと一〇〇メートル！』

遂にゴールが見えてきた。二度と届かないと思われたゴール。その向こうに待っているものを予感する。

(ブルボンさん、マツクイーンさん。やっと分かった、見つけたよ。ライスが望んだものが見える、あのゴールの向こうに——)

「行け——！ライスシャワー！」

「頑張れ！あと少しだ！越えろ——！」

「もうちよつとだ走り切れッ——！」
「ゴールはすぐそこだ!!」

割れんばかりの歓声が私の身を包む。スタンドから届いてくる声の一つ一つが、私の心際限なく熱をくれる。

あと一〇〇メートル、九〇、八〇——。

私に関わってくれた大切な人達へ、感謝を捧げながら。一步一步を踏みしめながら。

六〇、五〇、四〇——。

目前で私は振り返る。遙か後方に遠ざかっていく第三コーナー、淀の坂。そこでブルボンさんとマックイーンさんがこつちを見ている。表情までは窺えないが、紛れもなく見守ってくれている。

そこにもう『あなた』は見えない。いつも夢の中で第三コーナーまで追ってきたあなたの姿はもう見えない。今ならば分かる。思えばあなたはあの悪夢の中でいつも私を追いかけてきた。私はそれを死神が追ってくるかと錯誤していたけれど、そうじゃなかった。あなたは運命に操られるがまま身をやつしていた私を止めようと、ずっと必死に追いかけてきてくれたのだ。

最後にきちんとお礼を言いたかったな——。

そう思いかけたところで気付く。あなたはいなくなってしまうたんじやない。そう

だったね。その魂は——そう、私の中にある。同じ名を持つ魂として。

「あなたの思いは、ライスが、あのゴールまで持つていくから——」

残り三〇、二〇、一〇。

私の視界が真っ白に染まっていく。久しく忘れていた感覚。生まれて初めてレースで勝った時と同じような感覚だった。永く望んできた歓喜と祝福。皆の喜びが、降り注ぐ。

その瞬間、場内の声は最高潮を迎えた。

この日、京都レース場にて一つの事件が起きた。あるウマ娘のレース中の転倒、故障。それは『淀の悲劇』と呼ばれ、競走界とそれに関わる人々に深い傷を残すかと思われた。だが受け継いだ遺志を宿し、二人の仲間に支えられた彼女の脚は挫かれることなく、永い時を経て遂に淀の決勝線を越えた。レース記録は競走中止ではなく、十七着入線——。ゴールの瞬間に大観衆から万雷の拍手を受けた姿は、紛れも無くヒーローそのものであった。

時に、永世七年六月四日。第三十六回宝塚記念での出来事である。

終章

ちらりと腕時計に目を遣りながら、シンボリドルフは足取りを心持ち速めた。時間が押している。やはりスケジュールには余裕を持たせねばという自戒が浮かぶ。

トレセン学園上階の生徒会室を目指し、彼女は廊下を足早に進んでいた。すれ違う生徒達への挨拶もそこそこに、大食堂の脇を通りかかった時だった。食堂内がやけに騒がしいことに気が付く。

見ると、大勢のウマ娘が人だかりを作っている。時間的に昼食のピークというわけではない。集まった生徒達は、食堂内に設置された大型テレビジョンの前に陣取っているらしい。それはトウインクルシリーズの大レースが中継される際に、度々見られる光景だった。

「そういえば、今日だったか」

食堂の喧噪を尻目に、ルドルフはすぐにまた歩き出した。忙しきにかまけて、世間的に注目されるレースの日程把握も曖昧になっている自身に若干の嫌悪も噛み締めながら。

あれから一年が経過した。毎年そうであるように、丁度この時期は春のレースシーズ

ンに当たる。中央・地方も含めれば毎日のように各地でレースが開催され、世間を大いに賑わせている。

中央の生徒会長という立場上、ルドルフもこの時期はやる事が多い。一選手としては既に一線を退いた彼女は、今は学園やレースの管理・運営、URR Aとの調整・陪席といった仕事の主であつたが、これらはしがらみも多く政治的色合いが強いものだつた。一人のウマ娘としてターフを駆けた現役時に比べれば、果たすべき役割も、求められる能力も、背負うものも大きく変わった。決して他人へ漏らすことはないが、時折彼女はあの頃に帰り、頭を空にして心行くまで走りたいと思うこともある。

この日も界限の重鎮達との会合が長引き、学園に戻る時間が予定より大きく遅れた。しかし間が悪いことに、さらなる用事が重なつていた。次は生徒会室でURR Aとの打合せが控えている。今は他の生徒会面子も出払つており、これもルドルフがこなす段取りだつたのだ。

彼女がようやく生徒会室に辿り着いた時には、時計は予定時刻きつかりを指していた。遅刻ではない、が、余裕を持つて物事に取り組みたいルドルフにしてみれば本意ではない。第一、相手を待たせてしまつているかもしれない。取り急ぎ彼女は生徒会室へと入室した。果たして部屋の中には、既にURR Aからの来客達が到着し、応接間で着座していた。

やはりこうなったか、とルドルフは忸怩たる思いだったが、それは一瞬だけだった。来客達に向かい合つて座る、一人のウマ娘の姿が目に入ったからだ。

「あ、カイチョー。お帰りなさい」

「テイオー。どうして……」

ルドルフは目を丸くした。来客応対をしていたのはトウカイテイオーだった。しかも客間のテーブルには、応接用のティーセットや、打合せの為に予め用意しておいた資料が既に広げられている。その状況から察するに、ルドルフが戻らぬうちに訪れた来客をテイオーが代わりに応接し、そのうえ予定していた打合せも開始している様子であった。

来客を待たせることなく済んだと安堵する反面、ルドルフは内心面食らった。テイオーが生徒会の手伝いをしているのは勿論承知している。これまでも生徒会室を空ける時、彼女に一時的に留守を任せただけがあった。今日もおそらく授業やトレーニングの合間の時間を持て余し、生徒会室に用事を求めて在室していた最中に、ちょうど来客が訪れたのだろう。だが明確な役職を持たない彼女に本格的な対外活動を任せただけは、未だない。にもかかわらず打合せを開始されたのが気掛かりだった。

だがそんなルドルフの懸念を汲み取ったかのように、テイオーは片目を瞑り、ルドルフにだけ分かるようにウインクをしてみせた。いいから任せてよ、そう言っているよう

に思えた。このまま続けさせてほしいという意思表示のようだった。

ルドルフは苦笑いを浮かべた。この用事はさほど重要な案件でもないが、仮にも生徒会を代表しての応対だ。大丈夫なのか。どうすべきか考える間も無く、テイオーは目線を戻し来客との対話を再開していく。

しかしそこからのテイオーの仕事ぶりにルドルフは目を見張った。当初の不安をよそに、終始丁寧な口調でテイオーは打合せを進め、角を立たせることもなく和やかな雰囲気、応対を遅滞なく完遂させた。相手から適宜挿まれる質問への返答や解説にも澁みは無く、それら受け答えもルドルフが自分ならこう答えるだろうと頭に浮かべたものとおおむね似通う、模範的にまとまったものだった。いざとなれば助け舟を出そうと思っていたが杞憂に終わり、ルドルフは胸を撫で下ろしていた。

打合せが終わると、URAの来客は生徒会室を後にした。彼らにとっても満足のいくものだったのか、去り際に交わした挨拶も好感触なものだった。

「すまなかつたなテイオー、留守中に助かった。それにしても驚いたな、まさか応対までこなしてくれるとは」

二人だけになった生徒会室で、ルドルフは手放してテイオーを称賛した。知らず知らずのうちに、生徒会の一員としても成長してきたのだな、と言うのが率直な気持ちだった。

「皆忙しそうだったからね。ちゃんと喋れてるか不安だったけど、どうだった？ボク、上手くできてたかな」

照れくさそうに頬を掻きながらテイオーは助言を求めた。場数を踏んでないがゆえ、重箱の隅を突けば改善点は幾つかあったが、取り立てて指摘するほどのものは無い。

「ああ。しつかりと、生徒会の役目を果たせていたよ」本当によくやってくれた、とルドルフはテイオーの頭をぽんと叩いた。

「恥ずかしいってば、カイチョー」

頬を紅潮させ、テイオーはまんざらでもない表情ではにかんだ。が、すぐさま首をやんわり振ってルドルフの手を払った。

ルドルフは、ほんのちよっぴりシヨックを味わっていた。少し前までは同じようにしてもされるがままだったのが、最近は精神的に大人びたのだろうか。現役時、ダービーを獲った記者会見場でテイオーと初めて会った時にも頭を撫でてやった。あれから随分と時は流れ、テイオーは心身ともに大きく育った。成長期を迎える子を持つ親の気持ち、という言葉が浮かんだ。

同時に、一年前の宝塚記念直前のやりとりが蘇った。

緊急措置により京都レース場で宝塚記念を開催する。URAからなされたその発表を知った時は、さすがのルドルフも狼狽した。もはや形振りなど構っていられない。自

らの立場や責務をなげうってでも止めなくては——そんな破れかぶれな考えに至りそうになった時、テイオーが現れた。平静を失いかけていたルドルフを諭すように、その時テイオーはただ一言こう告げた。

「信じよう、あの三人を。きつと大丈夫だよ」

その時のテイオーの目は、今でもルドルフの脳裏に焼き付いている。いつもの見馴れたあどけない目ではなかった。遙か彼方を見通すような、まるで何かを悟ったような澄みきった目。それに心を真つ直ぐ突かれるような思いを味わったのだ。

ルドルフはその後、思い止まった。何故かは分からないが、テイオーの言う通りに従おうと思った。不思議と、自分も信じてみようと思えたのだ。その結果が如何なものとなったかは、もはや語るまい。

しかしはつきりと分かることがあった。ルドルフも認めざるを得ない事実だ。一年前の事件で、テイオーの判断はルドルフを越えていた。出場差し止めという安直な方法しか提示できなかったのに対し、テイオーの三人を純粹に信じるという案は、一見無謀にみえたが、見事に実を結んだのだ。

テイオーはライスシャワーが運命を乗り越えられると信じていた。そしてそれは現実に果たされた。あの宝塚記念後、ライスの怪我をおしての完走劇は、奇跡のゴールインとして語り草になっている。

奇跡。まさにその通り、奇跡だ——ルドルフも最初はそう思っていた。

だが、本当はそうではないのかもしれない。奇跡などという言葉で括るのは誤りなのかもしれない。テイオーにとってはあの有馬記念の復活劇も、ライスの完走劇も、奇跡でも何でもない、ウマ娘として為そうとした努力や寛容、融和の必然的結果なのかもしれない。それを前にしては『運命』などというものは、所詮何ら意味を持たない、自らの可能性を縛る暗示に過ぎないのかもしれない。

テイオーはあの時、自分には見えない「何か」が見えていたのだろうか、とルドルフは考える。『何か』とは、一言で言い表すならば、いわば自分達ウマ娘の秘めたる可能性。走るために生まれてきた総てのウマ娘が最後に帰結するという、気高き真理のことだ。

それはルドルフも生徒会長として模索し、今なお追求し続けている理想の形だ。『ウマ娘の誰もが幸福を得られる時代を目指す』という、歴代のトレセン学園生徒会長が果たせずして受け継がれてきた宿願。だが日々の職務に忙殺され、真理を見極める目を曇らせつつある自分は今も、理想を追い求めるには時機が過ぎたのかもしれない。

かつてどこかで聞いたことがある。『帝王は皇帝を超えたかもしれない』という言葉。それが今、ルドルフの身にどこか温かく沁みだ。

あまねくウマ娘を導いていくに相応しい、若き慧眼を持つ者。今後そんな者が現れたならば、いつでも生徒会長の座は明け渡しても構わない。なぜならそれは、ウマ娘の未

来に資するものだから。これはルドルフが常々考えていたことだ。

、案外その時は、遠からず訪れるのかもしれない。

テイオー。あの時お前が見せた澄んだ目は、その証左なのではないか――。

その小さな眩きは、テイオーの耳には入らなかつたらしい。見た目相応の少女に戻った彼女は、ふと目を向けると生徒会室の部屋中を慌ただしく物色している。

「もうこんな時間だよ。早くしないと始まつちゃう。ええつと、ええつと」

何かを探しているらしい。ルドルフには何を探し求めているかすぐに分かつた。応接用のソファの隙間にあつたそれを拾い上げると、まあ慌てるな、とそのボタンを押す。生徒会室に備え付けてあるテレビのリモコンだつた。

黒一色だつた大型スクリーンの電源が入ると、テイオーは真つ先にその真ん前に陣取つた。今日行われる一大イベントを、彼女も注目しているらしい。

無理もないな、とルドルフは表情を綻ばせた。

画面上には、京都レース場のパドックが映し出されていた。

先客がいる。この場所で彼女は初めて人に会つた。比較的小柄な身をカジユアル

スーツに包み、古ぼけたハンチング帽を目深に被った壮年の男だった。レース場の職員とは異なる雰囲気を感じられる。男はじつとその場所で立ち尽くしていた。

京都レース場の片隅、ほとんど人の訪れることのないパドック裏手の閑寂な外苑にそれはあった。手入れの行き届いている庭園の端にぼつんと佇む、苔生した石碑。京都レース場が設立された当初は無かった筈のそれは、気が付けばいつの間にかそこにあったのだという。誰が何の目的で設置したのかも判らず、安易に撤去することも出来ぬまま月日が流れ、今では知る人ぞ知るレース場の隠れスポットと化しているのだという。

随分と長い間雨風に晒されてきたのだろう、人の背丈の半分にも満たない大きさの碑はすっかり風化して苔生し、表面に文字らしきものが彫られているのは分かるがとても判読できたものではない。

男はその碑を前にしゃがみ込んでそっと小さな花束を供えた。菊、ユリ、カーネーション等、献花に用いられる種のものだ。そのまま地に膝をつけ両手を合わせ黙祷する。その背中に得も言われぬ寂寥を感じ、すぐ後ろで見ていた少女は小さく息を呑む。意を決した少女は遠慮がちに男の横へ並び、一緒になつて黙祷する。来訪者がもう一人いたと気付いていなかった男は少し驚いた様子だったが、すぐにまた黙祷を再開した。

そのまま静かに時が流れる。風の音だけがその場に流れていた。やがてその風に

乗って、微かに群衆の騒めく声が聞こえてきた。レース場の方からだ。この日も淀のターフではいつもと変わることなくレースが催されている。

数分が経過し、男はおもむろに立ち上がった。あらためて石碑を見下ろし立ち尽くす姿には哀悼と悔恨の念が滲み出ている。

「あの……このこと、ご存じですか」

顔を上げて少女が躊躇いがちに問う。彼女はこの石碑をあの日以来何度か訪れている。彼女もまたこの場所の存在をそれまで知る由も無かった。そこで思いがけず邂逅したその男が不思議と見知らぬ人物には思えなかった。

男は空を仰ぎ少し何かを考える様子を見せたのち、ぽつぽつと口を開き答える。

「昔、友がいた。彼は僕達にとって大切な相棒だった」

過去を振り返るように男は語り始める。温和で懇ろな印象を与える声だった。目深に帽を被っているためその表情ははっきりとは窺えない。

少女はしきりに相槌を打ち、その話に関心する。

「僕達は一緒に戦った。勝つても負けても、苦しくとも辛くとも、来る日も来る日も命懸けで戦った。でもね、ある日彼は死んでしまったんだ」

「うん……」

「そして僕達だけが生き残った。残された者に出来るのは、こうして花を手向けること

ぐらいだ」

目線を碑に落とし、男がトーンの落ちた声で云う。風に煽られた献花が揺れ、頭上の樹の枝から小鳥が慌ただしく飛び立っていった。

「彼は無理をし過ぎた。いや、僕達がそうさせてしまったというべきだ。きつと彼は恨んでいるだろう」

自嘲気味に男は云い、帽子のつばを下に引いた。表情を悟られまいとしたのだろう。肩が細かく震えている。先程から感じられた哀悼と悔恨の気配が一際大きく膨れ上がったようだった。

「そんなことないよ」

それに対し少女はきつぱりとそう告げる。確信を込めた眼で男の横顔を見上げる。毅然とした、芯の強さを感じさせる姿に男は「どうしてだい」と問い返した。

「ヒーリングじゃなくてヒーローなんだって、大切にしてくれた人達のことを、恨んでなんかいないと思うよ……」

目を閉じながら少女はそれだけを言った。本当はもつと言うべきことが、伝えるべきことが沢山ある。しかし上手く言葉にできそうにない気がした。そんな中で思わず口を衝いて出た一言だった。

遙か遠い別世界から来た、彼女の中に眠る魂は知っている。自分を家族のように思っ

ていてくれた者達との思い出を。共に過ごせた日々は決して長くなかったけれども、心で確かに繋がりあえていた時間の全てを。そしてその思いは今も生き続け、この先も紡がれていくのだろう。彼女の歩む新たな運命と共に。

「君の名前は」何かに気付いたかのように、ハツとした声色で男は訊ねる。

少女は美しい双眸を見開き、凜然とした面持ちでこう云った。

「私はライス、ライスシャワー」

風が鳴り止む。それを聞いた男は少女の方に振り向いたまま、固まっていた。その時初めて帽子の下の表情が露わになる。

「……そうか。いい名だ」

男はその名を噛み締めるように、深く頷く。その表情から悔恨の気が幾分か和らいでいるように思われた。

少女は——ライスシャワーはあらためて思う。『ウマ娘とは、走るために生まれてきた。ときに数奇で、ときに輝かしい歴史を持つ別世界の名前と共に生まれ、その魂を受け継いで走る。それが、彼女たちの運命』その言葉の本意。自分は託されたのだ。かつて存在した崇高なる魂を、この身に。

それは受け取りようによっては、呪いとも取れるのかもしれない。事実、自分はその重みに押し潰されそうになった。運命の渦に呑み込まれそうになった。だがそんな時

に自分の手を取りそれを乗り越えさせてくれたものは何だったか。繋がり大切さを、かけがえのなさをあの宝塚記念であらためて教えられた。

ウマ娘が、一着を得るため戦うのは当然のことだ。そしてウマ娘だからこそ、本気で戦い、ぶつかり合った後に、互いに手を取り合える。それこそがウマ娘として魂を継いだ所以なのだろう。自分達はその真価を常に試される戦士なのだ。その思いを胸にこの先も走り続けよう。未だ知らぬ自身の運命を見届けるために――。

「ライスさん、どこですの。そろそろ時間ですわ」

「パドックの裏手に、反応。やはりいつもの場所かと」

声が聞こえてくる。少女を待っている、大切な者達の声だ。ライスは立ち上がると声のした方を仰ぐ。二人が待っている。すぐ戻るつもりだったけれど心配で探しに来てくれたらしい。行かなきゃ。

「行つて来ます」

ライスはペコりと男に一礼した。間も無くレース場ではその日のメインレースが始まろうとしている。

「思い切り、楽しんで走つてきなさい。応援してるよ」男はそう激励し柔らかな笑みを浮かべた。

「うん！」その言葉以上のものを受け取ったライスも、満面の笑みを浮かべて駆け出して

いった。

もう、大丈夫だな——少女の背を見つめながら、男は安堵と寂寥を人知れず嘯み締めた。

かつての友の魂は運命から解き放たれ、未だ見ぬ明日へと歩んでいく。数多くの同胞たちと希望に満ち溢れる未来へ進んでいく。

もう縛るものは何もない。駆けてゆくがいい、どこまでも。その先にはお前が見られなかつた世界が、果てしなく広がっているはずだから……。

直後、雲間から陽光が差す。光はその場にひとり残つた男のもとへ降り注ぎ、そのシルエツトが徐々に薄らいでいく。彼は消え入る寸前、もう一度石碑の前にしゃがみ込んで表面に指先を伝わせる。するとどうだろう。びっしりとこびり付いていた苔がぼろぼろと剥がれ、彫られていた文字がくつきりと浮かび上がった。

そこに書かれていたのは——。

“青嶺の魂 疾走の娘となり”

「やつと……届いたな」

天を仰ぎ男は感慨深げに呟いた。彼の姿は眩い光の中へと消えていく。遙か彼方へと還つていく。最後にレース場へと遠ざかっていく少女の背を、男は脱帽し最敬礼で見送った。

『……さあいよいよ本日のメインレース！あれからはや一年、誰もが今日という日を待ちわびました。それぞれの苦難を乗り越え、万感の思いを乗せて、遂に実現する夢の三つ巴。伝説の三人が同じターフに帰ってきた！栗毛の超特急、ミホノブルボン！名優、メジロマツクイーン！そして悲劇を乗り越えたヒーロー、ライスシャワーだ！さあ全てのウマ娘が枠入り完了、ドリームマツチのゲートがいま……開いた！』

祝福を継ぐもの（完）

あとがき

筆者が初めて競馬というものに触れたのは学生時代の頃だ。当時の私は勉強よりも娯楽を謳歌したい、典型的なダメ大学生であり、度々講義をサボっては属していたサークルの部室に入り浸っていた。部室には歴代OBが寄贈（放置）していった漫画や雑誌、テレビゲーム機とそのソフト、雀卓があり、冷蔵庫や電子レンジも完備されていたりと簡素なネットカフェの様相を呈していた。ある日そこへ来てみると、部員が数名、紙切れを握りしめながらテレビに向かって叫んでいる。画面を見ると映し出されているのは競馬中継だった。十数頭の競走馬が、一様に直線を駆ける姿に部員たちは熱狂している。差せ、だの、ユタカ、だの、口々に檄を飛ばしている。彼らのボルテージは高まっていき、叫びが最高潮に達した時、ゴールの瞬間を迎えた。

観戦していたうちの一人がありがとうウオツカ、と絶叫していた。競走馬の名前だろうか。他の部員は手にしていた紙切れを紙吹雪よろしく宙に放ったり、壁を殴ったり、雀卓をひっくり返したりと憤懣を露わにしている。その場に散らばった紙切れは、見てみると馬券だった。彼らは各々、鼻厘の馬に賭けていたらしかった。なお、勝利の雄叫びを上げていた部員は数週間後、通学に大型ネイキッドを使用するようになる。聞くところ

ころによると一山当てたぶんを軍資金にして購入した（仮にも学生の身分でどれだけの額を賭けてたんだか……）のだという。ウオツカのおかげでバイクを納車した……今思うと何だか因果にも感じる。

私はというと、そんな彼らを目にしても競馬への興味は然程わかenかった。学生になつてから色々な娯楽に手を出していたが、賭け事に不向きな性分であると自覚していたし、部員の大半が嗜んでいた麻雀さえも嵌ることはなかったので、彼らの競馬中継に一喜一憂する姿も「そんなに面白いのか？」と冷めた目で見ていた。

時が流れて十数年後。何となく就職した会社の仕事に追われながらも何となく日々を過ごしていたある日、スマホでネットサーフィンをしていると、ある広告が目にとまる。『ウマ娘 プリティーダービー』である。いわゆる美少女擬人化コンテンツ、それも競走馬がモチーフであるという。そのリリーススキャラの中には在りし日に私に競馬を知る契機を与えたウオツカもいた。これまた珍妙なものが出てきたな……とリリース当時は思ったのみで、コンテンツを追おうとはしなかった。

だがさらに数年後、私の『ウマ娘』に対する認識は一変する。きっかけはアニメの一期と二期を立て続けに視聴したこと、そしてその内容が競馬の史実を極めて忠実に再現していると知ったことだった。久々にこれは、と思わされるコンテンツに出会ったと今でも思う。『ウマ娘』製作者の、“原作”たる競馬界へのリスペクトや愛情に心を掴まれ

た私は、『ウマ娘』というコンテンツだけでなく、いつしか原点の競馬史を深く知ろうと動画やネットを見漁るようになっていった。自分が生まれるよりも前の古いレース動画や、有志による二次創作イラスト等は、芳醇なインスピレーションを与えてくれたものだった。

知らず知らずのうちに『ウマ娘』にのめり込んでいった私はいつしか、自分も何かしらそれに係わる創作をしたと思うようになる。そこで真つ先に思い浮かんだのが今作の主役である『ライスシャワー』だった。ウマ娘に登場する競走馬をおおかた把握した私の中でも、彼女の存在は一際儂く、印象的だった。競走馬として悲劇的な運命を辿ったという点や、それがアニメ二期では完全に描かれなかったということから、ならば自分が書いてやろうと筆を手にしたのが今作の誕生経緯となる。書き始めれば早いもので、約九万字と厚さ薄めの文庫本ほどの分量は約一か月で書き上がった。

さて、ここまでつらつらと書いておいて今更だが、第一に、ウマ娘というコンテンツの二次創作としてこの小説はどうなんだと自分でも疑問に思う。『ウマ娘 プリティーダービー』は擬人化コンテンツとしては異質だ。知つての通り、このコンテンツは昨今のゲーム・アニメ界隈とは切っても切れない関係にある二次創作・同人誌界隈に大きな「制約」を与えている。簡潔に言うと同作にあたる競馬界があらゆる意味でセンシティブであり、そのイメージや品性を損なうような創作発表は控えなくてはならないと

いうものである。

今作はそのイメージや品性に抵触することの無い作品に仕上がっているのかというと、おそらくグレイゾーンだろう。本文を最後まで読んで下さった方で、ライスシャワーという競走馬に関する知識を有するならばお気付きであろうが、冒頭と終盤に登場したある人物や、“原作”にあたる競走馬の直接のイメージに関わる描写などは、その規範から逸脱したものであろう。出過ぎた真似をしたとも思っている。しかしそれを承知の上で、私はそのように執筆し、作品を仕上げた。少なくとも今作に散りばめたそれら『出過ぎた描写』が、原作にあたる競馬界にとって損失を与える事はないような構成となるよう、配慮もしたつもりである。

ウマ娘が『別世界の名前と共に生まれ、その魂を受け継いで走る』という公式が掲げているコンセプトを、独自に解釈したうえで今作の方向性は決まった。ウマ娘・ライスシャワーは元の競走馬・ライスシャワー号の魂を受け継いでいる。ならば元の魂が、彼女に対して望むことは何だろう。私の妄想に過ぎないかもしれないが、それは、あの悲劇を乗り越えてくれる事に他ならないのではないか。そしてその先にある、自分が見られなかった未来を見せて欲しいのではないか——。そんな思いを『祝福を継ぐもの』という表題に込めたつもりである。

最後に、今作を読破して下さった皆様へ深く御礼申し上げます。宜しければ感想、批

評等コメント頂ければ幸いです。本当にありがとうございます。